
クレしん&ドラえもんズ～ホラー&ファンタジー劇場～恐怖のカスカベ吸血鬼タウン

虹純晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クレしん＆ドラえもんズ〜ホラー＆ファンタジー劇場〜恐怖の力
スカベ吸血鬼タウン

【Nコード】

N3734D

【作者名】

虹純晶

【あらすじ】

ドラえもんズが、21世紀の埼玉県春日部に呼び寄せられてしまった。そこでは恐るべき事態が進展していて、一人の子供が危機に……！ドラえもんズのダイヤモンドより強い友情が、今輝きを放つ……！！

1・タイムマシン暴走！（前書き）

クレしんホラーの話がめっちゃくちゃになってきたので、パワーアップさせて（？）リニューアルです。どうもすいません（泣）。朝日さん、設定パクってごめんなさい。でも読んでくれると嬉しいです。ちなみにドラえもんは登場しませんので、ファンの方は本当にすみません……。酷評でもじゃんじゃんお寄せください！！

1・タイムマシン暴走！

どうして？

どうなってるの？何でこんなふうに…。

分からない。何もかも分からない。分かっているのはただ一つ。ここから逃げなければならぬということだけだった。逃げなければ…逃げなければ、殺される！

ほんの少し前まで、友達だった人たちに……。

その頃。時は急激に進み、22世紀。

いつもの二人が、すさまじい口ゲンカを繰り広げていた。

「王ドラのせいだぞ！お前がデレデレしてるから、セニョリータたちが逃げちまつたじゃないか！」

「悪いのは自分ですよ、エル・マタドーラ！僕が女の子が苦手なの、知ってるくせに無理やりつれてきたりして……………」

「まあまあ二人共、落ち着くであーる。」

そして、またいつものように仲裁に入るドラメット三世。ナンパに失敗してご機嫌斜めなマタドーラを、王ドラから引き離す。

「そうだよ二人共、ケンカはいけないよ。」

拍子抜けするような口調で止めに入っただのは、サッカーボールを頭の上に乗せたドラリーニョ。

「ガウツ、ガウツ！」

ドラニコフも、仲間にしか通じないガウガウ語で二人をなだめた。

「そーだぜ、今はケンカしてる場合じゃねーぞ。ドラえもんはコレを届けてやらなきゃいけないんだから……………」

そう言つて、ドラ・ザ・キッドが彼の四次元ハットから取り出したのは、彼らドラえもんズの友情の証、『親友テレカ』だった。ドラえもんを含め7人が、一人一枚ずつ持っているのだが……………。

「ドラえもんたら忘れんぼだね、こんな大事なもののところへ忘れてくなんて。あはははは！」

「ドラリーニヨも人のことは言えんと思うがな。」

大笑いするドラリーニヨに、ドラメットがやんわりとつつこんだ。

「さあ、それより早く、タイムマシンに乗るぞ！」

キッドはタイムマシンを取り出し、みんなに乗るように促した。王ドラが、不安そうにそれを見る。

「大丈夫ですか？この人数で乗って……」

「大丈夫大丈夫　さあ、早く乗ろうよ！」

ドラリーニヨが樂觀的に言い、結局全員が何とか乗り込むことができた。

「うーん、やっぱり思ったよりきついかな？…ま、いいや、のび太んちへ向けて、発進！！」

ところが。

ピカッ！

「うおっ！な、何だ！？」

マタドーラが驚きの声を上げる。虹色の光が、それぞれの身体から放たれ始めたのだ。

いや、正確に言うと、それぞれの四次元ポケットや、四次元ハット、四次元袖、四次元マフラーから…………。

「な、なんですかあ、これは!？」

さすがの王ドラも金切り声を発する。キッドが慌てた声で叫んだ。

「や、やばい!タイムマシンが勝手に…………!!」

パシュンッ!

虹色の輝きに包まれながら、大騒ぎをするネコ型ロボットたちを乗せたまま、タイムマシンは消えた。キッドの制御を離れ、どこか、遠いところへ。

ドラえもんズの不滅の友情の助けを、求めている者のところへ…………。
…。

1・タイムマシン暴走！（後書き）

ドラえもんズとカスカベ防衛隊のあのキャラがタッグを組みますが
：私の他の小説を知ってる人は、ある程度誰か予想はついていると思
います。頑張って書いていくので、間違いとかあつたらどんどん言
ってください！ドラえもんズの方は未熟（？）なので……。

2・親友テレカの異変

「な…何ですか、ここは一体……？」

王ドラは、周りに広がる光景に唖然としていた。

周囲は一面に夜の闇ばかり。はるか下方に、無数の小さな明かりが見える。

ドラえもんズを乗せたキッドのタイムマシンは、どういうわけか空中で立ち往生していた。

「ねーねー、あのいつぱいある光はなんなの？」

「ふむ…どうやらあそこに、大きな街があるようであるな。」

ドラリーニョの質問に、ドラメットが答えている。エル・マタドーラが文句を言い始めた。

「つーかよ、何でこんなとこにタイムマシンがあるんだ？のび太んちは？」

「知りませんよ！でもいつまでもこんな状態でいるわけにはいきませんし……」

「だーいじょうぶだよ、キッドを起こして操縦してもらったらいいいんだ。これはキッドのタイムマシンなんだから。」

「おう、そうか。ドラリーニョの言う通りであるな……ドラニコフ、起こすである。」

「ガウッ。」

頭でも打ったのか、キッドは操縦席でのびていた。ドラニコフが一つうなずき、キッドを起こしにかかる。

「ガウー、ガウーッ！」

「うーん………何だ？ドラニコフ？ここは……」

ドラニコフの声で目を覚ましたキッドは、ここはどこだ？的な顔で辺りを見回した。まだ頭が完全に回り始めていない様子だ。

そんなキッドを眺めながら、マタドーラがふと思い出したように言った。

「あれ？こいつ確か……」

高所恐怖症じゃなかったっけ？」

全員がハツとした時には、もう手遅れだった。キッドはもう、はるか下の世界に目を向けてしまっていた。

その途端……。

「た、高い所、怖い！」

叫んだかと思うと、キッドは恐怖に駆られた勢いで、目の前の操縦席にしがみついた。

その拍子に、どこかのボタンを押してしまったらしい。タイムマシンはバランスを失い、ぐらりと揺れたかと思うと……。

落下し始めた。

「ギャーッ！何してんだキッドオー！」

「こ、これはまずいです！何とかしないと、僕たちみんなぺしゃんこですよー！！」

「ワォー！」

何とかタケコプターを出そうと頑張る王ドラとマタドローだったが、急速に下降していく中でそんなことを成し遂げるのは至難の業だった。

「あはは、楽しいね〜！」

全く危機感のないドラリーニヨは、楽しそうに笑い声を上げている。
「まったく仕方ないであるな、ドラリーニヨは……………マハラージヤ！魔法の絨毯^{じゅうたん}特大サイズであるー！」

ドラメットがどこからともなく、いつも使うのよりさらに巨大な絨毯を取り出した。みんながその上に、うまいこと着地する。

「おうっ、でかしたぜ、ドラメット！」

マタドローが嬉しそうに言う。彼に抱えられたキッドは、情けない声で叫んでいた。

「は、早く下ろしてくれ〜！」

「もー、キッドったら本当に高い所が苦手なんだね〜。」

「ドラリーニヨは本当に物忘れが激しいですね……………」

まだ笑っているドラリーニヨに対して、王ドラは呆れ声で言っていた。

「いや〜、ごめんごめん。でもみんなだって忘れてたんじゃない？それに誰も言い返せなかった。」

「キッド、安心するであるよ。もう地面に着くである。」

みんなの気まずい雰囲気を払うかのように、ドラメットが大声で言った。キッドが一気に生氣を取り戻す。

「マジか？やった！……………はっ、俺のタイムマシンは？」

「それも大丈夫である。ちゃんと乗せておいたである。」

「おおっ、そうか…ふう、よかったよかった。」

言いながら、キッドはタイムマシンを四次元ハットにしまった。それと同時に、空飛ぶ絨毯が地面の上に到着した。

「みんな、下りるである。」

「よっしゃー！」

真つ先にキッドが飛び降り、それにマタドローが続く。やがて全員が地面に降り立って、ドラメットは巨大絨毯をしまった。

「にしてもここは、一体どこなんだろうかねえ……………」

「22世紀じゃないな。そんなにビルが建っていない。」

王ドラたちは、見知らぬ街の夜の路地で立ち尽くしていた。

「どこでもいいさ。もっかいタイムマシンを使おうぜ。」

マタドローが面倒くさそうに言って、キッドにタイムマシンを出すよう促す。

「あー、ダメだ……………俺シエスタしなくなってきた……………」

「いつ、いけませんよ、こんな所でお昼寝なんて！」

「あれー？」

キッドが突然驚きの声を上げたので、みんなそちらの方に顔を向けた。

「どうしたんですか？キッド。」

「ほら、見るよ。」

親友テレカが……………」

タイムマシンを探して四次元ハットをこそそやっていたキッドが中から取り出したのは、二枚の親友テレカだった。一枚はキッド、もう一枚はドラえもんのだ。

それらが淡い、虹色の光を放っているのだった。

「親友テレカがこんな光り方するの、見たことないよな？」

「確かに……………あつ！私のも同じですよー！！」

「俺もだ！」

「僕も！」

「我が輩のもである！」

「ガウガウッ！」

それぞれの出した親友テレカも、同じような光り方をしていた。輝きはおさまることなく、といってそれ以上強くなることもなかった。今までこんなことはなかったはずだ。

「そういえば、タイムマシンがここに来る前の虹色の光。あれは、親友テレカのものだったのですね！」

王ドラが納得したような表情で言ったが、マタドローは不満そうに文句をこぼした。

「じゃあ親友テレカが、俺たちをここにつれてきたとでも言うのか？ 何のためだよ？」

「それは分からないな。」

キッドが親友テレカの絵を、調べながら言った。

「でもどうやら俺たちが、ここに何かの力で呼び寄せられたってことは確かだし……………」

ドゴオオオン！

突如としてすぐそばの轟音が、キッドの声を押しつぶした。

「！？」

仰天する一同の前に、何かが落ちる。ぼろぞうきんのようなものが…。

「なっ、何だ！？」

マタドローが叫んだ瞬間だった。

ぼろぞうきんがむくつと起き上がったかと思うと、キッドたちが
けて鳴き声をあげた。

「
アンッ！」

2・親友テレカの異変（後書き）

ぼろぞうきん（？）の正体、分かりますか？次回はいよいよあのキ
ヤラの登場ですが……ちよつと、大変なことになっています。お
楽しみに！
感想、何でもいいんでお願いします
す！！

3 ・美少女出現！？（前書き）

思ったほど書けなかった……でも楽しんで読んでくれたら嬉しいですっ！

3・美少女出現！？

ぼろぞうきんだと思い込んでいたものが、突如起き上がって鳴き声をあげたので、王ドラたちはびっくりして飛び上がった。

「うわっ！これ、犬ですよ、犬！！」

「本当だ……でも、ずいぶん汚れたワンちゃんだね。」

ドラリーニョの言う通り、その犬の外見は哀れなほどみすばらしかった。身体は小さく、全身の毛が灰色っぽく汚れており、毛並みもひどいことになっている。多分元は白い毛だったのだろう。ぼろぞうきんに見えたのも、そのせいだ。

犬は見慣れない物体に怯えたのか、こちらへ向けて吠え続けている。

「あーっ、うるせえなーっ！おい、誰か何とかしろよ！！」

犬の吠え声のせいでいつまでもシエスタ（昼寝）できないマタドーラが、怒りの声を上げた。それを冷たく見やる王ドラ。

「そんなこと言ってる間に、自分が何とかしたらどうなんです？……でも、困りましたね。このままでは誰かに聞きつけられて、見つかってしまう……。誰か『桃太郎印のきびだんご』、持ってませんか？」

桃太郎印のきびだんごと言うのは、それを食べさせた動物を自分になつかせることができる優れものだ。しかし全員、首を横に振った。

「弱りましたね、何か使えるものは………ああーっ！」

「？どうしたんだ、王ドラ？」

尋ねるキッドに、王ドラが焦った口調で答えた。

「ぼ、僕、大切なものを落としてしまったみたいです。多分さっき、落下した時に………」

「た、大切なもの？何だ、ぬんちゃくか！？」

カンフーの達人である王ドラは、武器として普段からぬんちゃくを愛用しているのだ。

「いえ、違います。最近僕が独自で改良していた」

王ドラが、なくしたものの正体を言うより早く、甲高い悲鳴がすぐ近くで響き渡った。

「！…これは、女の子が助けを求める声！…」

愛用のひらりマントの上に寝転んでいたマタドーラが、ぱっと起き上がった。彼は大変な女好きなのである。

ドラリーニヨも叫んだ。

「大変だ！早く助けに行かないと！…」

言うなり、もう駆け出している。ドラメットが慌てて引き止めようとした。

「あ、待つであーる、ドラリーニヨ！」

…って、そこで転んどったか。」

おっちょこちょいのドラリーニヨは、みんなの足元で、地面にうつぶせに転び倒れていた。

「いきなり行動するのは危険ですよ。もう少し待ちましょう。」

「何だと、王ドラ！可愛いセニョリータが危険な目に合ってるかも知れないってのに、見捨てるとでも言うのか？」

「僕、そんなつもりじゃ……………」

「ひゃっ！」

ドラえもんズが集まっていた路地に、突然倒れ込んできた人影があった。みんなが一斉に身を固め、そちらを見やる。

小さな、せいぜい幼稚園ぐらいの人影だった。はあはあと肩で息をしつつ、地面から身を起こして顔を上げる。

当然ながら、路地の中でかたまっているキッドたちの姿が目に入り、人影は凍りついたように動きを止めた。

「……………」

「……………」

お互いに、息づまるような沈黙が続いた。それは永遠に続くのではないかと思われるくらい、長かった。

でも一人の声が、それを打ち破った。

「ねえ君、さっき転んだけど大丈夫？僕もよく転ぶんだ、サツカーの時以外はね、えへへ。」

「こ、こら、ドラリーニョ！」

ドラメットが慌てて引き止めようとしたが、ドラリーニョはもう走り出していた。残念ながら（？）、今回は転ばなかった。

「もしかして、さっき悲鳴上げたのって君？何かあったの？」

「えーと……」

人影が、戸惑い気味の第一声を発した。

他の面々も、ドラリーニョに引き続いて人影のそばに駆け寄る。その途端、全員が思わず息を呑んだ。

とっても可愛い女の子だった。

黒く大きな瞳に、鼻筋の通った端整な顔立ち。黒というより藍色に近い髪はさらさらで、肩の辺りまで伸びている。

「あ、あの……そ、そのですね……」

こうなると、王ドラはもういけない。真っ赤になり、もじもじそわそわしていることしかできなくなってしまう。可愛い女の子の前だと、極度にあがってしまうのだ。

その点マタドーラは正反対である。今もずっと少女のそばに歩み寄り、

「これはこれは、小さなセニヨリータ。お怪我はありませんか？さ、これはお近づきの印に。」

と、いつのまにやら口にくわえていたバラの花を少女に渡す。そのそばで王ドラはもじもじし、キッドとドラニコフはまたかよ…という表情で見ている。

「さっきの悲鳴も君かい？こんな可愛い女の子を傷つけるなんて、ひどい奴もいたものだ。」

「あの……………」

「でももう大丈夫。このエル・マタドーラ様が来たからには、あなたには指一本触れさせな……………」

「ちよつと、すみません！」

突然少女が大声を張り上げた。

思わぬ反応に、驚いて口をつぐむマタドーラ。地面でのたくり始めていた王ドラも、とっさに動きを止めた。

「どうしたんですか、セニヨリータ？」

「あの、すみませんけど実は……………」

女の子じゃありません、僕。」

「へっ？」

「男です。信じてもらえないかも知れないけど。」

確かに全員、とても信じられなかった。目の前にいるこの子供は、どこからどう見ても女の子としか思えない。格好は半ズボンだが、しかし…………。

「まさか、そんな……………」

マタドローが呆然と呟いた、その時。

「ガウツ！ガウツ！！」

「ん？どーした、ドラニコフ。」

ずっと沈黙を守っていたドラニコフが、突然何やら訴え始めた。キツドがそれに耳を傾け、やがて奇妙な表情になる。

「どうしたんだ？」

「いや、それがよ……………この子から、オトコンナの匂いがするってんだ。」

オトコンナというのは、男を女らしく、女を男らしくするという、何だか危ない薬だ。ただし、実際に男を女に変えたりするわけではない。

「オトコンナあ？でもそれはただ単に……………」

王ドラが絶叫したのはその時だった。

「ま、まさかああああ！！」

3・美少女出現！？（後書き）

美少女の正体、しつこいんですけどもう分かりますよね？次回から話が本格的に進んでいく予定です！お楽しみに！

4・主ドラの大失態（前書き）

美少女とぼろぞうきん（！）の正体がやっと明らかに！じらしてみませんでした（汗）。ではどうぞ、お楽しみください！

4・王ドラの大失態

「本当に、申し訳ありませんでした…」

王ドラがいかにも面目ないといった表情で、例の少女に頭を下げて
いる。

いや、正確に言えば、少女ではない。

少年である。

「まったくだぜ、王ドラ！何でまたそんなことしようとしたんだ？

オトコンナを、心じゃなく身体を実際に変えてしまう薬にしちまう
なんて！」

マタドローが呆れ切った口調で言った。

「しかもこの子の頭の上に落とすちまうなんてよ………そういうも
んは、ちゃんと簡単に出てこない所に入れておくべきだぜ。」

普段はすぐにマタドローに対して言い返す王ドラも、この時ばかり
は声が出ないようだった。

「マタドローの言う通りだ。一体どうしてそんなものを作ろうと？」

「いえ…苦手な女の子を見た目だけでも男の子にしたら、少しは緊
張しないで済むかと………」

「はあ？…まったくお前、本当に女の子はダメなんだな。」

キッドもやはり呆れている。

「ねえそれより、この子を元に戻してあげなきゃ。」

ドラリーニヨが、珍しく（？）的を射た意見を述べた。ところが王
ドラは、消え入りそうな感じで答えた。

「それが…まだ研究段階だから、元に戻す薬が……できてなくて…

…」

「ええー!？」

全員の叫び声がこたました。

「どーすんだよ!じゃあこの子は一生このままなのか!？」

「いくらなんでも可哀そうであーる。」

「あつ、大変!この子泣いちゃうよ!！」

ドラリーニヨの言う通り、少女ならぬ少年は、目に光るものをたたえて王ドラを見つめている。今にも一斉にあふれ出してきそうな雰囲気だ。

王ドラが、慌てて大声を出した。

「だつ、大丈夫ですよ!解除薬ももうすぐできあがりますから。少し時間をくれれば……………」

「もう少しつて…どれぐらいですか？」

少年が、半泣き寸前の少女の声で尋ねた。

「そ、そうですね。ざっと見積もって一週間ほど……………」

「何い!？そんなに待てるか、バカ!！」

「バカって何ですか、バカって!!…でもとにかく、こんな所じゃ解除薬を作ることはいけませんね。どこか、ゆつくり腰を据えて研究vできるような所はありませんか?そしたら私、大至急で完成させますから。」

しかし、王ドラに返ってきた答えは、意外なものだった。少年は顔を曇らせ、低い声でこう言ったのだ。

「ないと…思います。ここにはもう、安全な所なんて。」

「えっ!？」

ネコ型ロボット6体は、一斉に少年の方を見た。

「何だつて?…そもそも、ここは一体どこなんだ?」

キッドが尋ねた。色々あつて、大切なことを聞くのを忘れてしまっていたことに気づいたのだ。

「春日部です。埼玉県の春日部市。」

「そ、そうか、日本らしいな……で、今はいつだ？」

「は？」

「いいから答えてくれ。今は西暦何年だ？」

「2008年……です。」

何言っただこいつ、というような顔をしつつも、少年はちゃんと答えてくれた。キッドたちは、はっと顔を見合わせた。

「2008年といったら……21世紀！ドラえもんのび太のいる時代だ！！」

「偶然ですね。同じ国、同じ時代に飛ばされてしまうなんて。」

「でも何で春日部なんてとこに来ちまったんだ？それにお前、ここが安全じゃないみたいなこと言っただよな？そういえばさっきから嫌に周りが静かだが、ここ、何かあったのか？」

「それが……」

少年が言いかけた時だった。

「キャンキャン！」

すぐ近くで犬の鳴き声がして、キッドたちは飛び上がった。見れば、いつの間にかぼろぞうきん……ならぬ犬が近くに来ていて、今度はどこか嬉しそうな様子で、少年に向かってほえていたのだ。

少年は束の間目を見開いたが、犬の姿を認めると、ぱっと喜びの表情に変わった。

「シロ！」

「シロ？」

飛びついてくる犬をだっこする少年を眺めながら、マタドローが首をかしげる。

「あなたの犬なんですか？」

「いいえ、違います。」

王ドラの問いに、少年は首を振った。

「僕の友達の犬なんです……」

と、ここまで言ったところでまた、少年の顔が暗くなってしまった。

どうやら、本当に深刻な事情があるようだ。

キッドは思い切って言ってみた。

「なあ、一体何があったのか、言ってみてくれないか？俺たちなら、もしかしたら力になれるかも知れない。」

「え？」

少年は、とても驚いたような顔でキッドたちを見つめた。

「でも…そもそもあなたたち、何者なんですか？」

「それはまたあとで話すよ。結構ややこしい話だから。あ、そうだ、自己紹介だけでもしておこうか。俺はドラ・ザ・キッド。」

「私は王ドラといいます。」

「俺はエル・マタドーラさ。よろしくっ！」

「僕はドラリーニョだよ！」

「我が輩はドラメット3世である。」

「ガウツ、ガウツ。」

「あ、こいつはドラニコフ。ガウガウしかしゃべれないんだ。」

「は、はあ…」

面食らっていた様子の少年だったが、気を取り直して背筋を正し、シロを抱いたまま、言った。

「はじめまして。僕は風間トオルといいます。」

4・主ドラの大失態（後書き）

あらかじめ警告しておきたいと思いますが、次回は少し怖い話になると思います。ホラー系が苦手な人はお気をつけください。感想もお願いします！！

5・春日部の異変（前書き）

警告：今回はかなりホラーテイストな話です。怖いのが苦手な人は
ご注意を…。

5・春日部の異変

「この事件が始まったのは……そう……一カ月ぐらい前でした。」

風間トオルは、何か思い出す目つきをしながら言った。シロは王ドラが出した道具のおかげですっかりきれいになり、白い犬に戻ってトオルのそばにうずくまっている。

「まず、僕の友達が死んだことから始まったんです。」

「死んだ？」

キッドが思わず聞き返した。

「何ていう子だ？」

「桜田ネネという子でした。」

「僕はネネちゃんと、あと3人の友達と一緒に、カスカベ防衛隊というグループを組んでいました。」

「僕らのドラえもんズみたいなやつだね!!」

ドラリーニヨが口を挟む。

「五人ですつと、仲良くやってたんですが……ある日、ネネちゃんと僕たちが、大げんかをしてしまったんです。」

もともとネネは、気が強く自分勝手なところのある女の子で、『リアルおままごと』という何とも嫌な感じのおままごとにトオルたちは何度も強制的に参加させられたのだという。

「それで何と云うか、僕らも堪忍袋の緒が切れちゃって。ある日ネネちゃんに、もうやめてほしいってみんなで言っちゃったんです。」

「へーえ、わがままなセニヨリタに、びしつと言っちゃったわけだ。」

にやりとするマタドーラ。でも王ドラは首をかしげて言った。

「でも、何か言い返されなかったんですか？」

「そりゃあされましたよ。僕らも口じゃネネちゃんに勝てないことはよく分かってたから……だから言っちゃったんです。それならもうネネちゃんは、カスカベ防衛隊から追放だって……」

それを聞いた瞬間、ネネの顔からさつと表情が消えてしまった。

「何も言わなくなっちゃいましたね。言い過ぎたかなと思ったんですけど……ここで弱みを見せちゃダメだって考えて、そのままネネちゃんを置いて、家に帰ったんです。……そして翌日から、ネネちゃんとは幼稚園に来なくなりました。」

初めはただ単に、すねて登園してこないだけだと思っていた。前にも同じように不登園になったことがあったのだという。

でもネネは、本当に病気で寝込んでしまっていたのだ。

「いや、病氣って言っているのかな？僕らから絶交された次の日から、だるくて起きられなくなっちゃって言われて。」

熱があるわけでもなく、どこか痛いわけでもないのに、徐々に衰弱していく。食事もあり喉を通らず、やつれていく一方だとの噂だった。

「お見舞いに行こうと……何度も思ってたんですけどね……どうも

思い切れなくて。」

トオルがつらそうに目を伏せた。

「みんなも同じでした。それに大したことないってずっと思い込んでましたから…ネネちゃんが死んだって聞いた時には、信じられませんでした。ネネちゃんのママが朝になって見に行ったら、眠ったままみたいな感じで息絶えていたそうです。」

当然、お葬式には行くことにした。そしてネネに、みんなでちゃんと謝ろうと決めたのだそうだ。

「棺にお花を入れる時、久しぶりにネネちゃんの顔を見たんすけどね…」

目を閉じたネネの顔はまるで眠っているかのように静かだったが、青白く、やつれきって、今まで一緒に遊んでいたネネとは別人のようだった。「その時は本当に後悔しました。で、みんなでお花を入れながら、謝ろうとしたんです。」

その時突然、カスカベ防衛隊の一人・マサオが大声で悲鳴をあげて倒れ、気を失ってしまい、大騒ぎになった。マサオは救急車で運ばれ、まもなく意識を取り戻したが、それから妙なことを口にするようになったという。

「見舞いに行った僕らにね、こう行っただですよ。」

『お花をあげようとしたら、ネネちゃんが目を開いて僕をにらんできた』って。」

「ひっ!」

ドラリーニョが変な声を上げて、耳をふさごうとした。他の面々は、何も言わなかった。

「もちろん僕らは信じなくて、見間違えたんだろって言い聞かせたんですが…」

トオルの顔が、ますます暗くなっていく。

「マサオくんもそのうち…ネネちゃんと同じようになってきたんです。」

「えっ!?!」

「どんどん食欲がなくなっていつて、やつれていつて。そしたらそれまで悪夢とかにうなされてたのに、逆にそういうのがすっかりなくなっちゃいましてね。すごく穏やかで…落ち着いた感じになってきて……でも眠ることはなくて。」

トオルの声は、今や聞き取れないほどに小さくなっていた。

「マサオくんが息絶える直前に……」

「な……………その子も死んだのか!?!」

キッドが驚愕の声で聞き返した。トオルがうなずく。

「……マサオくんはこう言いました。『ネネちゃんが迎えに来てくれた』って。」

「……………」

沈黙。ドラリーニヨはとうに、ドラメツトの後ろへ避難していた。

「……んなバカな。そんなホラー映画みたいなのが、あつてたまるかよ。」

マタドーラが、わざとからかうような調子で言った。しかし……。

「ええ、僕らもそう思いましたよ。いや、自分にそう言い聞かせました。これはただの偶然だって……………でもね。」

トオルは深く、息を吸った。

「マサオくんだけじゃ……………終わらなかつたんです。」

「!?!」

春日部中の人々が、ネネやマサオと同じようにして死んでいったのだという。短期間で、次々と。治療法もないし、原因も分からない。

それを治すはずの医者までその病に冒されていき、いくらお墓を作っても追いつけない事態になってしまった。

犠牲になったのは、トオルの身近な人々も例外ではなかった。幼稚園の先生、生徒、塾の友達、そして最後には母親も。

そして、ついに…。

「僕と、カスカベ防衛隊の最後のメンバー・しんのすけ、そしてその家族しか、僕の周辺にはいなくなってしまいました。」

トオルの周りは、それこそ本当に死の町になってしまった。葬儀屋も開いていないので、母親のお葬式も出せない。仕方なく、緊急に作られた公共墓地に、しんのすけとその家族の手を借りて埋葬した。

「しんのすけとやらの家族は、全員無事だったのか？変だな。」

「でしょ？僕も不思議でしたよ。でもママが死んでからは、あの人たちが家に住ませてくれました。」

幼稚園に行く必要も、買い物に行く必要もなくなり、することといえばテレビやゲームぐらいなもの。テレビも春日部チャネルは、映らなくなってしまうていた。

そんなわけで、トオルとしんのすけ一家だけの毎日が過ぎていった。

しかし。

「ほんの一昨日のことですが…。」

「はあ……。」

トオルは真新しい墓石の前で、ため息をついていた。

「こんなことになっちゃうなんて……思いもしなかったなあ……」
こんなこと、というのは……。

もちろん、ネネから始まった、春日部中で相次ぐ人々の死亡のことである。

トオルは今、佐藤マサオの墓にたむけられた花を、新しく替えに来ているところだった。

マサオだけではない。ネネや、ボーちゃんや、先生たちはもちろん、よく知らない人たちの分まで替えてやっている。春日部の『生き残り』としては、そうせねばならないような気になってしまっただった。

「マサオくん……春日部防衛隊も、もう僕としんのすけだけになっち

やった。ボーちゃんもついこないだ、そっちに行ってしまったよ。」
ボーちゃんが死んだのは、ほんの一週間ほど前のことだった。野原家で、しんのすけたちと一緒に、最後まで看取ったのだ。
「変だよな…ボーちゃんには悪いけど、涙も出てこなかった…あんまり身近な人がいなくなり過ぎて…僕…もう…」

「風間くん！」

突然呼びかける声に驚いて振り向くと、しんのすけたち野原一家全員が、シロを引き連れてこっちへ近づいてきていた。今春日部中に死が蔓延していることなど嘘ではないかと思えるほど、彼らはいつも通りで元氣に見えた。

「マサオくんとお話してたの？」

しんのすけが、トオルの隣に立って墓石を見つめる。

「うん…」

「でもずるいよね、みんな。」

「え？」

「オラたち残して先に行っちゃうなんてさ。ひどいゾ、置いてくなんて。オラたちの気持ちも知らないで。」

「しんちゃん…」

しんのすけの母・みさえが優しく息子の頭に手を置いた。しんのすけが心の奥に秘めている苦痛を、理解してやっているのだろう。

「一人じゃ花を替えるのも大変だろ。俺たちも手伝うよ。」

しんのすけの父のひろしが、袋に入れておいた花の半分ほどを取り上げた。

「え、でも…」

「いいのいいの。ね、ひまちゃん。」

「たやーい！」

ひまわりの元気な声が、みさえの呼びかけに応じた。

「それじゃ、お墓の出入り口の所で集合な。早く終わるように、みんなばらばらな所からやろう。」

「じゃ、オラあっちから！」

早速走っていくしんのすけ。野原家の他のメンバーも、あちらこちらへといなくなった。

「…ほんとすごいな、しんのすけたちは。」

トオルは再び、独り言をもらしていた。マサオの墓石に向かって。

「ごく普通だけど…めちゃくちゃで、おバカで、でも強くて優しい

……あんな一家、なかなかいないだろうね、マサオくん。何だかんだ言つて、僕もお世話になっちゃってるし。」

そこまで言つと、おもむろに立ち上がつて頭を振る。

「よいしょつと…ごめんねマサオくん、ずっとここにいるわけにもいかないや。他の人の分もやらなくちゃいけないから。じゃあね。」

花を手を歩み去ろうとして、トオルは突然何かに足を何かに引っかけられ、まともに転んでしまった。

「あいたたた…」

見られなくてよかったと思いつながら、身体を起こす。

地面から生えた手が、足首をつかんでいた。

「……………!？」

とっさには、目の前の光景が理解できなかった。
そして……………。

「う…う…」

うめき声が、した。

地面から。

嘘…嘘だよな？

墓石の前の土を割って、何かが地上へと這い上がってきた。うめき声をあげて、その白い手で、しっかりとトオルの足首をつかんだまま…。

それでもまだ、トオルの口から声は出てこなかった。

地面から出てきたものが、顔を上げて、トオルを真正面から見つめた。

「マ…サオ…くん……」

ようやく声を発することができたのと同時に、たった今地面の下から出現したマサオが、かすれた声で、ささやいた。

「か…風間…くん…。」

足首を握る手に、力がこもる。

「僕たちの…仲間…に…してあげ…る…」

その時ようやく、どこかで迷子になっていた理性が、頭の中に帰ってきた。

「うわあああああ！」

悲鳴をあげると同時に、トオルは見た。

墓場の土の中から、次々と現れるものを……。

「…で、それからずっと逃げどおしだったのか？今日まで。」

キッドが目を見開いたまま、尋ねた。

「はい…勝手に人の家にお邪魔して、そこで隠れたり眠ったり食べ物を手に入れたり……」

「その間も、生き返ってきた死者とやらが追いかけてくるっていうのか？」

「はい。」

「信じられねーな。」

「こつちだつて信じたくないですよ。でも、これが現実なんです。」
その時、シロがクンクンと鼻を鳴らした。トオルの意見に賛同の意を示すかのように。それを見て、王ドラがふと思い出したように言った。

「そういえば…シロって、君がお世話になっていた野原さんたちの犬ですよ？その人たちはどうしたんですか？」

「それが、分からないんです。あのお墓から逃げ出すので手いっぱいで、それからしんのすけたちには会ってなくて……捕まっただと思っただんですけど、シロがいるということは……」

「もしかしたらそいつらも、まだ無事かも知れないぜ！」

マタドーラが元気づけるような口調で言った。

「マタドーラ！もっと声を低く！！」

「あつ、悪い……」

「でも…うかつに動けば捕まりますよ。」

トオルは不安そうな表情を崩していない。キッドはその肩を叩きながら言っただけ。

「大丈夫さ、オレたちがついてるから。世話になった人たちなんだから？希望を持とうぜ！！」

「そつだよ、早く捜しに行こう！！」

ドラリーニョが無邪気な声で、みんなを促した。

「…その必要はないわよ。」

「え？」

路地の入り口の方を振り返った一同の目に、そこに立ついくつかの人影が見えた。

そのうちの一つを目にした時、トオルの顔がこわばった。

「.....」

5・春日部の異変（後書き）

春日部を襲った死……。そして、甦る死者たち……。突然一行の前に現れた風間くんのママの目的は？しんのすけたちは無事なのか！？どうぞ次回をお楽しみに！感想も待ってます！！

6 ・母親たちの襲撃（前書き）

風間くんとドラえもんズに現れた、風間くんの母親………！彼女の
目的は、そして野原一家は今いずこ！？どうぞお楽しみ下さい！
！

6・母親たちの襲撃

「何だお前らは！」

路地の入り口に立ちはだかる者たちへ向けて、キッドが威勢よく大声を張り上げた。腕には既に、愛用の空気砲をつけている。これをつけて『ドカーン！』と叫べば、強力な空気弾を発射できるのだ。彼の腕前は、世界一と称されるほどのものだった。

「何だとは失礼ね。そっちこそ何なのよ、このタヌキ！」

人影たちのうちの一人が、尖った声をあげた。

「タ、タヌキだと！？言ってくれたな、このおばさん！」

怒ったキッドが、空気砲を撃とうとする。ところが……。

「ダメですっ！」

「ぐわっ!!！」

トオルに突き飛ばされ、止められた。

「な、何で邪魔すんだよ！」

「だって、あの人たちは…」

僕とネネちゃんとマサオくんの、ママなんですよ!」

「なにーっ!？」

ドラえもんズの驚愕の叫び声が響き渡った。

「マジかよ!？でもお前の母ちゃんって…死んだんじゃ……」

「死者が甦ってくるというのは、本当だったのですね……」

マタドーラと王ドラが、それでも信じられないという顔つきで母親たちを見る。

「…でもあの人たち、別に普通だね。」

ドラリーニヨが、ドラメットの後ろからちょっとだけ顔を覗かせたまま、言った。

「ふむ…確かに、あまりゾンビらしくはないであるな。」

ドラメットが腕を組みながら言う。ところがその言葉が、三人の女性のうちの一人をひどく怒らせてしまったらしかった。

「ゾンビですって？私たちはゾンビなんかじゃないわよ!」

茶髪その女性は、そう言いながら前に進み出ると、いきなり右手を前に突き出した。

「何だ？何する気だ？」

マタドーラが、大して気にするふうでもなく見守っていたが…。

「…うわっ！何だこれ！？」

ものすごい圧力が迫ってくるのを感じ、キッドたちは思わずあどずさった。シロがとっさに、トオルのふところへと飛び込む。

（目に見えない…衝撃波みたいなもんか？ちっ、こんなもの、オレの空気砲で……）

キッドは空気砲を構えた。目に見えない相手を撃つのは初めてだったが、自信はたっぷりあった。

「ドカーン！」

今度は誰にも邪魔されず、キッドの空気砲から弾が思い切り発射された。

バゴオオオ！

「うわぁ！」

二つの力がぶつかり合った衝撃で生まれた風に髪をなぶられ、トオルは思わず叫び声を上げた。シロが服の中で、震えているのが分かる。

「よし、相殺したか…」

キッドが満足げに言って、空気砲を下ろす。衝撃波を放った女性は、驚きの表情を浮かべて後ずさりした。

「あんた…今、何したの？」

「ネネちゃんのおばさんこそ、何をしたんですか？」

トオルが口を挟んできた。みんなが一斉にそちらを見る。「何っ？

トオル、このおばさんがネネちゃんとやらの母ちゃんなのか！？」

「はい…」

「別に大したことじゃないわよ、トオルちゃん。」

初めに話しかけてきた女性が、トオルにそう言った。

「！…………ママ、僕がトオルだって……………！！」

今のトオルは王ドラのミスのせいで女の子化しているのだ。それなのに、なぜ自分のことが分かったのだ？

しかし、キッドとマタドローは別のことに驚いていた。

「トオルちゃんって…」

「こいつやっぱ、女の子なんじゃないの？」

「ち…違いますよ！そーいうことじゃなくて！！」

「で、あなた方は一体どうなってしまったのですか。」

王ドラが、脱線しかけた話を引き戻してやった。

「お子さんから話は大体聞きましたが…さっきの攻撃といい、あなたたちは一体何者なんです？」

「そうね…」

トオルの母親が答える。

「簡単に言えば……」

吸血鬼ってやつよ。」

「吸血鬼！？」

ドラえもんズと、トオルの声が揃った。

「嘘でしょ？そんなもの、いるわけないじゃないか、ママ！！」

「でも、いたのよ。実際私になっちゃったんだもの。」
トオルはシヨックのあまり、すぐには言葉の出ない様子だった。
「それはそうとお主、野原さんとやらを捜す必要はないと言っていたであーるな。どういうことであーるか？」
ドラメットが尋ねると、ネネの母親が笑って上空を指差した。みんなが空を見上げると…………。

「あつ！」

トオルが思わず声をあげた。空中に浮いた球状の檻の中に、何人かの人間が閉じ込められている！

「風間くん！」

しんのすけたちだった。

「ついさっき捕まえたのよ。まったくこずっちゃったわ。」

ネネのママが、相変わらず笑ったままで言う。マサオのママが、それに重ねるように言った。

「風間くん、あなたが今おとなしく捕まってくれなかったら……………」

野原さんたちが、どうなるか分からないわよ。」

「そんな……！」

トオルは顔面蒼白だった。

「風間くん、助けてー！ネネちゃんのママが、オラのことをてごめにするって……」

「するか！」

ネネのママが、怒った声でしんのすけに言い返した。

「……なんか個性的な奴らしいが、助けてやらなきゃいかんようだな……よし……」

キッドが空気砲を、檻に向けようとした。壊して出してやるうとい

うのだ。

ところが。

ガゴッ！

鈍い音と共に、第二の衝撃波が吹きつけてきて、キッドの手から空気砲を吹っ飛ばした。

「な、何っ！？」

キッドがあせった声を上げる。空気砲は衝撃波によって壁に叩きつけられ、粉々になってしまった。

「オ、オレの空気砲が…！」慌てるキッドに、ネネのママがバカにしたように言った。

「ふん、よそ見なんかしてるからよ。とにかく、これで邪魔なもの

はなくなつたわね…… あんたたちが何だか知らないけど、春日部とは関係ない奴みたいだから……

くたばってもらうわよ!」

「待って!」

再び衝撃波を放とうとするネネのママを、トオルのママが手を伸ばして止めた。

「今撃ったら、トオルちゃんまでやられてしまうじゃないの!」

「あ……ごめんなさい……」

ネネのママが、決まり悪げに手を引っ込める。トオルのママが向き直った。

「さあ、どうするの、トオルちゃん? 私たちの仲間に、なりたくないの?」

「仲間……?」

その時トオルは思い出した。墓場の土の中から這い出てきた、マサオが言った言葉を……。

『仲間……に……してあげ……る……』

「何だそりゃ、この子に吸血鬼になれって言うてんのか！？どうやって？」

マタドーラが嘘だろというような口調で尋ねる。

「簡単よ。同じ吸血鬼に血を吸わせるだけ。しばらくの間仮死状態になるけど、目覚めたら立派な吸血鬼になってるわ。」

「…お気軽に言うね、おばさん。」

キッドが呆れた様子を隠そうともせず、言った。

「さあ、トオルちゃん？」

「えー、僕やだー。噛まれるのって痛いし、吸血鬼になったら昼にサッカーできないもーん。」

「吸血鬼だって、気をつければ昼間でも活動できるわよ。」

…って、あんたに言ってないしっ！」

ネネママが、ドラリーニョにツツコミを入れた……。

「そもそも我々はロボットだから、血などないであーるよ。」
と、今度はドラメットが言う。

「あ、そーか。あはははは！」

「…ロボット？」

トオルが呟いて、首をかしげた。

「トオルちゃん！どーするのー！！」

母親の口調が、少しイライラ気味になってきた、その時。

「アチョーッ！」

王ドラが、四次元袖から出したぬんちゃくを投げつけた。トオルの母親たち目がけて。

思わぬ攻撃に、彼女らもとつさに顔をかばって後ずさりする。

「今です！ドラメットー！」

「？………お、おお、そうかー！」

何かを察したドラメットが、空中に空飛ぶ絨毯を出現させた。先程出した、巨大バージョンである。

「みんな、乗るであーる！」

「さ、早く！」

「は、はあ…」ためらいつつも、トオルは絨毯に右足をかけた。次に、左足。う、浮いてるっ！

「全員乗ったな…よし、上がれ！」

ドラメットのかけ声を合図に、絨毯が急上昇した。

「いけない！」

トオルの母親が叫ぶ。彼らの目的に気づいたからだ。

だが、もう遅かった。

「アチヨー！」

今度は、野原一家の閉じ込められた檻の鍵に向けて、王ドラがぬんちやくを投げる。

ガチャン！

呆気なく、鍵が崩壊して扉が開いた。

「わーい！空飛ぶじゅーたんだあ！！」

「な、なんかよく分からないけど、助かったわ！！」

「たやい！」

「よし、乗るぞ！」

こついう時、あまり深く考えない野原一家は、たちまちのうちに絨毯の上に納まった。

「それでは…ドッカーン！進めー！！」

「ま、待ちなさいー！」

叫ぶ声がしたが、当然誰も待つはずがなく……………。

絨毯は、危機を置いてけぼりにして、猛スピードの空の旅へと出発していたのだった。

6・母親たちの襲撃（後書き）

何とか逃げ出した、ドラえもんズとしんのすけたち。しかし次号はさらなる危機が到来するかも！？そして王ドラの大活躍が見られる可能性も……………！乞うご期待！！

感想もお願いします！！

7・見参！王ドラ式（前書き）

王ドラが…えらいことに？実際の内容はこの後すぐ！！

7・見参！王ドラ式

ドラメットの絨毯が空を滑るように飛び始めてから10分ほど経った時には、しんのすけたちもトオルも、キッドたちの話に呆然としていた。

「それじゃ…あなたたちは22世紀に作られた、ネコ型ロボットだつていうのね？」

「22世紀には、こんなに表情豊かなロボットが作れるようになるんですね。」

トオルが王ドラたちを見回しながら、感心した声で言った。

「そうさ。オレたちはみんな、心を持つロボットなんだ。22世紀じゃ、ほとんどの家庭でオレたちみたいなお世話ロボットが普及していて、人間たちと変わらずに笑ったり、怒ったり、悲しんだりすることが可能なんだ。」

得意そうに言うキッドに、21世紀に生きる面々はもはや返す言葉が見つからないようだった。

「この絨毯も、本当は魔法ではなくて高度な科学技術により作られたものであるよ。我が輩たちの使う道具も、皆そうやって発明されたものばかりである。」

「タイムマシンもあるの？」

しんのすけが、何を考えているのか目をきらきらさせながら尋ねた。

「あるが…何で分かった？」

「だって22世紀の人が21世紀に来る方法っていったら、タイムマシンしかないもん！」

「お前、案外賢いなあ。」

マタドーラが驚きを隠そうともせず、言った。

「ムツ！案外は余計だゾー！」

「へいへい。」

「ところで王ドラさん。」

トオルが王ドラの方を向いて言った。いきなり目を合わせてしまった王ドラは、慌てて視線をそらした。顔が赤くなっている。

「さつきはどうも、ありがとうございました。」

「え？…い、いや、何でもありませんよ！！トオルくんは私のせいで、こんなことになってしまったのだし……」

「おいおい王ドラ、そんなに真っ赤になることないだろ。中身は男の子だぜ。…まあ、可愛いけどな。」

やはり王ドラは、中身がどうだろうと見た目が美少女だとダメらしい。

「風間くんも災難だったな、追われるばかりか、そんな目に合っちゃうなんて。」

「はあ……」

ひろしのなぐさめに、トオルは苦笑で応じた。

「風間くん、髪の毛サラッサラですな。」

そう言くと、しんのすけがトオルの髪をちょっとだけ触った。その拍子に、手がトオルの耳をかすめてしまったようだ。

「きゃんっ！」

シロではない。耳の弱いトオルが、思わず上げてしまった声である。マタドーラがぎょつとして目を見開いた。

「お、お前、今…何気持ち悪い声出してんだよ！」

「マ、マタドーラさん、違うんです！これは……」

トオルが慌てて弁明しようとしたが……。

今度は耳に、しんのすけの息が、絶妙な角度で吹きつけられた。

「ああ……ん……」

こうなるともういけない。恍惚状態に陥ってしまつトオルに、さらにしんのすけが図に乗って、

「ほうほう……じゃあ次！耳ハミハミ行くゾー！」

「ダ、ダメ……勘弁……して……」

「ふっふっふ、観念しなさい……」

ゴンッ！

最強の握りこぶしの降臨によつて、トオルの更なる危機（？）は何とか救われた。

「あんた何やってんの！ちょっと、風間くん大丈夫！？」

トオルは荒い息を吐いていて、みさえの問いかけに答えるどころではなかった。女の子になつた影響かどうか分からないが、前よりも耳の感覚がさらに上がってしまったようだ。いや、反応のし方が激しくなつたと言ふべきか……。

「……お前ら一体、どんな関係？」

キッドが小声で呟いた……。

「ところで、どうして風間くんのお母さん、風間くんのがちやんと分かつたのかしら？」

みさえが、ふと思ひ出したように言う。ひろしも首をかしげた。

「さあな……鼻がきくんじゃねーの？」

「まさか、犬じゃあるまいし。」

「でも吸血鬼になつたせいで、鼻がきくようになったりして。」

しんのすけが、もちろん冗談半分にそう言った。

「その通りよ、しんちゃん」

「えっ？」

絨毯の上の全員が、突然降ってきた声の方を振り返った。

「う、嘘……。」

みさえが半ば、呆然と呟く。

そこには、何の支えもなしに空中に浮かぶ、しんのすけたちの担任・よしながみどり先生の姿があった！

「ぬおおっ、よしなが先生お空飛んでる〜！かつこい〜！！」

「感心してる場合か！ていうか、誰あれ？」

「僕たちの通う幼稚園の、ひまわり組の担任をしてる、よしなが先生です！」

トオルが甲高い声で答える。

「ちよつと待て！よしなが先生がいるってことは、もしや……」

ひろしがさつと青ざめた。そこへ……。

「ふう、やっと追いついたわ。」

「私もう疲れました。」

またしても、しんのすけたちにとってなじみのある声がしてきた。

「ま、まっざか先生！」

「上尾先生も！！」

幼稚園の先生三人組が、空中に勢ぞろいしてしまったのである。

「吸血鬼はね、嗅覚がそれこそ犬並みに鋭いのよ。だからあなたが風間くんだってことも、すぐに分かるわけ。どうして女の子になったのかは知らないけど……………」

ね、風間さん？」

「！」

はっとして、キッドとドラメットが振り向いた時にはもう遅かった。

「さつきはよくもやってくれたわね！」

ネネのママが、王ドラに向かって叫ぶ。あとの二人も、こっちへ近づいてくるところだった。空を飛んで……………。

「そ、そんな、もう……………」

王ドラが、明らかに動揺した声を出した。他のみんなも同様だった。全速力で、絨毯をここまで飛ばしてきたというのに、まさか相手に飛行能力まであったとは……………。

「さあ、観念なさい！」

よしなが先生が叫んだ。

「誰がするか！」

キッドが威勢よく返すが、空気砲がなくてはどうしようもない。折悪く、このような事態が起こるとは予想もしていなかったこともあり、ドラえもんズたちはほとんど道具を持っていなかった。マタドーラなどは、お菓子とヒラリマントしか持ってきていないのだ。

「ど、どうするの!?!」

みさえが金切り声をあげて、ひろしにしがみついた。もはや万事休すだ。ほとんど誰もが（しんのすけとドラリーニヨは除く）そう思った。

「…仕方ないであるな。」

「！？…ドラメット、何かいいものがあるんですか？」

「ふむ…まあ、な……」

「じゃあそれを出してくれ！早く！！」

キッドが怒鳴る。ドラメットがふところから、「そそそと取り出したのは……」。

「……………何だこれ、薬？」

「うむ、我が輩が発明した薬であるよ。」

「どんな効果があるのですか？」

「簡単に言えば、飲んだロボットの力を急激に引き上げる薬である。そう、ざっと見積もって……………」

「100万倍は上がるはずであーるな。」

「ひゃ、100万倍い！？オレに、オレに飲ませてくれ！」

「オラが飲みたいーい！！」

「あんたはダメ！ロボットじゃないでしょ！！」

「えーっ！」

しんのすけの不満そうな声。ドラメットの説明は続く。

「…しかし、その急激なパワーアップに耐えるため、飲んだロボットは一時的に人型ロボットになるのである。」

「ええ！？何で？」

ドラえもんズの声が重なった。

「…で、でもごちゃごちゃ言ってる場合じゃありませんよ！これは唯一の頼みの綱なんです！！早く誰か、飲んで下さい！！」

「よっしゃー！じゃあオレが…」

王ドラの叫びに応じ、マタドローラが手を伸ばしかけたが……。

「何か知らないけど、させないわよ！」

よしなが先生の放った衝撃波が、ドラメットの手から薬のびんを吹っ飛ばしてしまった。

「し、しまった！誰かキャッチするであーる！！」

びんは大きく弧を描いて飛んだが、ちょうど落下地点にいた王ドラが、何とかそれをキャッチした。

口で。

「……むぐっ！」

「ああっ、こいつ飲みやがった！ずるいぞ！」

「いや、ていうか人型になるって、一体どうなるんだ！？」
マタドーラとキッドがてんでに叫んだ。

その時。

ドンッ！！！！

「うぉぁぁぁ！」

突如王ドラの身体からほとばしったエネルギーと光に、キッドたちは思わず尻もちをついた。

「な、何だぁ？何が起こるんだ！？」

「でも、このエネルギー……きつとすげーもんが出てくるぞ！！」

「ぬおーっ、まぶしーっ！」

「し、しんのすけ、そこは父ちゃんの服だ！顔突っ込むな！！」

それぞれが驚きと期待に胸を膨らませる中、最強の人型ロボットが、今、誕生しようとしていた……………。

ポシユンッ！

「……え？えええええ！？」

全員の絶叫が、夜の空に響き渡った。

なぜなら、そこにいたのは……………。

「だ、誰なんだ？」

マタドーラが上ずった声で、叫んだ。

「お前は誰なんだ!？」

黒髪に黒い瞳の、顔立ちの整った少年。どういつわけか手に、かばんを持っている。

何だか誰かに、似ているような……。

「ぼ、僕!？」

一呼吸おいて、そう言ったのは

トオルだった。

「風間くん、そっくり……」

さすがのしんのすけたちも、愕然としてうまく言葉が出ないらしい。

「え? トオル、これお前の男の子バージョン!？」

「僕は元から男の子ですけど。」

マタドーラの言葉に、トオルがやや不満げに言い返した。一方キッドは、元王ドラの少年に向かって色々問いつめている。

「なあお前、本当になんなの? どうなってるの!？」

「僕は王ドラ式^に。この姿でいられるのは十分なんです。」

「王ドラ式! ? 時間制限あるんだ? てか、お前ほんとにパワーアップしたの! ?」

「さあ。」

「全然弱そうじゃねえか! なんかトオルにそっくりみたいだしよ…
必殺技とか持ってねーの! ?」

「さあ。」

「てめー話聞いてんのか! !」

「あつはっは、バカね！何やってんの！？」

かばんから出したらしいノートを見ながら生返事の王ドラ式にキッドが怒鳴るのと同時に、ネネママの笑い声が降ってきた。

「そのまま殺ってやるわ！食らいなさい！！」

ドオン！！

「うわあああ！また衝撃波が来た！！」

ひろしが叫ぶが、絨毯も取り囲まれていて動きようがない。

「くそっ、あんなでかいの、ヒラリマントではね返せるかどうか…

……」

それでもマタドローラが、果敢にも衝撃波に対してヒラリマントを振りかざした。ドラメットも、逃げ出す隙はないかと必死で敵を見回している。

今度こそダメか……。ひろしはみさえとしんのすけと、ひまわりを抱き寄せた。トオルは知らないうちに、シロをきつく抱きしめていた。ドラメットの発明品は、どうやら失敗だったようだ。

いや、それとも…。

「やれやれ、うるさくて勉強できやしない。」

「しなくていいんだよ！」

キッドはもうキレ気味だった。

「見るよ、あの衝撃波！あれが来たら終わりなんだよ！！」

「ああ、あれですか……………」

王ドラ式は冷めた目つきでそちらを見やると、持っていたノートをひょいと投げた。

ボンッ！

「…え？」

その場にいる全員が、目の前に広がる光景に目を見開いた。

王ドラ式の投げたノートがとんでもなく巨大になり、衝撃波をあつさりを受け止めてしまったのだ。

いや、正確に言えば、吸い込んでしまったのだった。

「嘘！？」

ネネママが叫ぶのを冷淡に眺めつつ、王ドラ式は言った。

「次は……………こっちの番ですね。」

ピカッ！

「お、おい、何だ？ノートが光りだしたぞ。何が起こるんだ、一体

……………！？」

一同が見守る中……………

ノートの中から、無数の文字や数式がなだれ出てきた！

「きゃあああ！」

文字群の流れを食らって、母親と先生たちはひとたまりもなく吹っ飛ばされた。文字の一つ一つが、人間一人分ぐらいあるのだから、たまったものではない。

「す、すげえ！めちやくちや強いじゃねえか！…でも何なんだ、この力は？」

「……僕は勉強の邪魔をする奴は許しません。今のはその制裁です。罰です。」

「いや、全っ然分かんねえから。」

「お前本当に王ドラ？」

思わずつっこまずにはいられない、キッドとマタドローであった……。

7・見参！王ドラ式（後書き）

パワーアップした（？）王ドラにつけた式は、2を一応中国風に書いてみたものです。色々不快な部分があったと思います。すみません……。

感想もお寄せください！！

8・撃破（前書き）

王ドラ式が、さらなる意味不明の活躍です！どうぞお楽しみください！！

8・撃破

「な、何かよく分かんないけど……」

みさえが、王ドラのいた所に座っている者を、ちらりと見やっ言った。

「ちよつと形勢が、こつちへ傾いてきたのは確かなようだな。」

ひろしも、やや戸惑い気味ながらそう応じる。

敵を吹っ飛ばした文字群は、やがて巨大ノートの中へと、吸い込まれるように戻っていった。するとノートは元通りに小さくなり、王ドラ式の手の中に戻った。王ドラ式は、それをこともなげにかばんの中にしまう。

「すげー、やるなー、とキッドたちが歓声を上げるのを聞きながら、トオルはドラメットに尋ねてみた。」

「ドラメットさん、どうしても気になることがあるんですが……なぜパワーアップした王ドラさんが、僕とそっくりな姿をしてるんでしょう？ 顔や身体はともかく、服装まで似てるんです。」

「うーむ……」

ドラメットは、何やら考え込みながら顎をなでていたが、

「我が輩にもよくは分からないである。しかし、仮説を立てることはできるであるよ。実は、あの薬は環境に非常に敏感で、場所によって効果が変わってしまうのである。恐らく春日部で飲んだことから……それに王ドラの心も関係しているであるな。」

「心？」

「王ドラは、お主を女の子にしまったことについて、非常な責任を感じているはずである。そうした気持ちが薬に影響して、お主と同じ姿になってしまったのではないかと……我が輩は思うのである。」

「……………」

分かったような分からないようなややこしい説明を理解しようと、

トオルは長くなった髪をかき上げた。ああもう、この髪つっとおしい。どうにかならないかな…………。

「！…………ガウガウ！！」

「どうした！？ドラニコフ。」

ドラニコフが突然吠え出したので、みんなが反射的に顔を上げた。

「…………あ！」

みさえが叫ぶ。下の方からふわりと、浮かび上がってきたものがあったのだ。

先生と、母親たちだった。

「くそつ、また来やがったか。」

キッドが舌打ちして呟く。空気砲があれば、と心から思った。

「残念だったわね…………吸^{わたしたち}血鬼は怪我や負傷からの回復能力が、とても早い。これぐらいじゃくたばらないわよ…………。」

風間ママが、少し笑って言った。その目は自分の息子の姿をしたものに、じっと注がれている。

「驚いたわ、トオルちゃんの姿になるなんて…とにかく消えてもらうわよ！」

その言葉と同時に、絨毯を取り囲む女性たち全員が、一斉に衝撃波を放った。かばんの中を相変わらずごそごそやっている、王ドラ貳に向けて…………。

「うわ、また来たぞ！」

マタドーラがヒラリマントを振り回して叫んだ。

「…まったく、うるさいですね。」

ボシュンッ！

「!？」

またしても、一同啞然となった。

今度は絨毯の周りを囲むようにして、巨大な盾がいくつも、空中に出現したからだ。

いや、それはよく見ると…………

消しゴムだった。

「う、嘘だろ？」

マタドローは目の前の光景に目を疑った。でっかいいくつもの消しゴムが、放たれた衝撃波を全て打ち消してしまったのだから……。

「そ、そんな……」

風間ママも、さすがに呆然としている。

「……お前、ほんとにすげえな。すげえけど………何で武器が、勉強道具？」

キッドの的確な質問であつたが、王ドラ式なる少年の返答は実にそつけないものであつた。

「僕が秀才だからです。」

「それだけの理由で？ていうかぬんちゃくは使わないのか、ぬんちゃくは。お前のトレードマークだろーがよ。」

「さあ。」

「また生返事かてめー！」

「くつ、こうなったら仕方ないわ。肉弾戦よ！」

まつざか先生の合図と共に、敵が一斉に襲いかかってきた。

しかしその瞬間に生まれた隙を、ドラメットは見逃さなかった。

「それっ！」

絨毯が風のように動き（シロは危うく転げ落ちるところだった）、先生たちの間をすり抜けて包囲網を突破し、逃避行ならぬ逃飛行を

開始した。

「しっかり捕まっているであーるよ！」

ドラメットの声がする。トオルは長い髪が邪魔をして視界を遮られ、色々が悪戦苦闘していた。

「ああもう、これ……やだ！」

「逃がさないわよ！待ちなさい！！」

風間親子の声が重なった。

「そんなスピード、すぐに追いつけるわ！！」

確かに、彼女らの飛ぶスピードは予想以上に速かった。ドラメットが精一杯頑張っているにもかかわらず、もうネネママの手が絨毯にかかりそうだった。

それを見た王ドラ式が立ち上がり、かばんに手をつ込んで何かを引っ張り出した。

「…ものさし？」

30センチのものさしだ。こんなもので、どうしようと言っただけか？

「…必殺。」

王ドラ式が呟いた、次の瞬間。

ヒュンッ、バキッ！

「がっ……………」

風間ママは、激痛にうめいた。ものさしで、胸元を叩かれただけだと思っただけ……何なのこれは！？

バキッ！バキッ！！

他の女性たちも、次々とものさし攻撃の餌食になってひるんだ。

「い…痛い。何をしたの？」

「…僕の『ものさしソード』に触れた者は、ただでは済みませんよ。」

「ものさしソードお！？」

真面目な顔で言う王ドラ式の前に、キッドはもう笑い出しそうになっていた。なんてふざけた奴だ、勉強道具を全て武器にしてしまうとは！

まあ、強いからいいのだが……。

ピコーンピコーンピコーン！

「んん？何だ！？」

王ドラ式の身体どこから、警報みたいな音が響いてきた。

「…どうやら、もうすぐ時間切れのようです。そろそろとどめをさしますか。」

それを聞いて、トオルが慌てて王ドラ式にしがみついた。

「王ドラさん（ですよね？）、ママたちを殺したりしないで下さい！お願いしますー！」

どうやら王ドラ貳は、オリジナルと違って女の子アレルギー（？）ではないらしい。トオルに対してこくりとうなずいただけで、ひよいと絨毯の上から、先生たち目がけて飛びかった。

「く…」

先生たちが身構えようとするが、王ドラ貳の動きの方が速い。かばんから、もう何かを取り出しかけている。

「何が出るんだ？シャーペンか！？」

「いや、多分分度器だ！！」

「どっちにしてもしょぼいですね。」

大騒ぎしているキッドたちを尻目に、王ドラが取り出したのは………。

「アチョーッ！」

「最後にぬんちゃく出たー！！！！（やっぱりこいつ王ドラだったんだ！！）」

バシバシバシッ！

「きゃああー！」

王ドラ得意のぬんちゃく攻撃を食らい、ネネママたちは飛行能力を失って落下し始めた。

「あ、いけない！」

みさえが叫んだが………。

心配は無用だった。

「くそ…これを使うことになるなんて……！」

よしなが先生が舌打ちし、ポケットから取り出した何かを空中に投げた。

ボンッ！

「何っ！？」

キッドが目を見開いたのも無理はない。何かが爆発した所に、巨大な円盤みたいなものが浮かんでいたからだ。たちまちのうちに、先生と母親たちの身体がそこへ着地する。

よしなが先生が、悔しげに言った。

「覚えてらっしゃい！このままじゃ済まさないわよ！！もちろん風間くんや、しんちゃんたちもね！！」

「先生、本当にどうしちゃったんですか？元に戻って下さい！」

トオルが必死に呼びかけたが、よしなが先生の表情は変わらなかった。

「ふん、私たちを戻したいのなら、あそこを潰してみなさい。」

「！？」

よしなが先生の指差す方向を見て、トオルと野原一家は仰天した。春日部の中心に、つい最近まではなかったはずのものがそびえていたからだ。

巨大な塔。

一言で表せばそうなるが、何だか嫌に金属質の輝きを放っていて、ほっそりした流麗な形で、現代にそぐわない感じの建物だ。未来の建物のような印象を与える。

「何あれ？」

ドラリーニョが素っ頓狂な声を上げる。

「あそこには、吸血鬼四天王の方々がいらっしやるわ。私たちに捕まるのが嫌なら、彼らを倒すことね。…………ま、無理でしょうけど。」

「な、何だとお？」

「じゃあ、また今度ね」

そう言っで、どう操縦しているのか、よしなが先生は気絶した仲間をつれ、円盤を飛ばして塔のある方向へと消えてしまった。

「…なんかよく、分からねえが。」

しばしの沈黙の後、キッドがやや低い声で言った。

「要は助かりたかったら、あのでっかい塔に殴り込みにいけってことか。」

「そのようであーるな。」

ドラメットがそう答えた時、ボシュッ！

という音と共に、王ドラ式の周りから煙が上がった。

いや、もう王ドラ式ではない。

「うーん…何があっただんですかあ？」

オレンジ色の身体に中国服のネコ型ロボットに戻った王ドラが、絨毯から身を起こしてぼんやりした声を出した。

「どうしたんですかって…………お前ドラリーニョじゃあるまいし、さっきのこと覚えてねーの？」

「さっき？私、何かしたんですか？」

「……………」

どうやら変身中のことは、当人の記憶に残らないようだ。

さつきまでの一連の出来事を聞かされて、王ドラは心底驚いた。

「そうですか…まさか私が、そんな力を……」

「でもカツコよかったゾ！」

「たやーい！！」

しんのすけとひまわりにおだてられ、王ドラは顔を赤くした。照れ屋さんなのである。

「四天王って言ってたけど………かなり強いんでしょうね。大丈夫かしら？」

不安げなみさえに、ドラメットが励ますように言った。

「まあまあ、そんなに心配しない方がいいであーるよ。…おお、そうだ、この薬を皆に渡しておくであーる。いざという時に飲むであーるよ。」

「まじで？」

「わーい！！」

こうして王ドラを除く、ドラえもんズのメンバー全員が、ドラメットの薬を四次元ポケットや四次元ハット、四次元マフラーにしまうことになった。マタドローはすぐにでも試してみたそうだったが、王ドラににらまれてやめておくことにした。

「あー、オレなんか眠くなってきたぜ。シエスタシエスタ………」

「オラもー………ところでシエスタって何？」

お寝坊なこの二人、誰も何も言わないうちに、絨毯の上でさっさと眠りについてしまった。それを呆れて見つめる一同だったが、

「まったく幸せな奴らじゃな………でももう我々も、眠った方がよさそうであーる。」

「そうですね、でもここじゃ敵的ですよ。どこか安全な場所へ、移動しましょう。」

というわけで、みんながやって来たのは春日部山であった。

安全かどうかは微妙だが、少なくとも町中よりは敵の目も少ないだろうというわけだ。色々と疲れていたトオルたちは、驚くほどあっという間に眠りの中へと引き込まれていった。

明日から、命をかけた戦いが始まることを、うすうす予感しながら……。

8・撃破（後書き）

次回からいよいよ、本格的な戦いが…？今度は誰がどんなふう
にパワーアップするのもお楽しみに！！感想も待ってます！

9 ・殴り込み（前書き）

敵が待つ塔へ向かうことを決意した、しんのすけたちとドラえもん
ズの行く末は！？この後すぐっ！

9・殴り込み

どこかの暗い部屋の中。

数人の話し声が、静かに響いていた。

「逃げられちゃったみたいだね。」

「結構しぶとい……………」

「ええ、でも予想はしてたわ。それにしても一緒にいたタヌキみたいな奴らは何なのかしら。ロボットらしいっていう話だけど。」

「さあ…でもまあ、そんなことはどうでもいいじゃない。それよりあたしは、明日みんながここへ乗り込んでくるかの方が気になるわ。どう思う?」

一拍おいて、くすくす笑う声。

「乗り込んでくるよ。絶対にね。」

「僕も、そう思う。」

「じゃあ、こっちもそれなりに歓迎してあげなくちゃいけないわよね……………」

部屋の中に、再びくすくす笑いが広がった。

「う……うん……」

王ドラの意識は、もう目覚める一歩手前まで来ていた。目が覚めそうだけでももう少し眠っていたい、そんな感覚の中だ。

「うう……」

それでもやはり、覚めるものは覚めてしまう。

王ドラは目をぼんやりと開いたが、いまいち何も見えてこない。無意識に、寝返りしていた。

その途端、心臓が止まるかと思った。

目の前に、可愛い女の子の顔があつたのである…。

「……………!」

何とか顔の向きを変え、危機から回避した王ドラだったが、まだドキドキ感はおさまらなかった。

（まったく情けない……………彼は男の子なんですよ!）

何とか自分にそう言い聞かせようとしながら、王ドラはもう一度寝返りを打とうとした。すると、その瞬間。

四次元袖の中から、ころんと何かが転げ落ちた。虹色に光るものが……………。

（……あ……………親友テレカ!）

そういえばここへ来てしまったのも、親友テレカが突如光り出したのが原因だったはずだ。それが今でも、それほど強くはないが輝き続けている。

どういうことだろう。親友テレカがこんなに長い間、こういう光り方をするところなど、見たことがない。この親友テレカはドラえもんズの間でだけ通用するようになっていいるはずなのだが……………。

「うん……」

キッドのうめく声を聞いて、王ドラはハッと我に返った。
そうだ、ぐずぐずしてはいられない。みんなを起こさなければ。

「あー、オレ腹減っちゃったな……」

キッドが腹をなでながら、眠気混じりの声で言った。ドラえもんズ
一の食いしん坊である彼は、空腹だとダメダメなのだ。

それを聞いたしんのすけも、愚痴るような口調で呟いた。

「オラもお腹空いたゾ。何かない？」

「僕も……昨日は何も、食べてないんです。」

トオルもやや、控えめに言った。

すると王ドラが、少し得意げな笑みを浮かべた。

「こんなこともあるのかと、私の発明品の一つを持ってきましたよ。
これがあれば、少なくとも食生活の面では困らないはずですよ！」

「お前の発明品？」

マタドローは半信半疑の様子だった。視線がそれとなく、トオルの
方へ注がれている。

「食ったら女になったりしねーだろうな？」

キッドもかなり心配そうだ。

「だ、大丈夫ですよっ！これはれっきとした完成品ですから、安全
なのは間違いなしです。ほらっ！！」

と、王ドラが四次元袖から出したのは、小さな茶色のパンみたいなやつだった。みんながしげしげと、物珍しげにそれを眺める。

「別に特別おいしくはなさそうだな。」

「ええ、これ自体に味はないんですが、このパンは食べた者の気持ちに応じて味を自由自在に変えるんです。例えばステーキを食べた人ならステーキの味がするし、カレーを食べたい人はカレーの味がする、というように。」

「へえ……………」

聞いているしんのすけたちの目に、輝きが増してきた。

「それに栄養バランスは抜群。便利でしょう？身体に悪いとか、そういうことを気にせずに好きな味を楽しめるんですから。」

「…じゃあさ、ビールとかでもいけるわけ？」

これはひろしの言葉だ。

「味は再現できますけど……………アルコールがないから、酔うことはできませんよ。」

「オラほしーっ！ちょうだいー！」

たちまちしんのすけを皮切りに、キッド、マタドーラ、ドラリーニヨ、ドラニコフやドラメットまでが王ドラの発明したパンをねだりに来る有様。王ドラは慌てた。

「ちょ……………押さないで下さい！」

それを遠巻きに眺めているトオルに、野原夫婦とひまわり……………。

とにかくまあ、朝食の時間はにぎやかに過ぎていった。

「着いたであーるよ。」

ドラメットがみんなに声をかけた。

朝食を終えた一同は、絨毯に乗って一直線にあの塔へと飛んできたのである。

そしていざ、中へ入ろうとしたのだが……。

「あれ？これ出入口ねーじゃん。」キッドが首をかしげた。彼の言う通り、巨大な塔の根元に当たる部分に、当然出入りできる所があるはずなのだが、それがないのだ。

つるんとした金属質の壁が、ぐるりと繋がっているばかり。かと言ってこれをぶち破るのは、相当骨が折れそうだ。

「何だよ、来いって言うておいて入れねえってどういうことだよ。」
マタドーラが腹を立てて、頭の角で壁を何度か引っ掻いたが、傷一つつかなかった。

「もしかしたら逆に、上にあったりして〜。」

「上え！？そんな、まさか……。」

そのまさかだった。

「おいおい、ドラリーニョの言ったことが当たっちゃったぜ……」

キッドが、下を見ないよう気をつけながら、ため息をついて言った。

塔のてっぺんの部分に、大きな穴がぼっかりと口を開いていた。

「ここから入っちゃうの？」

「だって他に入れるとこねーだろ。」

「でもピンポンって押すところがないゾ。」

「あるか、そんなもん!!」

ともかく絨毯は、その穴の中へと吸い込まれるように入っていった。

「来たぞ！」

いくらか進まないうちに、突然声が響いて辺りが真っ暗になった。頭上の穴が、閉じてしまったのだ。

そして室内に、パツと明かりが灯った。

「!？」

何ということだろう。

そこは百数人も人間で いや、吸血鬼たちで、埋め尽くされていたのである。「四天王様のところへ行かすな！捕まえる！！」たちまち吸血鬼たちが、わっとこちら目がけて押し寄せてきた。絨毯を操り、ドラメットが大慌てで逃げ出す。衝撃波が、幾度もすぐそばをかすめた。

「や、やべえぞ！あの薬を使うか！？」

「ダメですよ、エル・マタドーラ！あれはいざという時に…」

「今つていざという時じゃないのかよ！」

一方トオルたちは、吸血鬼たちが襲いくる中身を縮めて寄り合っていた。

「……………！」

しんのすけがあることを思いついたのは、その時だった。

「父ちゃん！ちょっとごめん！！」

「え？」

突然呼びかけられ、きょとんとするひろしの足から、しんのすけは靴下を抜き取った。

もちろん鼻をつまんでいる。ひろしの足は、最強レベルに臭いのだ！

「えい、えい！」

その靴下を、しんのすけは押し寄せてくる吸血鬼たちに向かってぶんぶん振り回した。

「しんのすけ、何やってんだ！？」

キッドが怒鳴りつける。

が、しかし…。

「…うわっ！何だこの匂い！！」

「げっ、くさっ！！」

吸血鬼たちが、慌てて鼻を押さえて退散していく。近づき過ぎて、匂いをまともに嗅いでしまった者たちなどは、気を失って倒れてしまった。

「そ、そうか！奴らは鼻がきくから、逆に臭いものとかに弱いんだ！！」

「っ！か本当にすげえな、その匂い。」

ドラえもんズの面々も、思わず鼻をつまんでいた。

「今なら父ちゃん、春日部乗っ取れるゾ……………」

「はあ……………」

予想外の効果に、しんのすけたちも呆れてしまったのだった。

「…ん？見るよ、あそこにも穴があるぜ。」

マタドーラが真下を指差した。

「あそこもどっかに通じてるかも知れないぞ。行ってみようぜ！！」

「よし！」

ドラメットは軽快な飛ばしっぷりで敵を振り切ると、あっという間に床の穴の中へと下りていった。そこに何が待っているかも知らずに……。

一言で言えば、ド派手、だった。

「何だよこの部屋は……」

どこもかしこもピンク色ばかり。床には柔らかい、豪華そうなピンクのクッションが敷きつめられて、天井には大きなシャンデリアがある。女の子の子供部屋の、規模と派手さを倍にしたような感じだ。

「ねえ見て見て！あそこに何か書いてあるよ！！」

ドラリーニョが天井の辺りに、何だか看板らしいものを見つけた。ドラメットがそれを読み上げる。

『第一四天王の間』

「何……四天王って、昨日あの女が言ってた四天王か！？」

「まさか、四天王がこんなところに住んでるわけねーだろ。」

マタドーラがまるで信じていない様子で言った。

「いえ、本当よ」

「！」

突然部屋の隅から声がして、全員が反射的にそちらを振り返った。

そしてトオルは、束の間言葉を失った。

「き、君は………！」

9 ・殴り込み（後書き）

第一四天王の正体は、なんと……！！？次回から激闘必須！

……なんて盛り上げといて悪いんですが、これからはクレしん&銀魂の小説更新に移らせていただきます。かなり待たせることになると思いますが、応援よろしく願いますm（――）m

感想もくれたら嬉しいです！！

10・第一四天王（前書き）

第一四天王の正体は………？そして今回も、ドラえもんズの誰かが
パワーアップ！？どうぞお楽しみ下さい！！

10・第一四天王

あまりの驚きに、トオルは言葉を失っていた。

「き、君は……………」

そしてそれは、野原一家も同じであった。

「う、嘘!？」

「君は……………」

あいちゃん!」

「お久しぶりですわ、皆様。」

丁寧に会釈する美少女をにらみつつ、キッドが尋ねた。

「こいつも知り合いなのか、しんのすけ、トオル？」

「うん…」

短く答えるしんのすけ。トオルは首をかしげていた。

「僕らの友達の、酢乙女^{すおとめ}あいちゃんですけど……どうしてここに

……ハッ！まさか……！」

「そのまさかですわ。」

あいが、にやりと笑ってみせる。

「あいは吸血鬼四天王の一人…第一四天王でございますわ。」

「な、何い！？こんな小さなセニョリータが………！」

マタドーラが信じられないというような声を上げて、あいを見ている。ドラえもんズの他のメンバーも、一様に戸惑いと驚きの表情を浮かべていた。

「そんな…あいちゃんが四天王の一人だったなんて……」

「ご心配なく、風間くん。あなたとしん様たちは、ひどい目に合わせるつもりはありませんから。でもそこにいらっしゃる、ロボットの方々には……」

消えていただきますわよ！」

あいが叫んだ瞬間、驚くべきことが起きた。

今まで何もなかった部屋の中の空間に、突如無数の何かが出現し、ふわふわ漂い始めたのだ。よく見れば、それは……

宝石だった。

「な、何じゃこりゃ！」

キッドがぼかんとして空中に漂う宝石たちを見回した。それぞれが天井のシャンデリアの光を跳ね返してきらきら輝き、実に美しい眺めだ。

「皆さん！この宝石には何か、危険な力がこめられてる気がします！決して触らないで下さい！」

王ドラがぬんちゃくを振り回しながら叫んだ。

「ぶ、らじゃー！」

「分かったわ！」

「たやーい！」

「……口だけじゃねーか、お前ら！」

マタドーラの言う通り、威勢よく返事を返しながらも、野原一家は既に漂う宝石をいっぱい手元に集めていた。特に宝石好きなひまわりの執念はものすごく、キッドが何度取り上げようとしても、決し

て離そうとしなかった。

「ちょ…何やってるの!？」

トオルも慌てて宝石としんのすけを引き離そうとしている。

その時だった。

突然、しんのすけの背後にあったダイヤモンドが、2メートルはありそうなサイズに巨大化したのだ。

「お!？」

後ろの異変を感じ取ったしんのすけが振り返った時には、巨大ダイヤモンドが既に強い光を放とうとしているところだった。

「まずい!何か来る………!!」

しんのすけのもとへ走る王ドラ。しかし間に合いそうにもなく……。

「危ない!」

「おわっ!!!」

トオルがしんのすけを蹴飛ばし、しんのすけは叫び声を上げて地面に倒れた。しかしおかげで、謎の光の襲撃からは逃れた。

代わりに、トオルがそれをまともに浴びることになった。

「風間くん！」

「トオル！」

キッドたちが叫んだが…。

光がおさまった時、地面にころん、と何かが転げ落ちた。

吸い込まれそうなほど青い色をした、一個のサファイアだった。さっきのダイヤモンドは、もう元の大きさに戻っている。

「な、何だ！？トオルが宝石になっちまったぞ！」

「風間くん…」

自分をかばって犠牲になったトオルのことを思い、しんのすけはサファイアを抱えたままその場に座り込んでしまった。

「てめえ！こいつらには手を出さないって、さっき言ってたじゃねーか！！」

キッドが怒りの声を上げたが、あいは平然としている。

「危害はもちろん加えていませんわよ。ただお仲間になっていただく時、抵抗されないように、少しの間宝石になっていたただけですわ。」

「宝石にしちゃうなんて……吸血鬼って、そんなこともできるの？」

みさえが震え声で言った。もちろん、集めていた宝石は全て放り出してしまっている。

「あいたち四天王は、他の吸血鬼にはない特異な力が与えられていますの。あいの場合は、こうやって宝石を操り、生き物を宝石に変える術ですね。ご安心下さい、風間くんはすぐに元に戻しますから……こいつらを、片づけてからね」

あいがドラえもんズの方へ向き直る。と、やる気満々の声が響いてきた。

「片づけるだと？言ってくれるじゃないか、セニョリータ！そうとなったらこのオレが相手だ！」

「エル・マタドーラ！」

王ドラが驚いて叫ぶが、マタドーラはヒラリマントを手に、もうあいの前へ進み出ていた。

「トオルを元に戻してもらうぜ、セニョリータ！」

（フツ………どうせこの宝石でもで攻撃するんだろ。こんな小さいもの、オレのヒラリマントで余裕で跳ね返せるぜ！）

あいがくすくす笑った。

「まあ、自分から来て下さるなんてありがたいですね。

それじゃ………参りますわよっ！」

そう言って、あいが何かを床から取り上げた。

鎖つきの鉄球………いや、巨大なダイヤモンド球である。

（全然違う！）

あてが外れたマタドーラは、振り下ろされるダイヤモンドハンマー攻撃に、慌てふためいて逃げ出した。一体彼女の細い腕のどこに、あんな力があるんだ？ドラえもんズ一番の力持ちとの定評があるマ

タドローラでさえ、あのような巨大ダイヤモンドを軽々とは振り回せない。

「あら、どうしましたの、さっきまでの威勢は？ほら、ほら、ほら！！」

ダイヤモンドが床に穴を開ける。

「くっ……」

ヒリリマントでそれを微妙に避けつつ、何とかかわしていくマタドローラ。しかし彼は、明らかに劣勢に立たされていた。

「ぐわっ！」

かわしきれず、吹っ飛ばされたマタドローラは、痛みをこらえて床を転がり、続く攻撃をよけた。

「まずい、このままじゃ……やられる！」

「ちよつと……マタドローさん、やばいんじゃないの！？」

みさえがひやひやした表情で叫ぶ。その時王ドラが、何かを思い出した。

「そうだ、エル・マタドロー！あの薬です！あれを使ってパワーアップするんです！」

「……ああ、あれか……！」

マタドローラも、つい今の今まで忘れていたようだ。四次元ポケットから、あの大切な薬を取り出した。

「よっしゃ、行くぜー！」

ところがタイミング悪く、ダイヤモンド球がマタドローラの腕をかすって、薬が跳ね飛ばされてしまった。

「ああっ！」

マタドローラが慌てて薬の後を追いかけるが、とても間に合いそうに

ない。薬のピンは、床に当たって粉々に砕けてしまおうかと思われた。その時、王ドラが叫んだ。

「マタドール！あの薬をドラ焼きだと思っんです！-！」

(……………！)

マタドールは束の間目を細め、ピンをにらんだ。

その瞬間、彼の頭の中で何かが切り替わったらしい。動きがぐんと速くなったのだ！

「速っ……………！」

と、ひろしが言うか言わないかのうちには、マタドールは薬の落下地点に追いつき、キャッチした。

王ドラと同じように、口で。

ドンッ！

「！？きゃあつ、何ですの、この膨大なエネルギーは？何が始まるというの！？」

あいのダイヤモンド球を振り回す手が止まる。爆風が吹き荒れ、スカートを押さえるのに必死になっていたからだ。

「来ます…………… 来ますよ！マタドール2が！-！」

「マタドールBだろ！」

「ううん、マタドールスペシャルだよ！」

「どうだっていいでしょ！」

シューウウ…。

煙が晴れた向こうに見えた、その姿。それは……………。

「パワーアップ、完了」

「…え？え、ええーっ！！」

「な、何ですの、これは………」

「……あいになった！？」

そう、さっきまでマタドローラがいた所に出現したのは、酢乙女あい
にそっくりな、女の子だったのだ！

女の子（？）がきゃぴきゃぴと言った。

「あたしはエム・マタドローラ！」

「エム！？」

「この状態でいられるのは18分23秒だけなの」

「さつきと違うじゃん！ていうか何でそんなに微妙な時間なんだよ！！」

みさえが慌ててマタドローに駆け寄る。

「ちょ、ちよつと、あなた本当にマタドローさんなの！？」

と、腕をつかもうとした途端、

「きゃっ！」

悲鳴が上がった。

「！？どうしたの？」

「…い…痛い…」

あいそづくりの少女が、弱々しい声で言った。なんと、目に涙まで浮かべている。

う、嘘でしょ？これじゃパワーアップどころか…。

「おい、お前！」

「え？」

「え？じゃねえよ！パワーアップしたんだろ！さつさとあいつと闘えよ！！」

「あいつ？」

「あいつだよ、あいつ！」

キッドは荒々しくあいを指し示して、振り返り………呆氣にとられた。

マタドローが…女の子になったとはいえ、あのマタドローが、震えながらポロポロ涙をこぼして泣いているではないか！

女の子の涙に弱いキッドは、大いに慌てた。

「いや、ちよつ…どうしたんだよ、いきなり！」

「…きないわ。」

「はあ？」

「できない！あたし人を傷つけるなんてできない！！」

「……………」

どうやら、とんでもない事態になってしまったようだ。キッドたちは、一様に頭を抱えてしまった。

どうしよう…。

部屋の中に、あいの笑い声が響いた。

「何をしてらっしゃるの、あなた？まあいいですわ、これで終わりにして差し上げます！！」

ビュッ！

特大ダイヤモンド球が、ものすごい勢いで振り上げられた。エム・マタドーラめがけて…。

「うわ！やべえ、逃げろ！！」

ところがエム・マタドーラは逃げようとしない。その場に座り込んだまま、涙声で叫んだ。

「お願い、あたし争いが嫌いなもの！無意味な闘いはやめて、話し合いで解決しましょう！」

「何言ってるんだこの人……」

さすがのしんのすけも、呆れるより他にないようだ。

「あら、いいですわよ…」

これを受け止められたらね！」

ダイヤモンド球が、超スピードで振り下ろされた。

「エル…じゃない、エム・マタドーラ！何してるんですか！？早く逃げて下さい！！」

「さっさと動け！潰されたいのかこのポンコツが！！」

しかし王ドラとキッドが叫んだ時には、もうダイヤモンド球は避けきれない所まで来ていた。マタドーラの頭の真上に。

「マタドーラ！」

もはや全員が、マタドーラの死を覚悟した。

ドンー！

「……………え？」

酔乙女あいは、自分の見ているものが信じられなかった。

「ひっく…ひっく…うっ…」

これで……いいでしょ?。」

まだ泣いているエム・マタドーラ。しかし、その高く上げられた右手には……

ダイヤモンド球が、乗っかっていた!

「嘘だろ!受け止めやがったぜ!」

キッドたちが驚愕の声を上げる。しんのすけも思わず、

「おおーっ、カッコいいーっ！」

と、歓声を上げていた。

「ね？だから、話し合いで解決しようよ。」

「……………」

あいは黙って、思考をめぐらしていた。

（何ですのこいつは……………弱いのか強いのか、さっぱり分からない。

……………でもここはうまくとりなして、油断を誘うとしようか。）

「…分かりましたわ。それじゃお話を承りましょう……………」

ガッ！

「……………」

自分そっくりな少女が、突然ダイヤモンド球を両腕で抱え込んだのを見て、あいは当惑した。

何をするつもりなの？

「いやあああ！！！！」

「えーっ！！？」

なんとダイヤモンド球を、こちらめがけて投げ返してきたのだ！

ドグシャツ！

「きゃあああああ！」

あいの悲鳴は、ダイヤモンドの下で潰されてしまった。それを呆然と見るドラえもんズと、野原一家。

「すごい…明らかに力が増してる……」

「一応パワーアップはしたようですね……」

エム・マタドローはまだぐずぐず言っていた。

「ううっ…この分からずや……」

「えー？今分かってたじゃん！分かってたよあいちゃん！！」

すかさずつつこむひろし。その時ダイヤモンドが押しのけられ、下からボロボロになったあいが、愕然とした表情で現れた。

「何！？何ものですか、あなたは！」

「あたしはエム・マタドーラ。人を傷つけるのが大嫌いなもの。」
「嘘つけ！」

10・第一四天王（後書き）

弱いようで強い（？）、エム・マタドーラが大活躍！？乞うご期待！

「さあ、次回はあ
たしが平和な一時をお送りしちゃうぞ
ーラでしょ！？気持ち悪いですよ！」

11・心に平和を！？（前書き）

エム・マタドーラの不可解な力が炸裂！？第11部、始まり始まり
！

11・心に平和を!?

(く…こいつ、本当にパワーアップした!?)

酔乙女あいは、痛みをこらえて立ち上がった。吸血鬼の回復能力のおかげで、身体の痛みはそう長く続かなかったものの、心の動揺はなかなか取り去ることができなかった。油断していたとはいえ、あの攻撃をまともに食らってしまうとは……………。

それでも、こいつらを倒さなければならない。それが命令なのだから。

それに……………。

「…フフフ。」

「!」

あいの笑い声が、しんのすけたちの歓声をぴたつと止めた。

「なかなかやるじゃありませんの……………でも残念でしたわね。」

「こっちは、一人じゃないんですから」
「何!？」

ドンッ!

キッドが聞き返すのとほぼ同時に、後ろの天井辺りから飛んできた衝撃波が、ドラニコフを直撃した。

「ギャウッ!」

「あ!ドラニコフ!」

苦しげに叫んで床に倒れたドラニコフを、ドラリーニョが慌てて抱き起こす。

「てめえ、何しやがる!」

キッドが怒りの声を上げて、衝撃波の飛んできた方向にこぶしを振り上げた。
天井近くに浮いている男が一人いた。そして彼もまた、野原一家にとって見覚えのある人物であつた。

「黒磯^{くろいそ}さん！」

「んん？こいつも知り合いなのか。」

「ええ、あいちゃんのボディーガードをやつてる人なんだけど…」

「ボディーガードですか…なるほどね。」

王ドラが、鋭い目つきで黒磯をにらむ。

「よくも私たちの仲間を！しかも背後から不意打ちなどという卑怯な手を使うとは、許せませんよ！アチョー！」

王ドラの手からぬんちゃくが飛んだ。しかし黒磯はするりとかわし、ぬんちゃくは壁に傷をつけただけであつた。

「ちっ…」

「卑怯でも結構です。我々はどのような方法を使っても、野原さんたちを仲間にせねばならないのですから。」

無表情な声で、平坦にしゃべる黒磯。

「…そしてそれを邪魔するあなたたちには、たとえ卑怯な手を使っても消えてもらわなきゃいけないってわけですね。」

あいの声も、同じくらい無機質だった。聞いていて、みさえとひろしは思わず寒気がしたくらいだ。

「…そんなの、ひどいわ。」

「え？」

あいと黒磯は、声のした方へ顔を向けた。

エム・マタドーラが立ち上がっていた。

「どうして無駄に争おうとするの？どうして無駄に誰かを傷つける

の？分からない…あたしには、あたしには理解できない！」

エム・マタドーラの声は、さっきのあいの冷たい声と同じものとは思えないほど、悲しみに満ちていた。キッドたちも思わず、胸がずきんとしたほどだ。

しかしあいの心までは、届かなかっただけらしい。

「うるさいですわね、さっきからごちゃごちゃと！これでくたばりなさい！！」

あいがさつと手を上げる。すると空中をふわふわ漂っていた宝石たちがぴたりと動きを止めたかと思うと……キッドたちめがけて、一斉に襲いかかってきた！

「うおお！いて！これいてえ！」

「アチョーッ、アチョーッ！…あだ！やっぱりダメです！」

ぬんちやくを振り回していた王ドラは、宝石を打ち砕いたものの、その飛び散った破片に腕を傷つけられてしまった。これではキリがない。

「危ないっ！」

ドラリーニョが突然叫び、しんのすけを突き飛ばした。

「おお！…あ！ドラリーニョ、耳が……！」

起き上がったしんのすけが思わず大声をあげた。宝石の破片にかすられ、ドラリーニョの耳のてっぺんが、少し欠けてしまっている。ドラリーニョはちよつと耳に触ってみたが、すぐに笑顔になった。

「大丈夫大丈夫、これぐらい。全然痛くないもん！」

「ドラリーニョ、しゃべっている場合ではないであるよ！」

ドラメットが叫ぶ。彼は一人、小型の絨毯に乗って、部屋の中をあちこちと猛スピードで飛び回っていた。

そのすぐ後ろには、同じくすごいスピードで追いかける宝石の大群が！

どうやら宝石たちは、キッドたちだけを攻撃しているらしい。しんのすけたちを傷つけるつもりはないのだ。

「あ！ドラメットが大変だ！！」

と叫ぶと。ドラリーニヨはふところから取り出したボールを、力をこめて蹴った。

ドシンッ！

ボールは勢いよく飛んでいき、宝石の大群の中へと突っ込んだ。素早くかわされてしまったので破壊することはできなかったが、少なくともドラメットから引き離すのには成功した。

「ガウー！ガウー！！」

ドラニコフはコサック風の動きで、意外と素早く宝石の動きを回避していた。できるならば丸いものを見て狼に変身し、火を吹いてこの宝石たちを一掃したいところだが、四次元マフラーから何か出そうとしている間に、攻撃の餌食になってしまっただろう。

あいはなかなか相手をしとめることができないので、イライラしてきていた。

「しぶといですわね……………そうだわ、あのエム・何とかって奴はどうかしら？」

いくら力が強いとはいっても、この無数の宝石たちのスピードについていけるとは限らないはずだ。

あいは期待の目を、エム・マタドーラのいた辺りに向けた。きっと今頃は、ずたずたになって倒れて……………

いなかった。

「ええ！？嘘！」

エム・マタドローは無傷のまま、そこに立っていた。左手に持った赤い布みたいなのを振り回している。なぜかそれが近づくと、宝石たちは皆方向を変えていつてしまうのだった。

そしてなぜか、右手には絵本を持って読みふけているのである。

「お：お前、やっぱヒリリマントは持ってたんだな！！でも何その絵本？」

「まあマタドローといえば、ヒリリマントですからね……」
息を切らしながら、キッドと王ドラが苦笑した。

しかし、そこに隙が生まれた。

ガシュッ！

「がつ！」

宝石数個の直撃を背中や腹に受け、キッドと王ドラは痛みにひっくり返った。

「二人とも！」

ドラリーニョが助けに向かおうとするが、自分がよけるので精一杯だった。ドラメットも再び宝石たちの追跡を受け、ドラニコフは……もうコサック風を放棄して全力疾走している。野原一家も、宝石たちに囲まれたまま動けずにいた。うかつに動いたら、さっきのトオ

ルみたいに宝石化されてしまうだろう。

「まず二人……」

あいの不気味な笑いと共に、宝石が地面に倒れた二人に向かって降り注ぐとしていた。

「キッド!」

「王ドラ!!」

二人の名前を呼ぶ声が、室内にむなしく響き渡った……。

ブオン！

「……………え？」

あいと黒磯は、わけが分からずにぼかんと立ち尽くした。

部屋の中が……………変わった？

いや、そこはもう、部屋ですらなかった。地面には青々と草が生え、花が咲き、周りにはいくつもの木々。爽やかな香りのする風がそよぎ、そして空は、きれいな青色をしている。

森。一言で表せば、ここはまさに森の中であつた。

それはいいとして、なぜいきなりこんな所へ来てしまったのだ？まさかバトル中に夢を見るわけもあるまい。

「何なの、ここは一体？」

「さあ……………」

「…ここは、絵本の世界。あなたたちをあたしの絵本の中へ、招待したのよ。」

「!？」

声のした方向を振り返ると、エム・マタドーラが立っていた。

そしてその後ろには、野原一家にドラえもんズの姿。キッドと王ドラは、ドラメットたちに助け起こしてもらっていた。

「え、絵本の世界ですって？そんなはず…!」

「本当のことよ。そして悪いけど、ここじゃあなたたちの力は無い等しい。この世界は、あたしの意のままなの。」

「何を言ってるの？そんなはずないわ!!」

あいは鼻で笑って信じようとしてもしない。そんな彼女に、エム・マタドーラが静かに言った。

「信じられないって言っんなら…」

証明してあげましょうか？」

「え？」

あいは目を見開いた。

いつのまにか、マタドローの手に一つの宝石が握られている。きれいな青色の、サファイアだ。

そう、トオルが宝石に変えられた姿だった。

「何をす……」

あいが言いかけた、次の瞬間。

ボンッ！

煙が突如、立ち昇ったかと思うと、

「うーん……あれ？何ここ？」

中から、地面に座り込んだ体勢のトオルが現れていた。きょとんとした表情で、同じくらいびっくりして固まっているあいと黒磯、それにキッドたちを見回し、最後にすぐそばに立っている人物に気がついて、びくつと後ずさった。

「え？あ、あいちゃんが、ふ……ふた……！？」

「おおーっ、風間くんが戻ったゾ！」

「そんなバカな……」

しんのすけの歓声に、あいの呆然とした呟きが重なる。酔乙女あいにそっくりな少女は、トオルをなだめるような口調で言った。

「ご安心を。あたしはエム・マタドロー、あなたを助けてあげただけよ。」

「エム……ってこの人、マタドローさんなの！？」

やはりトオルも、キッドたちの負けず劣らずびっくりしたらしい。

呆気を取られてその少女を眺めているばかりだ。

このままではマタドローと一緒に、敵の攻撃を受けかねないとも思ったのだらう、王ドラが呼びかけた。

「トオルくん！あとの闘いはマタドーラに任せて、早くこつちへ！」

「え…あ、は、はい！！」

王ドラの言葉の言わんとしているところを察知し、トオルは転がるようにしてしんのすけたちの元へ駆け寄った。たちまちシロが、嬉しげに吠えて飛びつく。

「黒磯！何をばやっとしているの！？早く衝撃波を…！！」

あいがお嬢様らしくもない金切り声を出した。しかし黒磯は青白い顔をさらに青くして、震える声で答えた。

「も、申し訳ありません、お嬢様…しかし、出ないのです、衝撃波が。」

「嘘でしょう！！？」

嘘ではなかった。あいも衝撃波を放とうとしたが、手の平からは何も出てこない。それどころか、身体が思うように動かないようだ。息苦しく感じられる。

そんな…。ここは本当に、奴の意のままなのか？

「…でも何だかんだ言って、すごいですよ、あのマタドーラは！」

「もしかしたら、このまま勝てるかも知れないである！！」

王ドラとドラメットの表情にも、明るいものが蘇ってきた。

「さあ、現状が理解できたかしら？」

「な、何をするつもりよ！」

あいは自分の声に怯えた調子が混じるのを、どうしても止められなかった。

「別に手荒なことはしないから、大丈夫よ。…あなたたちのすさんだ心に、平和を送ってあげるだけだから」

「？……………！！」

最初、わけが分からないという表情をしていたあいと黒磯の顔が、驚愕の色に染まった。なんだ、これは？

熱い。

ちょうど心臓の辺りが、異常なほどに熱くなってきた。それに呼応するかのように、鼓動も激しくなっていく。

ズギュン！

次の瞬間、胸にもものすごい衝撃が来た。外からではない。体内からのものだ。まるで弾丸で心臓を打ち抜かれたかのような衝撃に、あいは身悶えした。

「う…苦…し…」

ズギュン！

もう一度来た。

今度はこらえきれず、あいは地面に倒れた。視界がだんだん、霧に覆われるように薄れていく。

それと同時にものすごい熱さが身体中に広がり、あいの意識は闇の中へと落ちていった……。

「…でさあ。」

キッドが少し、ためらいがちな口調で切り出した。

もうあのメルヘンチックな森の中ではない。あいと闘っていた部屋に戻っている。

ただし、空中を漂っていたあれだけの宝石は、全て消えてなくなっていた。

「この二人に、何をしたわけ？」

「心に平和を送ったのよ。」

「だからそんな説明じゃ全然分かんねえってば。」

さつきからずっとこの調子だ。

「で、でも、やっつけたのは確かなようですネ。」

そう言う王ドラの足元には、あいと黒磯が同じような姿勢で倒れていた。二人とも、胸を押さえている。

用心深く触れてみたところ、気絶しているだけで命に別状はないようだった。

そして、それはともかく……………

「わーい！僕たち勝ったんだー！！」

「やったゾ！わーいわーい！！」

ドラリーニヨとしんのすけの二人は、もう既に緊張感から解放されたらしく、喜んで大騒ぎしている。

「こら！あいちゃんたちがまた目え覚ましたら、どうするのー！！」
みさえが慌てて怒鳴る。すると、その時、

ピコーン！ピコーン！

ボシュッ！

「あ！戻りましたよ！」

ちょうど18分23秒たったらしい。少女の姿が煙にまぎれて消え、それが晴れた後には赤い身体の、角を生やしたエル・マタドーラが

.....

ぐーすか眠っていた。

「なんだこいつ……シエスタしながら闘ってたのかよ……」

「まったく幸せ者であるな……」

呆れるキッドとドラメット。王ドラがマタドローに歩み寄り、伺うように他のメンバーを見やった。

「どうします？起こしますか？」

「おう、頼む。こいつ持って移動するのはメンドクせえもんな。」

そこで王ドラは、いつものようにマタドローを起こしにかかった。

ぬんちゃくを使う覚悟をしていたのだが、幸い目覚める一歩手前だったらしい。一回揺すっただけで目を開いた。

ぼんやりとした声が、それに続く。

「んー？…俺、何してたんだっけ？」

王ドラたちは束の間顔を見合わせたが、やがて王ドラが、ため息混じりに告げた。

「色々ありましたよ、エル・マタドーラ。とにかくこの敵は撃破しました。さっさとそのよだれをふいちゃってください。」

11・心に平和を！？（後書き）

うーん、今回の話、なんかおかしくなかったかなあ…納得のいいかな
い私（汗）。ご指摘でもいいので、どんどん感想をお寄せ下さい。
変なら変と正直に…最近あまり感想が来ないので。次回は第二四天
王の登場ですが、今回よりはシリアスな感じになる予定です、
お楽しみに！！

12・落ちた先には（前書き）

ドラリーニョが暴走します。不快に感じた方は叱って下さって結構です…。

12・落ちた先には

酔乙女あいはい敗北の屈辱を味わいながら、床に横たわっていた。

もう意識は戻っている。黒磯もあと少しすれば、目を覚ますだろう。野原一家とトオル、そしてあのいまましいタヌキロボットたち（あいはいまだに彼らがタヌキだと信じていた）は、既に下への階段を下りていった。

でも、今度はそう簡単にはいかないわよ。

あいは思わず、にやりとなった。

次の階で待ってるのは、あい以上の力を持つ四天王たちばかりなのだから。

しかもあの『地獄』の戦場で、彼らが生き残れるとは、到底思えなかった。

その頃、キッドたち一行は階段を降りきって、部屋に通じているらしい大きな扉の前に立っていた。

「ここに、二人目の四天王が待つてるんだな…よし、みんな行くぞ！」

ところが、返事が返ってこない。どうしたのかとキッドが振り向くと、みんな何だか妙な顔をしている。

「おいおいどうしたんだ？まさかここまで来て、怖気づいたって言うんじゃないだろうな？」

励ますように声をかけると、王ドラが少し心配そうな声で、キッドに囁いた。

「実は…マタドーラがまだ……」

振り返ったキッドの視線の先に、がっくしとうなだれてのろのろついてくる、エル・マタドーラの姿が目に入った。その傍らでドラマットが、どう声をかけたらいいのか分からないらしく困った顔をし

ている。

なるほどな。キッドは一人うなずいた。マタドーラは可愛い女の子が大好きだが、その分自分が男らしくあることを意識する。『男の美学』と言い張って、なぜかドラ焼きを剣に串刺しにして食べていたりするほどだ（それを見るたびに、キッドはいつも食べにくそうだなと思う）。

だからこそというか、彼は女装した男が大の苦手だ。それなのに自分のパワーアップした姿が女の子だったと聞いて、まだショックから立ち直れないでいるのだった。

「マタドーラ！そう落ち込むな！すぐに次の敵との闘いが始まるんだぜ！沈んでる暇はないんだ！！」

わざと叱りつけるように叫ぶと、キッドはドアを押し開けた。どんな光景が待っているのかと、内心ハラハラしながら。

しかし、その心配は無用だった。

なぜというに、彼はその扉の向こうを見ることができなかったからだ。足元の床が、一瞬で消滅したために。

「!？」

ドラメットが絨毯を出す間もない。ぽっかりと開いた穴に、一同は呑み込まれるようにして落ちていった。

「た、高い所、怖い！」

叫んで王ドラにしがみつく、高所恐怖症のキッド。

「わっ！ちょ…離して下さいキッド!!」

背は低いものの、様々な高度な部品とオイルが体内につまっているために、ネコ型ロボットの体重はかなり重いものだ。

そんな重たいキッドにしがみつかれ、自分のも合わせて重さがダブルになったのだから、たまったものではない。王ドラはキッドと一緒に、超スピードで落ち始めた。

「うわあああああああ………」

王ドラとキッドの悲鳴は、あっという間に遠ざかっていってしまった。

ドラリーニヨは相変わらず能天気なもので、

「ばいばーい、王ドラ、キッドおー！」

「まったくドラリーニヨは…それ、空飛ぶ絨毯である！」

「よっしゃ、みんな乗れえ！」

「おー！」

さすがに活気を取り戻したマタドールの大声に応じ、みんなまさに火事場のバカぢからとでもいうべきものを発揮した。どうやって空中を動いたのか、全員が無事に絨毯の上に転がり込んだのである。

ところが…。

「あれえ？ドラマット、これさっきよりちっちゃくない？」
ドラリーニヨに言われ、ドラマットははっとした。
しまった！間違えて、通常サイズを出してしまったのだ！！

そして、当然のごとく……………。

「定員オーバーである！」

「ギャー！！！」

絨毯はしんのすけたちの重みに耐えられず、ぐにやりとなり、放り出されたみんなは再び落下することになった。

みさえは思った。も、もしかして、私たちこのまま死ぬの！？嫌よ！こんな若さ（！）で死ぬのは！！
せめてひまわりとしんのすけだけは……………。

バシャーン！

「ぶわっ！水！？」

一同は突然、ひんやりした水面に叩きつけられた。
一瞬息がつまるほどの衝撃が来たが、幸いそう深くない。大人なら、足が余裕でつくぐらいの水深だ。すぐにみんな、水面から顔を出した。

ちなみにネコ型ロボットは、重いながらもちゃんと水には浮けるようになってる。

「な、何でいきなり水が…？」

「さあな。でもおかげで助かったぜ。」

そう言っつてぶつと水を吐き出したマタドールの口から、一緒に入れてしまったらしい小さな魚も飛び出してきた。

「そうね、よかったわ。下が水だったなんて…」

みさえがほつとしたように言う。

ところが、一人、助かってない者がいた。

「水怖い水怖い水怖い！」

「うお！ドラメットのこと忘れてた！こいつ水嫌いなんだよ。」

「そうなの？」

それにしてもこの怖がりようは、しんのすけたちの目から見ても尋常ではなかった。この何の変哲もない水に、ネコ型ロボットたちの中でも最も落ち着いていると言えるドラメットを取り乱させる、どんな要素があるというのだろうか。

水の中でわたわたしているドラメットを助けようと、マタドーラとドラニコフが近寄りかけたが、それより早く、ドラメットの身体が下からぐつつと持ち上げられた。

「んもー、ドラメットったら本当に水が怖いんだね！」

「ド、ドラリーニョ…助かったであーる……」

ドラリーニョは無邪気な表情で、息もたえだえのドラメットを頭に乗せていた。

するとその時、

「おーい、お前らー！」

「大丈夫ですか？」

振り返ると、岸边に王ドラとキッドがいて、みんなを手招きしていた。

「やれやれ、何とかまた集まれてよかったぜ。」

マタドローがため息をつきながら言った。

「まったくだ。でもよ、ここって…」

遊園地じゃねえかあ！」

キッドの言う通り、彼らが今いるのは広大な遊園地の中だった。あの塔の中に、こんな所があったのかと驚いてしまうような広さだ。

みんなが落ちたのは、園内にある大きな池の中。キッドと王ドラもここに落ち、這い出て自分たちのいる場所にびっくりしているところへ、しんのすけたちが落ちてきたというわけであった。

「でも何でドア開けたら、床に穴開いたんだろ？」

「多分そういう仕掛けだったんだよ。罠なんだ。僕たちをここへ、おびき寄せるための。」

首をかしげているしんのすけに、トオルが説明している。

「恐らくトオルくんの言う通りでしょうね…敵は我々をハメて、ここへ連れてきたのです。でも、何のために？」

王ドラの顔もまた、疑問符でいっぱいという感じになっている。他

のメンバーは考え込み、黙り込んでしまった。こんな所へ連れてきて、一体何を考えているのだ？かえって不気味に感じられてくる。

「あー、分かった！」

「！ドラリーニヨ？何は分かったであーるか？」

ドラリーニヨは常に変わらぬニコニコ顔で、みんなに自分の考えを述べた。

「あのね、あんまりマタドーラが落ち込んでるから、敵の人が心配になっちゃったんだ。それできつと、ここで遊んで元気出せるように……」

「絶対違う。」

ドラリーニヨの究極に楽観的な考察に、ドラえもんズのみならず、野原一家とトオルとシロまでもが断固否定の意志を表明した。

「そんなお気楽に考えないで下さい、ドラリーニヨ。」

「そうだぞ。敵は十中八九、俺たちを破壊するつもりだ。そんな親切心を見せてくれるわけないだろ。きつとここにも何か、危険な罠が……」

『よく分かったね。』

突然空から降ってきた声に、一同は仰天して振り仰いだ。

ちょうど真上、地上3メートルぐらいの高さに、マイクみたいなのがふわふわ浮いていた。

「何だありゃ、マイクか!？」

マタドーラの声に答えるかのように、再びそのマイクみたいなものの中から声が響いてきた。遊園地中に響き渡るような、大きく増幅された声だった。

『ここには吸血鬼四天王と、その仲間の人たちがいっぱいいるよ。』

それに遊具の一つ一つには、恐ろしい仕掛けが施してある………命が惜しかったら、乗らないことだね。でもまあ、乗らなくて僕たちが始末しちゃうけど。』

「んだとお、てめえ!」

いきり立ったキッドが怒鳴った。もし空気砲があれば、ためらわず撃っていただろう。マイクからの声には、明らかに軽蔑の感情が含まれていた。

一方王ドラは、全然別のことを考えていた。この声、本物の声じゃないな。妙に電子チックだ。とすると、やはり野原さんたちやトオルくんの、よく知っている人物なんだろうか………。

『じゃ、そろそろお話は終わりにしよう。せいぜい頑張つてね。』

最後にバカにするような笑い声を残し、マイクは空を飛んであっという間に消えてしまった。

「畜生! バカにしゃがって!」

「まっただけ!」

怒りっぽいキッドとマタドーラが、顔を真っ赤にしている。ドラニコフも珍しく腹を立てたのか、さっきからマフラーの下でうなり声を上げている。一方、王ドラとドラメットは冷静だった。

「これは遊んでいる場合などではありませんね。宣戦布告を受けた以上は…」

「命がけで闘うしかないであーるな。」

「そうだそうだ！闘おうぜ！」

「目にももの見せてやる！！」

「ワウー！！」

「わ、私たちも協力するわ！」

「おう！できる限りでな！！」

「オラもおケツを貸すゾ！」

「それを言うなら『手を貸す』！」

「お？いつからそーなつたの？」

全員が来たるべき闘いに、それぞれの闘志を激しく燃やし始めていた。その様子を、くすくす笑いながら眺めていたトオルだったが……。

ふと、おかしなことに気づいた。

「あれ？」

ドラリーニヨだけが、みんなの輪に加わらず、ぼーっと遊園地の方を眺めているのだ。

「ドラリーニヨさん？どうしたしたんですか。」

近寄り話しかけると、ドラリーニヨはゆっくりとトオルの方へ顔を向けた。あ、この人瞳孔開いてるとトオルが思った瞬間…。

「いやあああああああああ！」

「わあああああ！？」

ドラリーニヨの爆発するような絶叫に、トオルもつられて叫んだ。
何？何があったの！？

「ドラリーニヨ？」

ドラメットたちも、怪訝そうにこちらを見る。するとトオルが固ま
っている周りで、ドラリーニヨがぐるぐる走り回り始めた。

そのスピードときたら………チーターもびっくりして降参するだろ
うというほどのものだったのである。トオルは自分の周りを回って
いる、黄緑色の帯しか視認できなかった。

「おいっ、ドラリーニヨ、どうしたんだ！」

キッドが叫ぶが、ドラリーニヨが余りにも速過ぎて近寄れない。そ
して走り続けるドラリーニヨは、ずっつと同じことを叫び続けてい
た。

「やだやだやだやだやだやだやだ…」

「？やだ？何が？」

みんなの言葉が聞こえているのかいないのか、ドラリーニヨはさら
に予想外の行動に出た。

ガシッ！

「へ？」

トオルはきよとんとなった。いきなり身体をつかまれ、持ち上げら
れたのだ。

ドラリーニヨだった。

「え…あ、え、えーっ！！？」

もがく暇すらない。トオルを頭上に持ち上げたドラリーニヨは、今度はぐるぐると円状ではなく、お尻に火でもついたのかと思えるような勢いで、一直線に爆走を開始した。

「うわあ！」

「どうしたであるか、ドラリーニヨ！！」

爆走の勢いで生まれた風にあおられ、ひっくり返りそうになったドラメットたちが叫ぶ。それへドラリーニヨもまた、叫び返して答えた。

「遊園地に来たのに遊ばないなんて、僕やだーっ！！！」

「はああ！？」

それつきりだった。

ドラリーニヨの姿はあつという間に、ジェットコースターのある辺りへと、消えてしまったのである…。

「…よっぽど遊びたかったんだな。」

「ああ。」

ドラリーニヨが水面を走った時に（ドラえもんズーの運動神経を誇る彼には、そんな芸当も可能なのだ）巻き上げられた水しぶきを浴び、びしょびしょになったキッドとマタドーラが言った。

「風間くん…連れてかれちゃった……」

しんのすけもまた、ぽつりと呟いた。

ドラリーニヨの思わぬ暴走に、闘いのことなど、全員の頭の中から吹っ飛んでしまっていたのだった……。

12・落ちた先には（後書き）

暴走したドラリーニヨに、連れて行かれちゃった風間くん。心配するみんなをよそに、次回はいいよ二人目の四天王が出現！それは誰か、そして今度パワーアップするのは誰か？風間くんたちの運命やいかに！？お楽しみに！！……あと、感想お願いします。最近全然来ないので、下手くそで読まれてないのかと悲しいです。どんな内容でもいいので。

13・第二四天王（前書き）

風間くんとドラリーニヨと離れ離れになっちゃったキッドたちの前に、第二四天王が姿を現す！そして嫌われ者のあのキャラも…。最近感想が来ません。寂しいです。読んだら感想、何でもいいのでお願いします！！

13・第二四天王

「大丈夫でしょうか……」

「まあ平気だろ。あいつドラえもんズ一番の俊足だし、逃げ足は速いだろうからさ。」

まだ心配そうな王ドラを、キッドがなだめている。エル・マタドールは油断なく、辺りを見回しているところだった。

「敵……来ないな。」

「ガウー。」

「きつとどこかに隠れ潜んでいるであろう。そして我々が入ってきたら、一拳に飛びかかってくるつもりであろうよ。」

ドラニコフとドラメットが、マタドールの呟きに答える。一方みさえは、嫌な感じをぬぐい切れないようだった。

「なんて不気味なの……静か過ぎるわ。」

「……でもそれでいて、何もいないってわけじゃないんだよな。」

ひろしが続けて言う。しんのすけはトオルの行方が気になるらしく、さつきからドラリーニョの走っていった方向を振り返ってばかりだ。「確かにオレも、この感じはなんかやだな。どうせ闘うんならさつさと闘いたいぜ。」

「オレも……あー、でもなんか、腹減ってきた。」

「あ……オレもだ。ちきしょー、ドラ焼き食いてーぜ。」

「ダメですよ！ドラ焼きなんか呑気に食べてる場合じゃないでしょうー！」

王ドラが厳しい口調で、キッドとマタドールをたしなめる。

「ドラ焼き？ドラ焼き食べるの？」

しんのすけの興味が、少しばかりこつちへ傾いてきたようであった。「ネコ型ロボットだから、魚とかじゃないの？ていうか、ロボットなのに食べたりするのね。」

みさえも不思議な様子だ。

「そりゃそうさ。オレたちが笑ったり泣いたり、眠ったりできるのと一緒にだよ。なんでドラ焼きが好きかは知らねえけど、ネコ型ロボット全般的にそうだってんだからしょうがねーだろ。」

「ふーん……」

「それより、早く敵のいる所を探そうぜ。どーもこの雰囲気は気に入らね……ん？」

ふと、キッドが何かに気づいて立ち止まった。マタドローも同じであつた。

そして二人で顔を見合わせると、申し合わせたように走り出した。

「ここが怪しい気がするぜ！」

二人が向かう先には……………。

『レストラン』の看板がついた店があつた。

「こ、こら！二人ともご飯食べたいだけでしょうが……！」

王ドラが叫び、取り残された一同も後に続く。キッドたちに遅れること一拍おいて、みんなは店の中に足を踏み入れた。

そして、びっくりした。

「よく、分かったね。」

中には本当に、誰かがいたのである。

しかもしんのすけたちを驚かしたのは、それだけではなかった。そこで待っていたのが、よく知っている人物だったからだ。そ

「ボーちゃん！」

鼻水を垂らし、無表情の顔でこちらを見つめている少年に、しんの

すけが叫んだ。返事はなかったが、ボーちゃんの視線が少しだけ動き、しんのすけを真正面から見た。しかしこのことは、キッドとマタドールにとって予想外のことだったらしい。

「本当にいたよ……」

がつくりしている二人に、

「よかったですね、二人とも。」

冷たく言った王ドラであった……。

「わーい！ボート楽しいねえ！！」

「うん……」

トオルは曖昧あいまいにうなずいた。

もちろん一緒にボートに乗っているのは、ドラリーニヨだ。

彼はさつきから、幼い子供のように大はしゃぎで、手を伸ばして水面に触れたりしている。落ちやしないかと内心ひやひやものだったが、さつき水の上を走ったりしていたし、まあ大丈夫かも知れない。それより心配なのは、さつきマイクがしゃべった言葉の内容だった。ここの遊具には、何か恐ろしい仕掛けが施されている。

今のところは、このボートに異常はない。時々大きく揺れるが、それはドラリーニヨが狭い船内を、あっちこっち動き回るからだろう。ドラリーニヨの楽しそうな様子を眺めていると、その姿にしんのすけの面影が突然重なり、トオルは驚いた。

でも考えてみれば、二人は結構似ているかも知れない。両方色んな意味で幼稚だし、いつでも元気で呑気で樂觀的だし、次に何をするのか、まるで予想がつかないという点でも同じだ。

（王ドラさんたちも大変なんだろうなあ……特にドラメットさんは、お父さんみたいに世話焼いてるし。）

そう考えると、トオルは思わずくすつと笑った。僕たちがしんのすけに振り回されているようなもんじゃないか……

「あ！見て見てトオル、魚がいるよ！！」

ドラリーニヨがまた歓声を上げた。敵や闘いのことなど、完全に忘れ切っている口調だった。

白鳥型のボートがまた、がくんと大きく揺れた。

「お前もしんのすけたちの友達なのか…それにしても変な名前だな、ボーって。まあびつたりだけだよ。」

キッドがボーちゃんの姿を上から下まで眺めながら、言った。マタドーラが続ける。

「もしかして、お前が四天王なのか？」

今度は反応があった。ボーちゃんが相変わらず無言のまま、ゆっくりとうなずいてみせたのだ。

ドラえもんズの五人は、すぐに野原一家をかばうような位置に移動した。

「また子供か……まあ仕方がねえ。さっきのやつみたいに、お前にも手下か何かがいるのか？」

ボーちゃんが何かするより早く、店の奥から人影が二つ、ゆらりと現れた。両方大人の大きさだ。

「その通り」

人影の片方が、若い男の声で言った。キッドたちが思わず身構える。

「僕たちは、ボー様の忠実な部下…」

「ね、ミッチー」

「そうよ、よしりん」

「な、なにに！？よしりん&ミッチー？」

ひろしが驚愕の声を上げた。まさかこんな所で、こいつらに出くわすとは…………。

二人は新婚カップル…………それもいわゆるバカップルで、いつもその過剰なラブラブぶりに、迷惑がられている。特に野原一家はその近所なので、たまにずうずうしく上がり込んでくることすらあるこの夫婦を、相当うざったく思っていた。

キッドも熱烈に抱き合っている二人を見て、同じ印象を抱いたらしい。

「な、なんだこいつら、うっとおしい…………」

呆れ返った声で、呟く。

「うっとおしいとは何よ！私たちは百年に一度、いえ、千年に一度現れるか現れないかのベストカップルよっ！！」

「そうさ！そして、僕たちのラブラブパワーの前に、野原さん、あなたたちは敗れるんですよ！！」

「私たちの愛の力の前に！」

「適うものはないっ！」

「ね、よしりん」

「ねーっ、ミッチー」

「……………」

しらーっとした空気が、その場に流れた。

「なんだこいつら、バカか。」

「ええ、バカなのよ。」

マタドーラの言葉に、呆れ顔でうなずくみさえ。

こういうラブラブシーンに弱い王ドラは、困った顔で目をそらしている。

「……………」

さっきからずっと黙っていたボーちゃんが、ふところをこそこそやり出したのはその時であった。

「！何か来るぞーるぞー！」

一番先に気づいたドラメットが叫ぶと同時に、ボーちゃんが手榴弾を取り出し、ピンを抜いた。

「何い、手榴弾！？そんなのありかよ！」

マタドーラが慌ててヒラリマントを構えようとしたが、もう遅かった。ボーちゃんの手から、手榴弾が投げつけられる。

ドカアアン！

「…へ？」

キッドたちは、一様にぽかんとした。

なぜなら手榴弾を投げつけられたのが、自分たちではなかったから

だ。

「ギャーツ！」

爆破されたよしりん&ミッチーは、5メートルぐらい吹っ飛んで壁に穴を開け、瓦礫がれきに埋もれたまま気絶してしまった。

「……………お前、何で味方を？手下じゃなかったのか？」

マタドラーの問いに、ボーちゃんは二人が倒れている方を見ようとせず、いつものゆっくりした口調で言った。

「この二人、僕の、部下じゃない。僕には、部下とかは、いない。勝手についてきた、だけ。」

やっぱりそうだったのか……………ひろしとみさえは納得した。

「うつとおしいから、ちよつと、黙ってもらった。」

「いや、黙ってもらったって……………これはやり過ぎじゃないですか？」

「いいのよ。」

「いいの！？」

野原一家まで冷めた調子なので、ドラえもんズはびっくりした。よっぽど嫌われているようだ。…確かにうざかったけど。

「ま、まあとにかく、お前も四天王の一人なんだな？」

「ボー…僕は、第二四天王。今から、君たちロボットを、破壊してあげる。」

ボーちゃんはそう言うと、今までにない鋭い目でこちらを見た。

急に彼が別人になったような気がして、しんのすけたちは一歩後ずさりした。

「第二つてことは…多分さっきのあいよりは強いんだよな？」

「そうですね…で、次は誰が行きます？」

「我が輩が行くである。」

真っ先に名乗りを上げたドラメットを、みんな驚いて振り返った。こういう鬨いに、自分から進んで参加したがるような性格ではないのだ。

「ドラメット……」

「お願いである。我が輩一人にやらせてほしいである。」

ドラメットの声には、懇願するような口調すら混じっていた。

「……………分かった。」

キッドが気押けおされた形になり、一歩退いた。王ドラが一言、ドラメットの耳元に囁く。

「ドラメットのことですから、大丈夫とは思いますが……………くれぐれも、無茶をしないで下さいね。ドラリーニヨも悲しみます。」

その言葉に、ドラメットは『大丈夫』とでも言うようににっこりと笑みを返すと、ゆっくりとボーちゃんの前に進み出た。

「さあ、我が輩がお主の相手になるであるよ!」

「ねえねえトオル、次はジェットコースターに乗ろうよ！」
「ええーっ！僕そっこの、あまり好きじゃないんです。」

「んもー、しょーがないなー…それにトオル、敬語なんか使わなくていいよ。僕のこと、ドラーニヨって呼び捨てにしているからさー」

「そ、そう…じゃ、ドラーニヨ。ジェットコースターより、あの観覧車に乗ってみたい？」

「えー？ゆつくり過ぎてつまんないよぉ。」

にぎやかにおしゃべりしながら歩いてくる二人を、ジェットコースターの高い骨組みの上に座ってじっと見つめている少女がいた。黒い服で身体を覆ったその少女は、顔に寂しげな笑みを浮かべ、やがてゆらりと立ち上がった。

そして一瞬のうちに、少女の姿は消え失せていた。

13・第二四天王（後書き）

ドラメット対ボーちゃん…この闘いの行方は？そして呑気に遊ぶドラリーニヨたちを見守る少女の正体は……。次回はドラメットが注目（？）のパワーアップ！絶対読んでね

14・ドラマッドvsボーちゃん(前書き)

こちらも銀しんに続いて、久しぶりの更新です。ドラマッドの大活躍が見れるかも！？

14・ドラメッドvsボーちゃん

トオルはもう疲れ切っていた。

「ねえねえ、次は何に乗ろっか！」

ドラリーニヨは、どこからその活力が湧いてくるのやら、元気いっぱいであった。既にジェットコースター三つを含め、十近くの遊具を乗り回して いるのにもかかわらずだ。

トオルが唯一ゆったりできたのは観覧車だけだったが、そのすぐ後にジェットコースターに引っ張っていかれたので、残念ながら意味なしになってしまった。

「ドラリーニヨ…もうジェットコースターとかコーヒークップとか、そういうきついのはやめにしない？」

「えー、何でえ？」

無邪気に聞き返すドラリーニヨ。その視線はもう面白そうなアトラクションを求めてさまよっている。

「だって、もう僕…」

「あっ！」

突然ドラリーニヨが大声を上げたので、トオルは飛び上がった。

「ど、どうしたの？」

「大変だ…僕、忘れてた！」

「…何を。」

トオルはしばらく一緒にいるうちに、ドラリーニヨがひどく忘れんぼうだということをさんざん思い知らされていたので、用心深く訪ねた。

ドラリーニヨは目を大きく見開いてトオルを見つめ、叫んだ。

「ミニドラを忘れてた！！！」

「はっ？何？」

ドラリーニヨが答えるより早く、トオルの疑問の答えがドラリーニヨのシャツの中から現れた。

トオルは呆氣に取られた。手の平に乗るくらいのサイズの、小さなネコ型ロボットがぞろぞろ出てきたのだ。一、二、三…十一体。全員ドラリーニヨと同じ、黄緑色の身体をしている。

ミニサイズのネコ型ロボットたちは、ドラリーニヨに向けて怒った様子で何か言い始めた。トオルにはドラドラ言っているようにしか聞こえなかったが、ドラリーニヨにはちゃんと分かるらしい。「ああ、みんなごめんごめん。ほんとにごめんね。」

決まり悪そうに頭をかき、ドラリーニヨはトオルの方を向いた。ミニドラもまた、一斉にトオルを見上げた。

トオルは自分がぼかんと口を開けているのに気づき、慌てて閉じた。

「ああ、トオル。」

ドラリーニヨは足元に集まっているミニドラたちを、ざっと指さすような（指はないのだが）仕草をした。

「僕のミニドラサッカーチームだよ…ほら、みんなトオルに挨拶！」

「ドラメッド！何で反撃しないんだ！？」

キッドが空飛ぶじゅうたんの上で、いらただしげに叫んだ。

ドラメッドは何も答えず、かわりにじゅうたんを急降下させた。ちようどさつきじゅうたんが舞っていた所を、ボーちゃんの放った衝撃波が通り過ぎた。

「四天王は皆、特別な力を持っていると聞きましたが……あの子の攻撃は、別に他の吸血鬼たちと変わりませんね。」

王ドラが、いつでも攻撃できるようぬんちゃくをかまえながら首をかしげた。

「まだ使っていないだけで、隠してるのかも知れないだろ。油断する

な、王ドラ。」

「う、うるさいですね、エル・マタドーラ！私は油断なんかしてな………」

ドガン！

「うわ！」

目と鼻の先に衝撃波を発射され、王ドラはもう少しでじゅうたんから転げ落ちそうになった。

「ほら見る、言っただろうが。」

マタドーラはにやっとしたが、悪意のある笑い方ではなかった。こちらは愛用のヒリリマントをかまえている。

ドラニコフはというと、じゅうたんの真ん中で縮こまっている野原一家のそばでじっとしていた。彼が動くのは、しんのすけが好奇心からじゅうたんの端へ行こうとするのを、止める時だけだった。

ドラメッドがなぜ反撃しようとしなのか、みんな不思議で仕方がなかった。さつきからじゅうたんに乗って、ボーちゃんの攻撃から逃げ回ってばかりだ。その表情にはなぜか、重苦しいものが浮かんでいた。

「ドラメッド、もうオレは逃げ回るのはごめんだ！やらせてもらっぞー！」

たまりかねたキッドが、取り出した光線銃をこちらめがけて飛んでくるボーちゃんに向けた。

ドラメッドがはっと振り返った。

「キ、キッド、いかんであーる！」

だが、キッドはもう叫んでいた。

「行けえ！」

轟音と共に、ビームが発射された。

もとよりキッドは、ボーちゃんを殺すつもりなどなかった。手足を狙って、動けなくするだけのつもりだったのだ。

だからビームが当たった瞬間にボーちゃんの身体がばらばらになってしまったのを見た時には、愕然となった。

「バカな……」

マタドーラや王ドラも、呆然としてそれを見つめた。

そこへドラメッドが、今まで出したこともないような大声をかけた。

「みんな、ぼーっとしてはいかんである！それはニセモノである！！」

「！？」

みんながはつと身をこわばらせた、まさにその時、上から衝撃波が次々と降ってきた。

「どういうことだ！」

マタドローラが、ヒリリマントで衝撃波をかわしながら叫んだ。

答えのかわりに、どこからともなく数人の人影がするりと現れた。

ボーちゃんだった。

全くそっくり同じ姿をしたボーちゃんが五人、じゅうたんを囲むようにして現れたのだ。

王ドラは反射的に、野原一家を振り返った。彼らもキッドたちと同じくらい、驚き、おののいた顔をしていた。

「一体……！？」

みさえが息を呑み、後ずさる。ドラニコフでさえ、不安そうなの

り声を漏らしてぶるぶるっと身体を震わせた。

ただ一人、ドラメッドだけが冷静な表情で、自分たちを取り囲んでいる五人の『ボーちゃん』を見つめていた。

「……………仕方ない。」

ため息をつき、ドラメッドはふところから、小さなびんを取り出した。

そして中の液体を、ごくりと飲み干した。

「あーあ、もうこのアトラクション、ほとんど回っちゃったよ！」

ドラリーニョがちょっと不満そうな口調でそう言った。ミニドラがドラドラ言いながら、その後を歩いていた。色んな乗り物に乗せてもらったミニドラたちは、すっかり機嫌を直し、興奮気味に何か話している。一方トオルはと言えば、服や髪に潜り込もうとするミニドラたちをひっぺがすのに必死で、とても何かしゃべるところではなかった。

「ねえトオル、あとまだ乗ってないのってある？」

ドラリーニョがのんびりとトオルを振り返った。

「そ、そうだねえ……」

トオルはようやくミニドラを髪の毛から引き離して、息を切らしながら言った。

「そんなこと、急に言われたって……あ、あれはまだじゃない？」

トオルの指さす方向を、ドラリーニヨとミニドラは無邪気な表情で振り返った。しかし次の瞬間、顔がさあつと青くなった。

そこにあったのは、お化け屋敷だった。

形勢は一挙に逆転していた。

飛んできた衝撃波が跳ね返され、五人のボーちゃんのうちの一人がよろめく。マタドーラが歓声を上げた。

「すげえぞ、ドラマッド三世……」

いや、四世！」

例の薬を飲んでパワーアップしたドラマッド三世　　もといドラマッド四世は、さっきまでとは一転、素晴らしい応戦ぶりを見せていた。四世はなぜかボーちゃんそっくりの姿をしていたが、もう誰

もそんなことは気にしなかった。

イライラしてきたのか、それとも自分の不利を感じたのか、五人のボーちゃんが一齐に衝撃波を放ってきた。しかし、それが大きな間違이었다。

ドラメッド四世はすっと手を伸ばし、両手でぐるりと円を描くような仕草をした。

その途端、びつくりするようなことが起きた。ドラメッドが手を触れてもいないのに、衝撃波がくると向きを変え、五人のボーちゃんそれぞれめがけて襲いかかったのだ。

あまりの速さに、五人のボーちゃんは恐怖の表情を浮かべる間もなく衝撃波を身に受けた。さっきと同じように、どのボーちゃんの身体もばらばらになり、溶けて地面へと落ちていった。

ただ一人を除いては。

ドラマツドの正面にいたボーちゃんは、ばらばらにならず、溶けもしなかった。空中で、苦しげに身をかがめている。今にもバランスを失って落下しそうだ。

それを見たドラマツド四世が、じゅうたんを急発進させた。あまりの速さに、シロのフワフワの毛が逆立った。じゅうたんが止まった時には、四世の手が一人残ったボーちゃんを捕まえていた。

「こいつが本物なのか……………」

キッドがボーちゃんの顔をのぞき込んだ。ボーちゃんはあきらめたような表情で顔をそらし、目を閉じた。

しんのすけがドラニコフの制止を振り切り、じゅうたんの端から下をのぞき込んだ。

地面には透明なねばねばしたものが、いっぱいにぶちまけられている。じゅうたんから飛び降りた王ドラが、その物体に慎重に手を伸ばそうとした。

「おおっ！」

しんのすけが目をまん丸くした。

「それ、ボーちゃんの鼻水だゾ。」

「鼻水!？」

王ドラはぎょつとして手を引っ込めた。

「なるほど、自分の鼻水で分身を作る……………それがこいつの能力か。」

マタドーラがボーちゃんを見る。

ドラメッドはしばらくの間、ボーちゃんを見つめていた。そして、パワーアップしてから初めて、口をきいた。

「何でお主は、操られたふりをしているのであーるか？」

14・ドrameツドvsボーちゃん（後書き）

今回は、ドrameツドが言った言葉の意味が明らかに………そしてドラリーニョと風間くんが、お化け屋敷で大変なことに巻き込まれる！？

どうぞお楽しみに！

15・迫る危機（前書き）

ドラマメッドの言葉の意味が明らかに……そして、あの彼女（誰だ）
がしんのすけたちの前に姿を現す！また久しぶりの更新になってし
まいました。すみません……………（- -;）

15・迫る危機

その場にいる誰もが、ドラメツドの言葉の意味を理解できずにぽかんとなった。ただ一人、ボーちゃんだけが、青白い顔をさらに青くした。

「操られた……ふりだつて？」

キツドが人間化したドラメツドの背中に問いかけたが、答えはなかった。代わりにドラメツドはボーちゃんから手を離し、立ち上がってじゅうたんの上を行ったり来たりし始めた。

「始めにお主を見た時から、他の子供たちと違う感じはしていたであーる。」

ドラメツドは静かに話し始めた。

「どうしてか、その時は分からなかったのであるが、戦っているうちに理由がはつきりしてきたのであーる……お主の顔は、あの時のドラパンのものと同じだと。」

「ドラパン？」

しんのすけ、ひろし、みさえの三人は首をかしげたが、ドラえもんズのメンバーたちははっとなった。

「ドラパン……なるほど、そうか……！」

呟いたキツドを、しんのすけが不満げににらんだ。

「何かなるほど、なの？ちゃんとやってくれないと分かんないゾ。」
「ああ、それがな……」

キッドたちはドラパンと出会った時のことを、野原一家に話し聞かせた。ドラえもんズの面々をキンキンステッキで銅像に変えてしまい、親友テレカの力を奪おうとしていたフランスの大怪盗・ドラパンだったが、実は彼は人質をとられて無理やり働かされていたのだ。ドラリーニョとドラメツドの活躍によりドラパンはドラえもんズの味方につき、力を合わせて敵を倒したのだった。

「じゃあ何だ、ドラメツド。この子以外の子　さつき襲つてきた女の子とかは、みんな操られてるっていうのか？」

「それはそうでしょう。それでもなければ友達の目の前で、平然と私たちを殺そうとするはずありませんよ。」

マタドローラの問いに、王ドラが冷静に答える。「そうね…特にあいちゃんなんかはしんのすけにぞっこんだものね。」

「ち、違うゾ！オラの相手はななこねいさんだけだゾ！」

しんのすけが、珍しくかなり慌てた様子で叫んだ。みさえの『ぞっこん』という言葉を『結婚』と聞き間違えたらしい。

「でも、この子は違うと言うのですね？」

王ドラはそう問うと、顔をうつむけているボーちゃんをじっと見つめた。

「我が輩はそう信じているであーる。」

ドラメツドの声はあくまで静かだった。そこへマタドローラの声が割り込んだ。

「でもよ、はつきりそうだっていう証拠はないじゃねーか。」

「この子は我が輩たちを本気で破壊できるような攻撃をしてこなかったであーる。」

その時初めて、ドラメツドの口元に笑みが浮かんだ。

「しかし、それで不十分と言うのなら……我が輩に、ちょっとした考えがあるである。」

「考え？」

他の面々がそれ以上何も言えないうちに、ドラメッドはふところからまた液体入りの小さなびんを取り出した。同じような形だが、色が違う。そしてそれを、一息に飲み干した。

ボシュツ！

「あ……………」

王ドラたちも野原一家もボーちゃんも、みんな狐につままれたような顔になった。

ドラメッドが、元のネコ型ロボットの姿に戻っていた。

「これで我が輩はもうパワーアップできないである。ただのか弱きネコ型ロボットであるよ。今お主が衝撃波を放てば、簡単に倒せるである。」

ドラメッドはそう言つて、ボーちゃんの前に無防備な身体を察した。キッドはドラメッドが弱いとはとも言えないと思つたが、何も言わなかった。ボーちゃんがどんな反応を示すかどうかの方が気になったからだ。ボーちゃんの顔は今や真っ白になり、自分の前に立つドラメッドをじつと見つめて、一体何をすればいいのかわからないようだった。とめどなく震えながら、小さな手握ったり開いたりしている。そして。

「こ、殺され、ちゃう。」

ドラえもんズのメンバーは顔を見合わせた。王ドラが近づき、ボーちゃんの肩をつかんだ。

「やはり、誰か大切な人を人質にとられているのですか？殺されるとはどういうことです？誰のことです？」

「ボーちゃん、オラにも教えてほしいゾ。ところで『ひとちち』って何？」

しんのすけもやってきた。ボーちゃんの顔を、心配そうに覗き込んでいる。この無表情な友達がこんなに心を痛めているところを、しんのすけは見たことがなかった。

ボーちゃんはドラメツドを見、王ドラたちを見、しんのすけたちを見た。唇が震えていた。

しかしやがて、その口がゆっくりと開いた。

グオツ…！

「……………ん？何だあ？」

妙な音が頭上で響いたのを耳にして、マタドローは何気なく顔を上げた。

その瞬間、異常な熱さを持った風がマタドローの前進をなでるようにして吹きすぎた。

「なっ！？」

ヒラリマントを飛ばされそうになり、慌てて持ち直しているうちに、風は通り過ぎていつてしまった。 ボーちゃんがいるところへと、まっすぐに。

突如、ボーちゃんの身体が燃え上がった。

みさえが悲鳴を上げた。しんのすけも叫び声を発した。普段滅多に出すことのない、恐怖の叫びだった。ボーちゃんに飛びつこうとしたが、王ドラに押しのけられた。王ドラも一時は凍りついたものの、さすがにすぐ我に返り、何か役立つ道具はないかと慌てて四次元袖を探った。

その途端、炎はあっという間に消えた。

煙も立てず、まるで

最初から火など上がらなかったかのように、一瞬で消えてしまったのだ。

「……………てめえ。」

ちょうどその時、キッドは誰かが上空からこちらを見つめていることに気づき、息を呑んだ。

「誰だ!」

威勢よく上へ怒鳴ったマタドーラが、しかしすぐに驚いたような表情になって後ずさる。

しんのすけやボーちゃんと同じ年ぐらいの女の子が、地上5メートルぐらいの空中に浮かんで、こちらをじっと見下ろしていた。全身真っ黒な服装で、服の黒と明るい茶色の髪の毛が見事なまでに反発し合っている。明るい笑顔が似合いそうな、可愛い顔立ちだとマタドーラは思った。しかし冷たい無表情さが、少女の可愛らしさをほとんど奪い去っていた。

みさえとひろしは、少女の姿を認めると目を丸くした。

「ネネちゃん…」

みさえの言葉に、キッドは振り返った。

「この子もお前らの知り合いなのか？」

「ああ、しんのすけの友達だ。」

ひろしが答えた。しかし、当のしんのすけはネネの出現に気づくどころではなかった。王ドラと一緒にボーちゃんの傍らに座り込み、真つ青な顔をしていた。炎が燃えていたのは一瞬のことだったとはいえ、ボーちゃんに何らかの悪い影響を及ぼしたらしく、ボーちゃんは白い顔で気を失っていた。王ドラは医者志望としての本領を発揮し、自分専用の『お医者さんカバン』で既に治療にかかっていた。ネネはちらつと冷やかな目でそちらを見やつただけで、すぐにキッドたちの方へ視線を戻した。

「お前か……あの鼻水を攻撃したのは。」

「ええ、そうよ。」

キッドの問いに、ネネは顔と同じくらい無表情な声で答えた。その声を耳にして、しんのすけはようやく顔を上げ、ネネの存在に気がついた。

しんのすけの顔に、純粹な驚きが浮かんだ。

「ネネ、ちゃん……？」

「あらこんにちは、しんのすけくん。」

しんのすけが殴られたように身を引いた。

「ネネちゃん、いつもオラのこと『しんちゃん』って呼んでたのに。」

「そうだった？まあどうでもいいわ、そんなこと。」

本当にどうでもよさそうな口調だった。キッドは怒鳴りたくなる衝動を必死でこらえた。この子はドラメッドが言ったように、操られているんだ。誰が操っているんだか知らないが、とにかく操られているからあんなことが言えるんだ。それだけのことだ。

しかし、黙ってられない者もいた。

「ガウウー！ガウー！！」

みんなびっくりして、うなり声の聞こえてきた方を向いた。普段何も言わないドラニコフが、ネネに向かって怒りをむき出しにして、マフラーの下から吠えていた。

ネネは一顧だにせず、一層冷えた目つきでドラニコフをにらんだ。

「あら、何かしら？あんなたちが何か知らないけど、あんなみたいな赤の他人のタヌキにくちばし突っ込まれるのってすごい迷惑なのよね。分かってるの？」

ここに至って、キッドももう我慢できなくなった。

「ふざけんな！俺たちは永遠に輝く友情を約束した、ザ・ドラえもんズなんだよ！なめてんじゃねえ！」

キッドは相手が言い返す間を与えないよう、ぶちまけるように一気に言っただけだ。

「それにタヌキじゃなくてネコ型ロボットだ！」

マタドーラはそう付け加えるのを忘れなかった。

しかし、ネネはさらに冷ややかな笑みを浮かべただけだった。魂が

ら暖かさが全て抜き取られたような、ぞっとする笑いだった。

「ずいぶんと大口叩くのね……そんなバカなことを言ってる間にも、あんたの友達の一人が死にかかっているっていうのに。」

「な、何ですって!？」

王ドラがさすがにぎょっとして顔を上げた。ネネの笑みがさらに冷たくなった。

「そうよ。今頃あたしが送り込んだ四天王の一人にいたぶられて、さぞ恐ろしい思いをしてるでしょうね……」

風間くんも、一緒に。」

確かに、ドラリーニヨは相当恐ろしい思いをしていた。

一方で風間トオルは、恐ろしいどころかあきれ果てていた。

「トオルううう！」

「何？」

トオルはいい加減アホらしい、という気持ちが見え見えの口調で言い返した。

「あそこに何かいる！あの石の後ろ！！」

「ああ、あの幽霊？ただ見てるだけで飛びかかってきやしないから、大丈夫だよ。」

それにしても、ドラリーニヨがお化け嫌いだということがトオルには意外だった。いや、そりゃあお化けが大好きなんていう人はなかなかないだろうが、純真素朴なドラリーニヨだけに、何でもここにこ笑ってやり過ごしていけるのかと思っていたからだ。

（…ま、一つぐらい弱いところがある方が、かわいげがあるしな。）

トオルはそう思っで、ちよつと笑った。ドラリーニヨのお化け嫌いは、少なくともトオルにとっては實際的に役に立つた。もうこれ以外に乗っちゃったからと渋々入ることを承諾したドラリーニヨとミニドラたちだったが、さっきのように何か見つけるために大騒ぎしてくれるので、トオルはそれをなだめるのに忙しく、怖がる暇が全くなかったのだ。しまいには、何だ、お化け屋敷なんか大して怖くないやと悟ってしまったトオルであった。

しかし、そのトオルも気づいていないことが一つあった。お
化け屋敷に入った時からずっと、一つの人影が音もなく後をつけて
きていたことに。

その人影は小さかった。トオルと対して変わらない。なぜか足音を
全く立てず、つかず離れずといった感じで、彼はトオルとドラリー
ニヨについて歩いていた。

ドラリーニヨが突然、ここに入って初めての喜びの叫びを上げた。
ミニドラも一緒に、興奮してわいわい騒いだ。前方に光が見えたの
だ……外への出口だ！

ドラリーニヨはミニドラをみんなポケットに集めると、走り出した。
トオルも何か言いながら、その後を追った。

ずっと後を追ってきた人影が、ようやく音を漏らした。くす
りと笑う声だった。

人影はすうつと手を伸ばすと、指をまるでピストルごっこをする時のように、親指と人差し指を伸ばしてあとは折り曲げた。

すると　人差し指の先に、小さな光の塊が現れ、音もなく、キユルキユルと高速に回転し始めた。

「…そこまでだよ、黄緑のタヌキくん。」

静かな声でそう漏らすと、人影は手をさっと動かした。ちょうど、銃を撃った時のように。

赤い光の弾丸が、ドラリーニョめがけて一直線に飛んだ。

ドラリーニョはちよつとよろけて壁にぶつかったが、気づいた様子はない。人影は、成功を確信して身震いした。

ドラリーニョとトオルが消えたのは、まさにその瞬間だった。

人影は一瞬、凍りついたように立ち尽くした。 しかしすぐに怒りの叫びを上げ、さっきまでドラリーニヨとタオルのいた所へ駆け寄った。そんなはずはない。何の気配も見せずに跡形もなく消えるなんて、そんな……。

しかし、そこには冷たく堅い床があるばかりだった。

二人は消えてしまっていた。

15・迫る危機（後書き）

ドラリーニョとトオルが消えたわけは、次回明らかになります！……ところで、最近この小説への感想が全く来ません。正直悲しいです（ノ―；）読み終わったらどんなに短くても結構ですので、感想をお寄せください。お願いしますm（――）mあとメッセージを下さったキッド大好きさん、どうもありがとうございました！！

16・ドラニコフの大活躍（前書き）

今回はドラニコフがパワーアップを果たします！どうぞお楽しみに
！！

16・ドラニコフの大活躍

ここは……どこだ？

トオルは呆然として、自分たちがいる所を見回していた。

僕たちはついさっきまで、お化け屋敷の中にいたはずじゃないか。それなのに……。

トオルとドラリーニヨは、一面の花畑の中に立っていたのだ。

「うわぁ、きれいだねえ。」

ドラリーニヨは嬉しそうに笑いながら、きょろきょろしている。どうやらさっきまでお化け屋敷にいたことを忘れているらしい。

（ええっと、僕たちは……お化け屋敷の出口を見つけて……それ、いきなり……）

トオルは頭をフル回転させて、自分たちが置かれている状況に至った説明を、何とかつけようとしていた。

その間に、ドラリーニヨは走り出してしまっていた。

「わーい、お花畑だあ！」

「あつ、ちよっ…………ちよつと待って、ドラリーニヨ！」

トオルは慌ててドラリーニヨを追いかけた。こんな得体の知れない所で、一人きりになんかなりたくないっ！

それにしても、なんて強烈な花の香りだろう。

不意に足がぐんとなり、トオルはよろめいた。

「…………え？」

身体に、力が入らない。花の香りが鼻から全身に染み渡っていくような気がした。それにつれて、視界に白い霧がかかり始めた。

「ドラ……リー……」

トオルは、白い闇の中へと沈んでいった。

急に後ろから呼ばれた気がして、ドラリーニヨは走るのをやめた。
何気なく振り返ってみて、目を見開いた。

「トオルッ!？」

トオルの身体が、ゆっくりと花の中にづもれていくところだった。

「トオル!トオル!!」

駆け寄って抱き起こすと、トオルのぐったりとした重みが腕にかか
ってきた。 なんと、ぐっすり眠っている。

「あれえ、どうして……………」

ドラリーニヨは首をかしげたが、大して深く考えずにトオルの身体
に腕を回すと、ひょいっと抱え上げた。

「んもー、仕方ないなあ、そんじゃ、行こー行こー!」

誰に言うともなしにそう叫ぶと、ドラリーニヨはトオルを抱えたま
ま、再び猛烈ダッシュを開始した。

うなりを上げて、火の玉が一直線に飛んできた。

「よける！」

キッドが叫ぶまでもなく、王ドラたちは素早く散って巨大な炎の玉を回避したが、火の玉が地面に激突した振動で空気がぶるぶる震え、火の粉がヒゲや服を焦がす匂いがした。

「くそ……………なんて奴だ……………」

マタドーラが齒噛みして、上空から自分たちに氷のようなまなざしを向けるネネを見上げた。

闘いは、明らかにネネの方が優勢だった。空から火の玉を自在に飛ばしたり、目を向けただけで火を点けたりするような奴が相手ではうまく闘いようがない。こちらの攻撃はことごとくかわされ、相殺された。

「ガル……………」

ドラニコフは、四次元マフラーから丸い容器に入れた唐辛子ジュースを出そうとして、ふと思いとどまった。狼化した自分の火炎放射も、相手に相殺されてしまうかも知れない。いや、きっとされてしまっただろう。

ドラニコフは、必死に闘い続ける仲間たちをじっと見つめた。それから、後ろで縮こまる野原一家に目をやった。ボーちゃんは地面に倒れたまま、まだ意識を取り戻していない。

それで、心が決まった。

ドラニコフは四次元マフラーから、透明な薬の入ったびんを一つ、取り出した。

王ドラは不意に、炎の熱の中にひんやりとした空気を感じた。

反射的にそちらへ首をねじった王ドラは、驚きの叫びをもらした。

「な、何なんですか、あなたは!？」

王ドラの声に振り向いたキッドたちも、一様にぼかんとした顔になった。ネネもそうだったのだろう。攻撃が止まってしまった。

そこにいたのは、分厚い冬服をまとった少女だった。何よりも驚くべきことに、ネネとそっくりの顔立ちと髪をしている。みんなの視線を受けても、まるで反応する様子がなかった。

呆然と見つめていたキッドは、少女が赤いロシア帽をかぶり、青いマフラーをしていることに気づいた。

「……………ドラニコフか?……………」

かすれた声でそう尋ねると、ロシア風の衣装に身を包んだ少女はかすかに口をほころばせ、こくんとうなずいてみせた。

ドラニコフが、あの薬を飲んだのだ。そして、パワーアップしたのだ。

「……………何なの、そいつは。」

上から声がした。ネネが目を細めて、変貌したドラニコフをにらんでいる。

それを見たキッドは、慌てて警告の叫びを発した。

「ドラニコフ、逃げろ！火が………！！」

ドラニコフは、逃げなかった。ほとんど動くことすらなかった。
ただ、右手をずっと前に出しただけで。

キーン！

金属と金属がかち合ったかのような、甲高い音が響いた。

ネネが目を見開き、ドラニコフを見つめた。いつの間にか、ドラニコフの手に大きな爪が装着されていたのだ。透明で、ひやりとした冷気をまとった、氷の爪だ。

ドラニコフが、氷の爪を頭上に振りかぶった。たちまち爪がすごいスピードで伸びて、ネネに襲いかかった。ネネが歯を食いしばり、

火の玉や熱気を飛ばして攻撃を相殺していく。しかし、爪は見る間に再生して、四方八方から器用にネネに襲いかかるのだった。

金属が激しくすり合う時のような、耳障りな音がそこら中に響きわたった。キッドたちは思わず耳をふさぎ（マタドーラは角の根本辺りを押さえていた）、身を縮めた。今やドラニコフがどうやって爪を動かしているのかも、ネネがどんなふうに反撃しているのかも、肉眼では全く分からない。もはや自分たちが間に入る余地がないことを、その場にいる全員がまざまざと思い知らされていた。

これじゃ、ダメだ……。

ドラニコフは、やや顔をしかめた。

ドラニコフはパワーアップしてからも、自分の意識をしっかり保っていた。王ドラやマタドーラの時とは、ずいぶん違う。そ

の理由を、ドラニコフはドラメッドにひそかに聞かされていた。

実は、我が輩の作った秘薬のうち二つは、まだやや未完成だったのである。

ドラメッドは王ドラたちに聞こえないよう注意しながら、ばつが悪そうに打ち明けた。

それを飲んだ時は、強大な力を手に入れることができることはできるのであるが……本来の自分を、失ってしまうのである。たまたま王ドラとマタドーラに、それが当たってしまったというわけだ。

悪いが王ドラたちには、そのことは内緒にしておいてほしいである……。

そう言つてうなだれるドラメッドに、心優しいドラニコフは無言でうなずいてみせたのだった。

ギイイイイン！

ドラニコフは、爪の先端が少し欠けているを見た。ひびが入り始めていることにも気づいていた。

このままでは……………いずれは、負けてしまう。

このままでは。

ドラニコフとネネは、今や氷の爪と熱波で押し合っていた。
と、ドラニコフが不意に、氷の爪を消した。

ネネは空中でバランスを失いかけ、大きくよろめいた。

その隙に大きく飛びすさって、ドラニコフは四次元マフラーの中から、唐辛子ジュースが入った丸い容器を取り出した。

唐辛子ジュースを一気に飲み干し、まん丸の容器をじっと見つめる。

全身に、力がわき上がってきた。

キッドはすぐに、ドラニコフの変化に気づいた。

髪の毛が逆立ち、茶色い毛に覆われた耳が立ち上がった。目が銀色に輝く。口の端から牙が覗き、爪はより鋭く、長くなった。いつの間にかふさふさした尻尾が現れている。いつものドラニコフの穏やかな風貌が、消え去っていた。

ドラニコフが、かあっと口を開いた。

ものすごい炎が、ネネめがけて一直線に襲いかかった。ネネは慌てたように火の玉を飛ばしたが、炎の勢いに負け、思い切り吹っ飛ばされた。

そこへ容赦なく、ドラニコフの氷の爪が襲いかかっていった。

「……………あれえ？僕何でここにいるんだっけ？」

ドラリーニヨはとつくのとうに、自分がなぜ一面の花畑の中にいるのか忘れていた。

「トオルは寝ちゃってるし……………」

さつきからだいぶ揺らされているはずなのに、トオルは一向に目を覚ます気配がなかった。それどころか、ますます寝息が深くなっているようだ。

「困ったなあ……………」

言葉とは裏腹に超脳天気な口調で呟きながら、果てない花畑の中を歩いていたドラリーニヨは、ふとあるものを発見して、思わず立ち止まった。

色とりどりの美しい花々の間に、黒いものが倒れている。全く動いていないが、形から判断すると、どうやら人間の、しかも子供のようだ。

ドラリーニヨはほとんど無意識のうちに、そちらへ駆け寄った。

ドラリーニヨの直感は、当たっていた。花の間にうつ伏せに倒れていたのは、黒く長い服を身にまとい、フードをかぶった子供だった。背の高さから見ると、トオルとさして変わらない年らしい。このままでは顔が見えないので、ドラリーニヨは子供の身体を、くると仰向けにしてみた。

女の子だ。明るい表情が似合いそうな、可愛らしい顔立ちをしている。でも今は、トオルと同じようにぐっすり眠っており、しかもその顔は青白くやつれているように見えた。さすがのドラリーニヨも、この子をこのままにしておいたら危ないなということは理解できた。

そうだ、王ドラの所へ連れて行こう！王ドラならきっと、この子とトオルを起こしてくれる。この女の子のことも、何とかしてくれる！

しかし、ここで高い障害が頭をもたげてきた。

「……………どうやってここから出たらいいのかなあ？」

辺りは見渡す限り、花、花、花。漂ってくる甘い香りで、頭がぼうつとしてしまいそうなぐらいだ。終わりの出口も、どこにも見えない。

どうやって出ればいいんだろう？

ドラリーニョが彼なりに必死に頭を回転させ始めた時、それをじっと見守っている人影があった。

その人物は、どこか暗い一室の中に設置されたモニター画面を通して、さつきからずっとドラリーニョたちの様子を見ていたのだ。

まごまごしているドラリーニョを見つめながら、その誰かはちよつとため息をついた。

「やれやれ、あんな忘れっぽいおバカロボットとは思わなかった……でもまあ、あの女の子を見つけてくれたみたいだし、これでやっと帰せるわね。」

そう言つて、その人物はすつと右手を上げると、パチンと指を鳴らした。

画面の中のドラリーニョたちの姿が、一瞬にしてかき消えた。ちよつど、お化け屋敷の時と同じように。

「…………あれれえ!？」

ドラリーニヨは目をまん丸くして立ち尽くした。

一面に広がっていた花畑が一瞬にして消え、気がつくとお化け屋敷の出口の前に立っていたのだ。足元を見下ろしてみると、トオルとさっき発見した少女が折り重なるようにして地面に身を投げ出している。どうやらまだ眠っているようだった。

ドラリーニヨたちは、花畑に来た時のように唐突に、遊園地の中へ戻ってきていたのだった。

「ええー！？何で何でえ？」

ドラリーニヨは混乱して叫んだが、当然答える声はない。わけの分からないうことが多過ぎて、頭が痛くなりそうだった。

その時突然、ドラリーニヨの気をそらすようなことが起こった。

突然上空で轟音が響きわたった。顔を上げてきよるきよる見回しているうちに、ドラリーニヨは何か黒っぽいものが煙を上げながら、地面に落ちていくのを見た。

考えるよりも先に、身体が動いた。トオルと女の子をさつと背負うようにして抱きかかえると、ドラリーニヨは走り出した。黒いものが落ちていった方向へと、まっすぐに。それが地面に墜落したのか、微かな衝撃が伝わってきた。

地面に落ちた『それ』が起き上がろうとするのと、ドラリーニヨが駆けつけるのがほぼ同時だった。

「大丈夫？」

ドラリーニヨに声をかけられた途端、そいつはさつと顔を上げてこちらを見た。黒い服を身にまとっており、明るい茶色の髪に青白い肌をした女の子だ。見事なまでに無表情だったが、唇からほとんど血の気が失せ、かなり荒い息をしていた。服からは焦げくさい匂いがしている。

少女はあからさまな敵意のこもった目つきでドラリーニヨをにらみつけていたが、ドラリーニヨはそんなことには全く気づかず言葉が続けた。

「何でお空から落ちてきたの？……あ。」

ドラリーニヨはふと、少女の肩を押さえていることに目をとめた。

「怪我したの？」

少女の目の中の敵意が揺らいだ。ドラリーニヨの態度が意外だったのかも知れないし、本心から心配そうな言葉が心に響いたからかも知れない。少女は目をそらし、いきなりさつと立ち上がった。

「……………どいてちょうだい。」

ドラリーニヨはちょっと首をかしげたが、素直に脇にどいた。

少女はドラリーニヨのそばを通り過ぎていく時に、彼が背負っている二人の子供にちらりと目を走らせた。

その瞬間に少女の顔をよぎった驚愕の表情に、ドラリーニヨは気づかなかった。

「何なんだろ、あの子……………変なお。」

少女が歩き去っていく後ろ姿を眺めながら、ドラリーニヨは呟いた。それにあの子、何だか誰かとそっくりな顔してた気がするぞ。誰だろう？

しかし結局、ドラリーニヨがそれ以上思考を巡らすことはなかった。ずっと向こうの方に、見慣れた赤や黄色やオレンジや紫や茶色の、丸っこい姿が見えてきたからだ。

「みんなー！」

ドラリーニヨは歓声を上げて、走り出した。

16・ドラニコフの大活躍（後書き）

やっとみんなと会うことができたドラリーニヨ。しかし再会を喜ぶ間もなく、驚愕の新事実が露見し、さらに次なる敵が現れる！そして次にパワーアップするのは……………？お楽しみに！

17 ポーちゃんの話（前書き）

意外な真実が明らかに……。そして今回の事件のボスも、ちらつとだけ登場！！？

17 ポーちゃんの話

「みんなあゝっ！」

キッドは耳を疑った。この声は……まさか……！？

「ドラリーニョ！」

黄緑色のネコ型ロボットが、満面の笑みを浮かべてこちらへ駆け寄ってくる場所だった。

「あれえ、みんな、服が焦げてるよ？今まで何してたの？」

「それはこっちのセリフですよ……あれ、そこに背負っているのは何です？」

「あつ、そうそう！」

ドラリーニョはトオルと、花畑で見つけた少女とをそつと地面に下ろした。二人とも相変わらず目を覚ます気配はない。

マタドーラがやって来て、二人をしげしげと眺めた。

「なんだなんだあ？二人ともシエスタしてるのか？」

「うーん、分かんない。確か、お花畑を通ってたら……」

ドラリーニョは必死に記憶を呼び起こしながら、これまでのいきさつを語った。王ドラの顔が厳しくなる。

「ふむ…それはちょっと怪しいですね。」

「何が？」

「花畑がですよ。トオルくんはその花畑に来た途端に、眠り込んでしまったのでしょうか？それに花の香りが強かったというのも気になります。もしかしたらその香りに、眠気を誘うような成分が含まれていたのでは…………。」

「じゃあ、何でドラリーニヨは眠くならなかったんだ？」
キッドが口を挟んだ。

「ドラリーニヨはロボットですからね。もしかしたら生き物にしか効かないのかも知れませんか。とにかく、何とかこの二人を目覚めさせてみましょう。」

王ドラは特製の『お医者さんカバン』を取り出し、中から出した液状の薬を、トオルに慎重に飲ませた。ただしトオルの顔をまともに見てしまわないように、細心の注意を払っていた。

「…それは、何の薬なんだ？」

思わずといった感じで、マタドローが口を挟んだ。

「これはどんな深い睡眠状態や、催眠状態からも十分ぐらいで目覚めさせてくれる、私特製の薬です。」

「へえ、何でもたそんなもん作ったんだ？」

「マタドローみたいな寝ぼすけに使えるんじゃないかと思ひましてね。」

こともなげに言い返されて、マタドローは渋い顔をした。

「よし…これでトオルくんは大丈夫でしょう。さて、次はこの子に。」

と、もう一人の少女を抱き起こそうとした王ドラだったが、次の瞬間はつと息を吞んで手を離れた。「おい、何だ……………！」

言いかけたキッドも、マタドーラもドラメッドもドラニコフも、いつの間にかそばに来ていた野原一家まで、みんな驚愕して顔色を失った。

王ドラが動かしたせいで、少女の身体がずれ、顔がよく見えるようになっていた。その顔はまさに、ついさっきまでドラニコフと激闘を繰り広げ、そして敗走した少女のものであったのである。

「……………？……………みんなどうしたの？」

唯一状況を読んでないドラリーニョが、きょとんとしてみんなに問

いかける。

「ドラリーニヨ……………」

ドラメッドが突然、今まで出したことのないような低い声で言った。

「このお嬢ちゃんを、本当に花畑の中で見つけたのであるか？」

「え？…うん、そうだよ。何でそんなこと聞くの？」

王ドラが困惑した表情を浮かべた。

「まさか……………そんなはずありませんよ。」

「そうだよな…ありえねえよ。」

「ガウウ……………」

「ほんとだよ！僕嘘なんかついてないもん！！ほんとだもん！！」

「まあまあ落ち着くであーる、ドラリーニヨ。」

ドラメッドが慌ててドラリーニヨをなだめた。

「お主のことを疑っているわけではないであーる。少しの間、我輩たちの話を聞いてくれぬか？」

ドラリーニヨは大きく目を見開いてドラメッドを見つめ、そしてみんなを見回したが……………やがてうなずいた。

「…じゃあ、この子がみんなにひどいことしたの？」

ドラリーニヨは足元で横たわる少女　桜田ネネの顔をじつと見つめた。明るい日の光の下で見ると一層、彼女がやつれているのがよく分かる。

「そうだ…だからこそ、お前が花畑でこの子を見つけたってことがおかしいんだ。その時、ネネはオレたちと闘ってたはずなんだからな。」

「でも………！」言い返しかけて、しかしドラリーニヨはふと口をつぐんだ。

何だろう。何かとっても大切なことを言い忘れてる気がする。しばらくネネの顔を見つめているうちに、ドラリーニヨはあることを思い出してあっと叫んだ。

「ど、どうしたであるか、ドラリーニヨ。急に大声を出して……」

「思い出した！思い出したよ！！」

「はっ？」

ドラリーニヨは、ここに来る途中に、一人の少女に会ったことを話した。少女は空から落ちてきたらしく、怪我をしているようだった

という。

「それでね、その子の顔が、この子に ネネちゃんに、そっくりだったんだ！」

「ええーっ!？」

あまりのことに、みんな開いた口がふさがらなくなってしまった。

「それじゃ……………それじゃ、ネネちゃんが二人いるってことになるじゃないの。」

みさえが到底信じられないといった口調で呟いた。

「どうしたらそんなことが起きるっていうんだ？」
マタドローも混乱していた。

「それじゃ、確かめてみたらいいゾ。」

今までずっと黙っていたしんのすけが、いきなり口を挟んできた。
みんながそちらを振り返る。

「確かめる?どうやって確かめるってんだよ。」

「簡単だゾ。ネネちゃんに聞いてみればいいんだゾ。」

ネネが目覚めるまで、それからしばらくかかった。王ドラが言うには、彼女は相当長い時間、しかも何も食物をとらずに眠り続けていたらしく、身体がかなり衰弱しているらしい。無理に目覚めさせたら、何か支障があるかも知れないので、薬を少しずつ飲ませ、その間に栄養剤を投与して、様子を見ながら起こすことにしたのだった。

トオルは薬を飲まされてから五分ぐらいで目を覚ました。起きてすぐは、自分が遊園地に戻っていることや隣にネネが寝ていることとでびっくりするばかりだったが、みんなから事情を聞かされると、後にはもう何も質問せず、ただネネの様子を心配そつにじっと見つめていた。

それから十五分ほどして

ようやくネネが、目を覚ました。

ネネは自分を取り巻いている状況が、すぐには理解できないようだった。

それはそうだろう。見知らぬ場所で、丸っこい身体をした奇妙な者たちに取り囲まれ、見下ろされているのだから。ネネの寝ぼけた瞳に、戸惑いと、やや怯えた色が浮かんだ。

しかし、しんのすけたちを目にした途端、ネネの顔にほっとした表情が現れた。

「しんちゃん…」

起き上がって、手を差し伸べてきたネネを前に、しかし野原一家は思わず後ずさりした。ネネの動きがぴたりと止まる。

「……………どうしたの？」

ネネの声には、明らかに狼狽の色があつた。

野原一家は顔を見合わせた。ネネを避けるのは忍びないが、だからといって近づくのも怖い。そんな気持ちだが、ありありと顔に浮かんでいる。

ネネは途方に暮れたように周囲に目をやり、そして、初めてトオルに気づいた。しかしもちろん、王ドラのせいで女の子化しているト

オルのことが分かるわけもない。ネネは口をぽかんと開けた。

「あ、あんた、誰？こ、こ、この人たちは、一体誰なの！？」動揺のためかどもりながら、ネネはつかえつつかえトオルに尋ねた。トオルはキッドたちを見上げた。しかし、彼らもネネと同じくらい困っているらしく、おろおろしている。ドラリーニヨでさえ、かけるべき言葉を思いつかないようだ。

「…ネネ、ちゃん……」

不意に背後で低い声がして、ほとんど全員が飛び上がった。

いつの間にか、ボーちゃんが意識を取り戻し、こちらへやって来ていた。

「ボーちゃん……………」

トオルが声をかけた。しかし、ボーちゃんにはまるで聞こえていないらしい。その小さな目は、じいっとネネの顔に当てられている。

ネネもボーちゃんに気づいた。

「ボーちゃん？」

呼びかけられると、ボーちゃんはびっくりしたが、後ろに下がったりはしなかった。ただネネの視線を押し返すように見返し、そして……………。

トオルは度肝を抜かれた。ボーちゃんの間から、出し抜けに涙がこぼれ出したのである。

ボーちゃんは声を出さなかった。しゃくり上げもしなかった。ただ涙を流し、地面にこぼしながら泣いていた。

トオルはしんのすけたちを見、ドラリーニヨたちを見、そしてネネを見た。みんな同じぐらい驚愕し、困惑しているようだった。特にしんのすけたちはしばらく言葉が出ないようだった。みんなボーちゃんが泣いているところなど、数えるほどしか見たことがなかったのだ。

それなのに目の前のボーちゃんは、涙をぼろぼろこぼしながら泣いている……………。

「……………よ、よ……………」

ボーちゃんの口から、微かな音が漏れた。顔をよく見ると、なんと少し笑っている。

「……………よかった。」

それだけ言って、ボーちゃんはとうとう本格的に泣き始めた。

「ん？お前。どうしたんや？」

「…………まずいですよ。」

「は？」

「桜田ネネが、あいつらのうちの一人に見つかり、助け出されてしまいました。」

「なんやと！？」

「しかも、私も顔を見られてしまったようです。」

「何ですって！？あんだ、よくそんなに落ち着いてられるわね？」

「あせつても仕方がないでしょう？もう起きてしまったことです。」

「何を……………！」

「まあ静かにしいや。こいつの言う通りやで。……………あの鼻水小僧も、奴らに捕まってしもうたんやろ？」

「ええ。」

「ほなあいつらはもう、桜田ネネについての話を聞いてしもうつるかも知れんな……………まあええわ。あの小僧はわしのことを知らんやし、別にええ。」

「それでは、どうなさいますか？」

「最後の一人の四天王に、『あの場所』で待機するようにゆつとけ。……………うまくあいつらを、あそこまで誘導しとくからな。」

一同は、ボーちゃんの話の意外さに驚き、何も言えなくなってしまっていた。

彼の話によると、ネネはこの事件に、始めから関わってなどいなか

ったのだという。誰か、ネネとそっくりな顔をした少女がいて、ずいぶん前からネネと入れ替わっていたのだ。

つまり、しんのすけたちが絶交を言い渡したのも、だんだん衰弱していったのも、マサオを異常に怯えさせたのも、みんなその替え玉のネネだったというわけだ。

もっともボーちゃんがこれらのことを知ったのは、もう春日部中のほとんどの人々が墓の中に入ってしまっただけからだった。

ある日、沈んだ気分で春日部山の近くを散歩していると、誰かがふらふらと酔ったような足取りで、こちらへ近づいてくるのが見えた。……それが、なんとネネだったのである。

ネネはうつろな目をして、半分眠ったような状態になっており、ろくにしゃべることすらできなかった。あまりにも驚愕したので、ボーちゃんは一瞬ネネが幽霊になったのではないかと思ったそうだ。でもネネはちゃんと触れることができたし、息もしていたし、心臓も打っていた。ちゃんと生きているということを、ボーちゃんは長い時間をかけて確認した。

ネネは、ちょうど今着ているような、黒いフード付きの服を身につけていた。意識の朦朧としているネネを、とにかく誰かの所へ連れて行かねばと、ボーちゃんはネネの腕を引っ張り、急いで歩き出した。

だが、間に合わなかった。

あっという間に目の前が真っ白になり、気がつくとボーちゃんは、野原家の布団に寝かされていたのだった。

「そうそう…確か春日部山からそう離れていない所にボーちゃんが倒れてて、びっくりしたしんのすけが知らせに来たもんだから、家に連れて帰ったのよね。……………あ、そういえば身体の衰弱が始まったのも、その頃だった気がするわ。」

みさえの言葉にボーちゃんはうなずき、そして話を続けた。

布団から起き上がれなくなり、毎日を眠って過ごすようになったあの日……誰かに呼ばれたような気がして目覚めると、どこか暗くて、冷たい所にいた。

真つ暗闇で、本当に何にも見えなかった。怖くて叫びそうになった時、突然すぐそばで声がしたので、ボーちゃんはぎくりとして飛び上がった。

その声は、今春日部の人々がほとんど吸血鬼となり、自分たちの配下の下っているのだというようなことを淡々と語った。女の声だったらしい。

その声は、ボーちゃんがネネの生きている姿を目撃してしまったので、彼だけ特別にここに連れてきたのだと告げた。そして、ネネそっくりの少女がネネと入れ替わっていることや、これから彼女に従って動かなければならないということ、また他の人々にそのことを決してもらってはならないというようなことを説明した。

「もし約束を破ったら……」

女の声は、静かにそう言った。

「本物のネネちゃんが、死ぬことになるわよ。」

そのかわり、ボーちゃんが首尾よく仕事をこなせば、ネネはすぐに返してやるということだった。……やむを得ず、ボーちゃんは吸血鬼として、正体の分からぬ敵に協力することになってしまったのだ。

った。

「そんなことが……………」

当のネネは、信じられないという顔つきでボーちゃんを見つめている。春日部山の近くでボーちゃんと会ったことにも、まるで覚えがないらしい。

「でも……………誰かに捕まってたのは、本当だと思うわ。だいぶ前から、はつきりと目が覚めた記憶がないんだもの。……………さっき起こしてもらったまでは。」

「ふーん、なるほどな……………」

そう言いながらも、表情がいまいち納得していないのはキッドだ。

「でもよ、この子は眠らされてただけなんだろう？別に命の危険にさらされてたわけじゃないみたいじゃねえか。」

「それはどうですかね。」

王ドラが真剣な表情で言った。

「さっきも言いましたが、ネネさんの身体はひどく衰弱していました。恐らくあそこで眠らされている間、ずっと飲まず食わずだった

のでしょう。…………あのまま放っておかれたら、危なかったと思いますよ。」

ネネとボーちゃんが青ざめた。トオルも怖くなった。僕らをこんな目に合わせるなんて、敵は一体何をたくらんでいるんだろう？それに、あの冷たい目をしたネネちゃんのそっくりさんは、誰なんだろう？

「なるほど、じゃあドラリーニヨの失踪は、無意味じゃなかったってことになるな。よくやったぜ、ドラリーニヨ！」

「え？え？あはは。ありがとぉ。」

何をほめられているのか戸惑いながらも、ドラリーニヨは赤くなつて照れた。

「でも、何でお化け屋敷から花畑にワープしたりしたんだろうな。」「マタドローラが首をかしげた。そう、その謎がまだ解けていないのである。」

「トオル、何か変なものを踏んだり、触ったりしなかったか？」

「うーん……してない、と思うけど。」

トオルは曖昧にそう言つて、ゆるゆると首を振つた。そのたびに長い髪の毛が震え、ネネが目丸くしてそれを眺めている。

「ふうん、そうか。まあ……おい、ありや何だ？」

全員、つられるようにしてマタドーラの見上げる方向に顔を向けた。
そして上空を猛スピードで飛ぶ小さな光のかたまりを、呆気にとられて見つめた。

「なんだ、ありや？」

キッドがそう言っている間に、光はある場所の上で旋回したかと思うと、さっと地上へ下りていつてしまった。

「UFOだゾ！」

しんのすけが興奮して叫んだ。

「まさか。」

トオルはしんのすけの説を否定した。未来から来たネコ型ロボットがいるだけでもとんでもないことなのに、UFOまで出現したらそれこそ大変だ。

「ねえ、追いかけてみようよ！」

好奇心いっぱいのだらりーニョが叫び、誰も返事をしていないのにもう走り出した。

「のだらりーニョ！」

「待つであーる、ドラリーニョ！」
「また迷子になりますよ！」

結局全員が、ドラリーニョを追いかけて走り出したのだった。

「ふん、アホな奴らや。まんまと引っかかりよった。」
「今度こそ大丈夫でしょうか？」

「まあ安心せえ。あいつの能力相手では、奴らとて手も足も出えへんわ。」

不吉な笑い声が、その場に流れた。

17 ポーちゃんの話（後書き）

光が落ちた先とは？そしてそこで、待ち受けるものとは……。次回はドラえもんズに、ピンチが訪れる予感！？ 感想待ってます

18・迷路（前書き）

今日はこれで、更新終わりです……………（^^・）ヤレヤレ 感想お
願いします

18・迷路

（来た来た……………）

奴らが近づいてくるのをモニター画面で見守りながら、四天王の最後に一人はほくそえんだ。

一度、あの黄緑色のバカロボットをしとめようとして失敗してしまった。もうしくじるわけにはいかないが、何しろこんな場所だ。逃げたくても逃げられまい。

彼の目の前には、細くいりくんだ道が、何百と続いていた。

「 1111 16」

王ドラは思わず足を止めた。他のみんなも同様だった。

「…………迷路、だな。」

キッドが呟いた。

今、一同の前には高い塀がそびえており、アーチ状の入り口には分かりやすく、『めいろ』と書かれていた。

「……………」

ドラメッドは少し顔をしかめた。迷路に関しては、あまりいい思い出がない。忘れもしないドラパンとの対決の時、迷路で水攻めにあ

ったことがあった。

しかし、一緒にひどい目にあっただはずのドラリーニヨは、早く入りたいくてうずうずしている様子だった。

「迷路だ迷路だあゝ！ねえ、早く入ろうよ！！」

「いや…………でも…………」

王ドラは不安感をぬぐい去れない様子で、迷路を見上げた。何だかこの中に入ったら、とんでもないことが起こる気が…………。

「でも王ドラ、ここであーっと突っ立つてるのだって危険だと思うぜ？どっちにしろ、ここには安全な場所なんかねえんだからよ、中に入ってもいいんじゃないの？」

じっとしていることが苦手なキッドが、王ドラに言った。

「そうですねえ……………」

王ドラは顔をしかめたが、確かにここにじっとしていたところで道が開けるわけではない。それに何もせずにつじうじしているのは、王ドラも嫌だった。

王ドラは一つ、大きくため息をついた。

「……………仕方ありませんね。そんなに言うなら、中に入ってみましようか……………でも、何が起こるか分かりませんよ。」
「今までだってそうだっただろ。さあ入るぞ!」

マタドローラの勇ましいかけ声と共に、一同は迷路へと続く入り口の中へ、足を踏み入れていった。

暗い、そして不気味。

迷路の中の雰囲気を表すには、その二つの言葉だけで充分だった。

天井があるので、光源と言えば壁に埋め込まれているか細いライトのみ。それも足元を照らし出すだけで精一杯な明かりだった。要するに前方が全く見えないので、何が現れるか分からない。迷路というよりは、むしろお化け屋敷のようだ。

そんな不気味さにもかかわらず、ドラリーニヨは元気いっぱいだった。お化けさえでてこなければ平気なのだ。みんなより少し遅れてトコトコと着いてくる。

「何も出てきませんね。」

王ドラが、油断なく曲がり角の陰に目を配りながらささやいた。

「うむ……………却って不気味であるな。」

ドラマメッドはぎゅつと顔をしかめた。辺りは耳が痛いくらいに静まりかえっている。

「ったく、何でもいいからでてきてくんねえかな。」

マタドローラが、ヒリリマントと剣を振り回しながらあくびした。それを聞きつけた王ドラが、素早く振り返った。

「エル・マタドローラ。こんな所で寝られては困りますよ。」

「分かってる、分かってるって。そんなことしねえよ。」

マタドローラは不機嫌に右手を振ってみせた。

「ああそつだ！ミニドラにもお散歩させてあげなきゃー！」

ドラリーニョが慌てたように叫び、着ているシャツの中をぐそぐそやり始めた。

「手伝おうか？」

トオルがドラリーニョに歩み寄っていく。

思いがけないことが起こったのは、その瞬間だった。

ガシャアアアン！

背後で大音響が鳴り響き、地面が大きく揺れて、ひろしはもうちょっとで転びそうになった。後ろを振り返って……愕然として、立ち尽くした。

がっしりとした鉄製の格子が、背後に立ちふさがっていた。

どうやら上から落ちてきたらしい。その時下に誰もいなかったのは

幸いだっただものの、不幸なことにその格子が下りてきたのは、全員が通り過ぎてからではなかった。

「風間くん！」

「ドラリーニョ！」

しんのすけとキッドが叫んだ。格子の隙間から、きょとんとしたドラリーニョと途方に暮れたトオルの顔が垣間見える。

遅れていた二人は、格子の向こう側に取り残されてしまったのだ。た。

慌てた王ドラが、ぬんちゃくを取り出して鉄格子を叩き始めたが、壊れるどころかひびすら入らない。マタドーラがありったけの怪力を振り絞っても、まるでびくともしなかった。

「なんて……………丈夫な……………やつだ。」

息を切らしてゼイゼイしながら、マタドーラが言った。

「それなら、我が輩が巨大化すれば……………」

「ダメですよ。マタドーラの怪力でも壊せなかったんですよ？」
「……………そうであるな。」

進み出ようとしたドラメッドは、王ドラに言われてしゅんと引き下がった。

しばらくの間、沈黙が続いた。

「……………僕たち、このまま行きます。」

驚いたことに、口火を切ったのはトオルだった。

「鉄格子が壊せないんだったら、そうするしかないと思います。
ね、ドラリーニヨ？」

「うん！」

ドラリーニヨは何も考えずに、でも顔いっぱい笑顔で応じた。

「でも……………」

何か言いかけたネネを制して、キッドが前に進み出た。

「ちょっと待て。その前に渡しときたいものがある。」

そう言つてキッドが差し出したものを、トオルは目を丸くして見つめた。他の面々も、びっくりした顔になってそれを眺めた。

キッドの手に乗つてたのは、キラキラ光る一枚のカード 『親友テレカ』だった。

キッドはトオルに近づくと、ドラリーニヨに聞こえないよう、やや声をひそめて言つた。

「これはオレたちドラえもんズの友情の証、親友テレカだ。……………これを使えば、たとえドラリーニヨとはぐれちまっても、あいつと連絡が取り合える。オレたちとも連絡できる。ピンチになったら、それを使つてオレたちを呼ぶんだ。」

そこまで言つて、キッドはさらにもう一言、付け加えた。

「それはオレたちの友達のものなんだ。 お人好しだから、勝手に貸したからといって腹を立てたりはしないだろうが、くれぐれもなくしたりはしないでくれよ。」

「は、はあ……………」

トオルが親友テレカを受け取ると、キッドはくると振り返って、仲間たちに言った。

「よし………そんじゃ、ドラリーニヨはトオルに任せて行くぞ。」

「キッド………。」

「あん？何だよ、王ドラ。」

「いいんですか？あれ、ドラえもんの親友テレカでしょう。」

「だーいじょうぶさ。タオルならしつかりしてるから、ちゃんと大事に扱ってくれるさ。」

「はぁ……………」

「それにタオルをドライリーニョと二人きりにしとく方が、もっと問題だとオレは思うぞ。」

「それは……………そうでしょうね、多分。」

「だろ？さ、心配してても始まらねって。行こつぜ。」

トオルはしげしげと、手の中にある親友テレカを眺めていた。

その名の通り、親友テレカは普通のテレホンカードと同じくらいの大きさをしている。金色の淡い光を放っており、表面にはキッドたちの姿が描かれ、『D R A E M O N S』と刻印されていた。

トオルはふと、鼻歌を歌いながら前に行くドラリーニヨを呼び止めた。

「ねえ、ドラリーニヨ。」

「ん？ なあに？」

「この、真ん中にいる人は誰？」

トオルの指は、キッドたちの真ん中にある青いロボットに当てられていた。

「あ、それはドラえもんだよ！ 僕らドラえもんズのリーダーさ！！」
「ふうん……………」

トオルは多少の驚きをもって、ドラえもんをもう一度見つめ直した。服装などに特徴が出ている他のメンバーたちとは違い、ドラえもん

は何も身につけておらず、いかにも地味に見える。真ん中にいなければ、誰もドラえもんズのリーダーとは思わないだろう。

でも他のメンバーにはない特徴が、この青いネコ型ロボットにはあった。
いや、なかったと言っべきか。

「この人、何で耳がないの？」

「え？あれ、んーと、何でだっけ？」

ドラリーニョが思い出すまで、トオルはおとなしく口をつぐんで待っていた。

「あつ、そうだ思い出した！確かネズミにかじられたんだって言うてたよー！！」

「ネズミに？」

「うん。それで家にお金がなかったから、耳を取っちゃったんだよ。だからドラえもんは、ネズミがすっごく苦手なんだよ。」

ネコ型ロボットなのに……と考えると、トオルは思わずおかしくなった。

身体が青いのも、本当は黄色だったのに海辺で大泣きしているうちに塗装がはげてしまったからだという。なかなかつらい目に合っているネコ型ロボットらしい。

「でも優しいし、いざという時はすごく頼りになるんだよ！親友テレカを手に入れたのだって、ドラえもんのおかげなんだからー！！」

熱心に話していたので、角を曲がった途端に扉が現れたことに、ドラリーニヨは全く気づかなかった。トオルが注意する間もなく、ドラリーニヨは見事扉に激突した。

「あいたっ！」

ドラリーニヨは飛び退き、したたかにぶつけたおでこをさすりながら、扉を見つめた。どっしりと重そうな、鉄板張りの大きい扉である。キッドの空気砲やマタドラーの怪力をもつてしても、ぶち破るのは難しいかも知れない。

しかし、そつと扉の取っ手を引っ張ってみて、トオルはびっくりした。なんと、鍵がかかっていないのだ。扉は抵抗なく、すうっと動いた。

トオルは束の間、ドラリーニヨと顔を見合わせた。

「……………どうする？」

「入ってみようよ。」

間髪入れずにドラリーニョが言った。トオルが予想した通りだった。

「でも……………危くない？」

「大丈夫大丈夫！トオルくんには僕がついてるから！！」

だから心配なんだけど。

なんて言うわけにはもちろんいかず、トオルは黙って取っ手を握る手に、力をこめた。

「お……………うう、どう？」

突然、巨大に開けた空間に出たしんのすけは、目をぱちぱちさせた。
ネネや、野原一家も同様だった。

ずいぶん広い所だったが、ずいぶん殺風景でもあった。壁と天井は
金属張りで、鏡のように部屋の中に入ったキッドたちの姿を映して
おり、床にはなんと、緑色の芝生が敷きつめられている。それ以外
は何もない。退屈なほど単調な光景だ。

その時、後ろからじっと見つめている視線を、王ドラは感じた。

反射的に振り返るより早く、みんなの背後ではたとと扉が閉まる音がした。続いて、がちゃんと鍵がかかる音も。

「なっ、何だっ!？」

マタドローが叫び、ヒリリマントをさっとり出した。ドラえもんズのメンバーたちが素早く動き、野原一家とネネを守るように取り囲む。その間にも、彼らの目は油断なく周囲に配られていた。

しかし。

「ガアウウッ！」

泣くような吠え声と共に、ドラニコフの身体が空を切って飛んだ。

「ドラニコフッ！」

ドラニコフは壁に激突し、そのまま地面の上に転がって、ぐったりと動かなくなった。目の焦点が合わなくなっている。気絶してしまっただけらしい。

「くそっ、くそっ！どこだ！？」

苛立ちと恐怖で怒鳴りながら、キッドはあちこちを見回した。こんな身を隠す所のない場所だというのに、ドラニコフを攻撃した敵の姿が見えないのだ。

不意にマタドーラは、すぐ後ろでくすくす笑う声を聞いた。

はっと振り返ると同時に、生温かいオイルがぱっと顔にかかった。

「わあ………なんか、へんてこな所だね？」

本当にへんてこな場所だった。床も壁も天井も、みんな黒光りしている。黒い大理石か何かを使って作られた部屋のようにだ。

部屋は案外広く、特に天井が高い。中心には台があり、扉の正面にかなり長い階段があつて、台のてっぺんに上れるようになっていた。そこに何か大きなものが置かれているのが、ちらりと見えた。

「わーい、何ここ？何ここ？」

興奮して走り回り始めたドラリーニヨをちらっと見やり、しばしためらってから、トオルは階段の一段目に足をかけた。

上りきるのには、かなり時間がかかった。

半ば肩で息をしながら、ようやくてっぺんに上がったトオルは、そこに設置されているものを目の当たりにして、一瞬立ちすくんだ。激しい恐怖に襲われた。

棺桶^{かんおけ}だった。

この部屋と同じ、黒いつやつやした石で作られている。誰かの名前が彫られているのではないかと一瞬思ったが、その表面には、名前どころか何の模様も描かれていなかった。どこもかしこもつるつるで滑らかだ。

怖かったが、何だか惹きつけられるような気持ちで、タオルは数歩、棺桶に近づいた。

棺桶のふたが少しばかり持ち上げられたかと思うと、その隙間からしゅるっと白い手が伸びてきた。

あっと思う間もなく、タオルは白い手に強く腕をつかまれ、棺桶の中へと引きずり込まれた。

「…………トオル？あれ、トオル？」

ようやく走るのをやめたドラリーニヨは、トオルの姿が見えないことに気づいてきよろきよろした。

「…………ここだよ。」

意外なほど近くで声がした。

ドラリーニヨは振り返り、ほっと安心したような笑みを浮かべた。

「んもおゝ、トオルったらびっくりさせないでよね。」

「ドラリーニヨこそ、急に走り回ったりしないですよ。話しかけるタイミングをつかめなかったじゃないか。」

「あはは、じゃあ行こっか！」

ドアが閉まると同時に、部屋の中には暗闇が満ちていった。

18・迷路（後書き）

最後はちょっと怖くなるように仕上げてみました。キッドたちの闘いの行く末や、ドラリーニョたちの行き先を知りたい人は、ぜひ次回も読んで下さい（*^|^*）

19・黒幕の正体は…？（前書き）

そろそろラストに向けて、いきなりですがエンジンがかかります！

ちなみに皆さん、ドラリーニヨとマサオくんの声を同じ声優さんが演じていることはご存じでしたか？ 感想お願いします

19・黒幕の正体は…？

「マタドーラ！大丈夫であるか！？」

ドラマメッドが青ざめて、マタドーラに駆け寄った。

「大……………丈夫だ。」

マタドーラは気丈に言い放ったが、顔は青ざめている。頭の角が一本、根本から切り落とされ、そこからオイルが流れ出ていた。

「どこだ？一体どこから……………」

キッドが冷や汗を流しながら、ショックガンをあちこちに向けるが、敵の姿は影も形も見えない。

「何なんですか、これは！」

さすがの王ドラも、うわずった声を上げた。

「ははっ、びっくりしてやんの。」

突然呼びかけられて、キッドたちは思わずびくつとなった。おそろおそろ、振り返った先にいたのは…………。

「河村くん！」

ネネが甲高く叫んだ。ボーちゃんも、しんのすけも大きく目を見開いた。ばら組の俊足自慢の園児で、やたらとちよつかいをかけてくるチーター河村が、にやにやしながらこちらを見ている。手に鋭いナイフのようなものを持っていた。

「どうだ？この俺の能力！自由に透明になれる俺様相手に、お前らに勝ち目なんかねーのさっ！」

「透明だと？」

マタドーラが顔をしかめながら呟いた。

「えーっ、いいなー。透明になったら好きなだけ女湯を覗きに行けるもん。よかったね、河村くん。」

「バ、バ力野郎！そんなことに使うかよ！この力は、俺がお前らを倒すためにもらったんだ！」

河村の青白い顔に、わずかに赤みがさした。

「と、すると……………お前が最後の四天王ってわけか。」

キッドが目を細めながら呟く。……………その時河村の顔に、わずかな動揺が走った。

「ん、ま、まあそんなとこかな……………それよりもまず、お前らを倒す方が先だ!」

河村の姿が、空気に溶けるように消え去った。ネネが息を呑み、しんのすけは

「おーっ、カッコいいっ!」

と、歓声を上げる。

「どうします?」

王ドラがぬんちゃくを手に、辺りをきょろきょろ見回しながら言っ

た。

「なあに、案ずることはない。我が輩に任せるである。」

ドラメッドが自信たっぷりの声で言ったので、みんなびっくりして振り返った。ドラニコフを抱え上げていたマタドーラが言う。

「へえ、どうしたんだよ、ドラメッド。えらく自信ありげじゃねえか。」

「まあ見ているであるよ。」

ドラメッドは手を交差させたと思うと、ぱつと大きく腕を広げて叫んだ。

「炎よ、この部屋を包み込むである！」

たちまち、キッドたちをぐるりと取り囲むようにして、真っ赤な火が部屋中に燃え上がった。熱気にあぶられて、顔が熱い。

ちよつとびっくりした顔をした王ドラが、すぐにニヤリと笑み崩れた。

「なるほど……あぶり出しというわけですか。」

「透明になれるからって、身体を実際に消せるわけじゃねえもんな。」

キッドとマタドローもニヤニヤしている。すると、たちまち……。

「あちーっ！あちちちちちー！！」

火の中から、小さな黒い固まりが飛び出し、地面を転げ回った。間髪入れずにマタドローが飛びかかり、パンチを食らわせると、飛び出てきたものはあっという間にぐったりとなった。

ドラメッドがさっと手を上げた途端、炎は嘘のように消えた。

「河村くん……大丈夫なの？」

ネネがこわごわといった感じで尋ねると、ドラメッドは安心させる

ような優しい口調で言った。

「心配することはないである。あれは幻の炎であるよ。」

マタドローは気絶したチーター河村の身体を抱え上げ、得意そうな顔をしていた。

「最後の四天王のわりには、なんか呆気なかったな。」

「ふ、耳ほどにもない奴め。」

「それを言うなら口ほどにも、でしょうが。」

しんのすけの頭を、みさえがこつんと叩いた。そばでネネがくすくす笑っている。

「まあこれでもう……………」

言いかけて、王ドラの顔がいきなりこわばった。目が一点に釘づけになっている。みんなその視線を追って振り返った。

いつの間にか、頭をオニギリみたいに剃り上げた男の子が、壁に寄り添うようにして立っていた。

「うわ！」

キッドが思わず飛び上がった。

「お前、どこから来た!？」

しかししのすけたちは、全く別の部分に反応した。

「マサオくん……………」

ネネが呆然とした表情で、呟いた。

マサオは無表情だった。何を考えているのか分からないような目をしていた。

「マサオくんまで……………敵の仲間!？」

みさえが口元を押さえた時、また後ろで声がした。

「当然や。その坊主の友達を、四天王に選んだんやからな。」

はっと振り返ったひろしが、大きく目を見開いた。

「おっ、お前はっ！」

「ねえトオル、どうしたの？」

「…………え？何が？」

「さっきからずっと黙ってるんだもん。」

トオルとドラリーニョの二人は、果てしない迷路の先をずんずん突き進んでいた。

ドラリーニョは相変わらざるるんだが、トオルは妙に無表情で、

無口になっている。
こんな感じだった。

あの黒い部屋から出てきてから、ずっと

「大丈夫？なんか顔が青いみたいだけど。」

「そう？気のせいなんじゃないの。」

答える声がどこかそっけなく聞こえるのは、気のせいだろうか。

「ん？」

その時、今までしんと静まりかえっていた迷路の中に、小さな足音が聞こえてきた。

視線を下に落としたドラリーニヨは、向こうから小さな生き物が駆けってくるのを目にした。

それは、一匹の犬だった。

「わーっ、かわいいー！ねえ、君名前なんて言つの？」

「かわいい？……なんかその犬ちよつと変じゃない？」

確かに変だった。よだれを垂らしているし、毛を逆立ててうなっているし、それに何より、目が真っ赤に光っていた。

「あれえ、なんかこの犬、目え赤くない？」

「確かにどう見ても赤く光ってるよね。」

「寝不足？」

「違うと思うけど。」

犬が不吉なうなり声を上げた。それを見て、トオルはドラリーニヨの腕を強く引っ張った。

「ドラリーニヨ、逃げた方がよさそうだよ。」

「え？何で？」

「何でって、普通に考えたらそうなるだろ。」

と、トオルが半ば強引にドラリーニヨを引きずっていき始めた時、ドラリーニヨがわあっというような叫び声を出した。

目を上げて、トオルは驚いた顔になった。

数え切れないほどの、大小様々な犬たちが、険悪なうなり声を上げながら迫ってくる。

前からも、後ろからも。

二人はうなり声とよだれと牙と、赤い目の集団に取り囲まれてしまった。

「…………どうする？」

トオルが、感情を表に現さない低い声で、ささやくように言った。

「うーん……………」

さすがのドラリーニョも、途方に暮れた様子だった。 と、ぱつと表情を明るくして手を打った。

「そうだ忘れてた！あれがあつたんだ！！」

「あれ？」

ドラリーニョはふところをこそごそやって、小さな薬びんを取り出すと、一息にえいっと飲み干した。

まばゆい光が放たれた。トオルは目を細め、右手で顔に影を作っていたが、あまりのまぶしさに目をつぶされた犬たちは、きゃんきゃん吠えて混乱に陥った。

やがて、光がおさまると……さっきまでドラリーニヨの立っていた所に、一人の少年が立っていた。

オニギリのような坊主頭をした少年だ。佐藤マサオにそっくりな顔をしている。服装もマサオの普段着と同じようなものだったが、首にはドラリーニヨがつけていたのと同じ、小さなサッカーボールがついた首輪を巻いていた。

「……!? ……わゝ、何これ何これえ？」

ドラリーニヨは自分の変貌した姿を見下ろし、興奮して叫び出した。
声はほとんど変わっていない。

「ドラリーニヨ、こいつら早く何とかしてよ。何のために変身したんだい？」

トオルの冷ややかな声が割り込んだ。

「あつ！ごめんごめん！！」

変身したドラリーニヨは慌ててトオルを抱え上げると、その場で軽く助走するやいなや、弾丸のように飛び出した。

何しろドラリーニヨはチーターすら打ち負かすほどの俊足である。そんな彼がパワーアップしたのだから、これはただごとではなかった。魔法にかけられたかのように、ドラリーニヨとトオルの姿は通路の向こうへ消えていってしまった。

目を赤く光らせた犬たちは、すっかり毒気を抜かれたようになって、二人が消え去っていった方向を見つめていた。

「お、お前はっ！」

ひろしは驚愕のあまり、そう言ったきり声が出なくなってしまった。
みさえが悲鳴を上げた。しんのすけも振り返り、凍りついたように動けなくなった。

マサオがいるのとは反対側の壁に、黒い服をまとった者がもたれかかっている。人間ではない。人であるはずがなかった。その顔は、人のものというより、骸骨の顔に近く見える。しかし普通の骸骨なら空っぽなはずの目の穴には、赤い光が燃えていた。服から突き出している腕や脚は、明らかに白い骨がむき出しだった。

そのそばには、同じような黒い服を着こなした、見事なスタイルの黒髪の美女がいた。普段ならバラの花を投げて誘惑するマタドールだったが、今回はなぜかそういう気分になれず、代わりにヒラリマントと剣を握る手に、一層力をこめた。

美女の顔を魅入られたように見つめていた王ドラは、ふと彼女の額に奇妙なものをみとめた。

始めは傷か何かかと思ったが、そうではなかった。印だ。それもなぜか、一本の小さな骨の形をしている。

奇妙な印だ　　そう思ってしんのすけたちの方へ目を移した王ドラは、びっくりした。

野原一家は蒼白になっていた。しんのすけでさえ、その目にきつい光を浮かべながらじりじりと後ずさっている。足元ではシロが、不安そうにクンクン鳴いていた。

「おい、どうしたんだ？」

キッドがせき込んだように尋ねた。彼だけではない。ネネもボーちゃんも、びっくりしてわけが分からないという表情でしんのすけを見つめている。彼がこんなに動揺しているところなど、見たことがないのだろう。

野原一家はみんなの方を見なかった。ただひたすらに、引きつけられているかのように、骸骨のような風貌を持つ何者かに視線を注いでいた。

やがてひろしが、震える声でもらした。

「ボーン・キング……！」

19・黒幕の正体は…？（後書き）

ボーン・キングのことは、クレしんの漫画を読んでらっしゃる方なら分かるはずです。分からない人も、次回以降に説明するのでご安心下さい。次回もお楽しみに！

20 突如現れた仇敵（前書き）

今回はこの事件の黒幕と、その目的が明らかに！？ 感想をお願いします

20・突如現れた仇敵

一同はそれぞれに驚きの顔をして、驚きの声を発したが、何しろびっくりするような事柄がいくつもあるので、それらはばらばらな問いかけとなった。

「しんちゃん！？どうしちゃったの、顔が真っ白よ！」
そう叫んだのはネネだった。

「何なんだよ、こいつは？」
キッドが顔色を失いながらも、強気で言い放って骸骨みたいな何者かを見つめた。

「ボーン・キングですって？」
と、野原一家を見上げたのは王ドラだ。

「野原さん、どういうことなんですか？ボーン・キングとは一体誰です？」
あなたたちは、こいつのことを知っているのですか？」

ひろしとしんのすけは答えない。みさえはいやいやをするように首を振りながら、まるで叫び声を抑えようとするかのように、右手でぎゅっと口を押さえつけ、もう片方の腕でひまわりを一層強く抱きしめた。

「
おい。」

今度はエル・マタドーラが声をかけた。目を細め、砂の中に混じっ

た金の粒を探すような目つきで、野原一家の瞳の中を順々に覗き込み、探っている。

「なあ、今言ったことをもう一回言ってみろよ。ボーン・キングってのは誰だ？お前らはこの骸骨野郎のことを知ってんのか？」

だがみんなの耳に、マタドローの言葉は半分も届かなかった。それを庄するような、厳しく尖った声が割り込んできたからだ。

「こいつらは。」

骸骨のような男の放った声だった。

「こいつらは……わいを、殺したんや。」

しばし、ネネもボーちゃんもドラえもんズの面々も、呆然として言うべき言葉を思いつかなかった。

「な、な。」

第一声を発したのは、キッドだった。

「な、何だ？何デタラメなこと言ってんだ、こいつ？」

骸骨男の顔が、少し笑ったように見えた。

「デタラメとちゃうで。」

「何を言ってるんですか。」

次に言ったのは王ドラだ。

「大体殺されたんなら、今ここにそうしているわけな……………」

ひろしの力ない声がしたのは、その時だった。

「いや、みんな…………それは本当のことなんだ……………」

キッドたちが驚いて見つめる中、みさえが言葉を続けた。

「こいつはボーン・キングと言って、吸骨鬼 ボーン・バンパイアっていう怪物の王なの。」

「ボーン・バンパイア？」

「吸血鬼の、血を吸う代わりに骨を吸うバージョンみたいな奴のことなんだ。」

ひろしが説明する。

「キングは昔、ボーン・ブレードっていう伝説の武器で倒されたんだけど、その子孫の手によって復活してしまったの……………そして仲間を集めて、世界征服計画を進行させ始めた。」

あまりに巨大なスケールの話に、ネネとボーちゃんは呆然と顔を見合わせるばかりだ。

「俺たちはたまたまそれに巻き込まれて、なぜか協力することになった。もうダメかって思ったこともある。しんのすけを人質に取られたりとか、味方の女の人が実はボーン・バンパイアの子孫だったりとか。」

「でも最後にはちゃんと買ったんだゾ！オラが……………」

言いかけて、しんのすけは顔を赤らめた。

「……………オラが頑張ったから、最後にはキングを倒せたんだゾ。」

明らかに何かを隠した口調だったが、そんなことを気にしている場合ではなかった。

キングはますますにやにやと笑い、野原一家を見回した。

「……………そうや、確かにわいは、あの時首をはねられた。わいの身体はもう二度と復活でけへんように、どこかへ隠されとるんか、それとももう破壊されてしもたんかも知れんな……………だからお前らも、わいがいきなり目の前に現れて驚いとるんやろ。」

骸骨男 ボーン・キングは、コツコツコツと変わった笑い声を上げた。

「残念やけどな、わいはそう簡単には死なへんのや。元の身体は失

ってもうたが、それでもこうしてよみがえることができた。

「ここにおる、ナタリーのおかげでな。」

野原一家ははつとして、キングに指さされた美女を見つめた。女は美しい顔に歪んだ笑みを浮かべて、こちらを見つめている。

ひろしは冷水をかけられたような気持ちで、思い出した。そういえば始末したボーン・バンパイアの中に、元ハリウッド女優のナタリー・コツバーンの姿がなかった……でもそれがキングの復活と、何の関係が？

ひろしの心を読んだかのように、キングが言葉を続けた。

「ナタリーは、わいの愛人やった。そしてお前らにわいがやられた時……ナタリーの腹には、わいとの間の子供があったんや。」

野原一家がばつと顔を上げた。彼らが雷に打たれたような顔をしているのを見て、ボーン・キングはますます小気味よさそうに話し続けた。

「さつきもゆうたように、わいは首をはねられた元の身体はもう望みなしやと考えた。するとその時運良く、ナタリーがわいの子供をはらんどるのを知った。そこでわいは、その子供の身体をもろつて生まれ変わることにしたんや。」

もう誰も口を挟まない。みんな呆然となって、キングの話を聞いている。

「ナタリーに産んでもろうてから、わいはあつという間に成長して、以前とそう変わらへん力を取り戻した。それからやるべきことを考えたんやが……」

しんのすけたちを見て、キングはまたにっと笑った。

「世界征服はもちろんやが、わいの子孫のボーン・バンパイアたちはもうやられてもうて残ってへん。でもちようどその頃、ある……」

言いさして、キングは不意に言葉をにこした。

「……あるチャンスのおかげで、わいとナタリーは重要な情報を得た……。」

キングはもったいをつけるようにしてみんなを見回し、低く付け加えた。

「普通の人間の血に、わいの体液を大量に混ぜ込むと、吸血鬼にすることができるんや。」

その言葉に驚いて、王ドラは何か他のことを考える余地などほとんどなかったが、キングがわずかの間言葉につまんだことがほんの少し気になった。しかし、再び話し始めたキングの声に気を取られ、そのことはすぐに忘れてしまった。

「それを利用して世界征服を始める前に、わいはええことを思いついた。……………そう、お前らへの復讐や。」

キングの目がぎらぎら光り、野原一家をねめつけた。一家は身を寄せ合ったが、キングから目をそらしはしなかった。

キッドがかすれた声で、呟くように言った。

「……………そんならなぜ、しんのすけたちを真っ先に吸血鬼化しなかったんだ？」

「そんで洗脳して、家来にしまえってか？なるほど、それもええ復讐かも知れんが、それやとseitら自身は大してつらい思いをせんと終わってまうやろ？それやたらこいつらの友達をわいの手下にして痛めつけたった方が、ようけ苦しめられるやんか。」

キッドたちは背筋が冷たくなる気がした。 キングの言葉が、はつきりと真実をついていたからだ。

「そこでわいは、その坊主の友達関係を調べ始めた。 そして、そこにおける桜田ネネってガキが、利用できるっちゅうことに気づいた。」

いきなり名を呼ばれたネネは、びくつとすくみ上がった。そちらを見ようとせずに、キングは話し続けた。

「わいはネネの性格とか、その他もろもろのことを色々調べた。」

「そんでネネが最近、どうもこの坊主やその友達に陰で嫌われとるらしいっちゅうことも知った。」

ボーちゃんがびくつと身体を震わせ、ネネが青ざめる。しんのすけは「嘘だ！」

と叫んだが、ボーン・キングはかまわずに話を続けた。

「こいつは使えるとわいは思った……………そこで桜田ネネを中心に、ある計画を立てた。」

「このお嬢ちゃんにそっくりな少女に入れ替わらせて、一連の事件の首謀者と見せかけようとしたというわけであるか？」

ドラマツドの言葉に、キングが初めて驚いた顔になった。

「なんでそないなことを知つとるんや？」

「……………」

ドラマツドは答えなかった。代わりに王ドラが口を開いた。

「どうもよく分からないのですがね。どうしてまたネネさんを最初に利用しようと思ったのです？別に他の子供たちでもよかったわけでしょう。」

「ああ、そのことが。」

キングがなぜか、ことさらに得意そうな顔になった。

「ええか、これがわいの計画の大事なところやったんや。人間どもをわいの思い通りに洗脳するには、なんちゅうても心の弱みを握つたのが一番や……………ネネと絶交したお前らは、それ以来ネ

ネが弱ってつたのを見て後悔しとつたはずや、ちやうか？」

返事はなかった。

「そうした時に、心の隙間うちゅうもんは生まれる。……………それを
がっしりつかんでもしたら、後はこっちの思うまま。簡単に支配で
きるっちゅうわけや。他の春日部の人間も、周りの奴らが死んでい
くのを見て心が弱ってつたはずやしのお。ま、その鼻水の
ガキだけは、目を離れた隙に逃げ出しよつたネネを見つけてしもう
たから、うまく洗脳できへんだんやが。」

「でも、嘘だつたんだろ？」

キッドが突然口を挟んだ。声が震えている。彼がこんなに怒った声
を出すところを、しんのすけたちはもちろん、王ドラたちも聞いた
ことがなかった。

「全部嘘だつたんだろ？ニセモノのネネに死んだふりをさせて、し
んのすけたちの心にわざわざ傷をつけて……………お前は、こいつらの
友情を引き裂いたんだ！」

「そうや。まあそのことだけでもわいの復讐は果たせられたと言っ
てもええかな。」

こともなげに言い放ったキングの声に、キッドはもう何も言えず、
ぶるぶると腕を震わせた。指があつたら、強く手を握りしめていた

かも知れない。

「でももう、これで本当に終わりや。」

キングが手を上げた。突然足音が近づいてきたので振り返ると、マサオが虚ろな目をしたまま、歩み寄ってくるところだった。

「そいつにやった力は少々厄介でなあ。さっきの足の速いガキはただの腕試しみたいなもんや。こいつが本当に最後の四天王やからな。何でお前らみたいなたヌキがここに来たんか知らんが………どっちみち、ここで終わりにしたるで。」

キングがそう言ったかと思うと、マサオが一直線に飛びかかってきた。しんのすけの首を狙って。

マサオの両手がしんのすけの首にかかる前に、マタドーラが後ろからマサオに組みついた。

マタドーラはドラえもんズ中一番の力持ちだ。泣き虫で弱虫なマサオが、かなうはずもない。しかしまるでその攻撃を予期していたかのように、マサオは振り返りすらせずに無造作に左腕を振り、肘で

マタドーラの鼻を強打した。

マタドーラがうめいて飛びのくよりも速く、今度は王ドラが空中に舞い上がり、頭上から跳び蹴りを食らわした。それと同時に、ようやく目を覚ました狼化状態のドラニコフが、吠えたけりながらマサオにつかみかかった。

しかしマサオは、これらの動きも全てかわした。それも実に小さな動きで。そうやって攻撃から逃げながら、両手を王ドラとドラニコフに向け、マサオは赤色に光るエネルギー球を繰り出した。

二人はすんでのところかわし、すぐそばの壁にエネルギー球がめり込み、爆発する音を聞いた。

キッドの放った光線も、全て呆気なく回避された。その様子を少し離れて見ていたドラメッドは顔をしかめた。

（こやつ、できる………！）

今までの敵に比べても、やはり圧倒的に動きがいい。これはひとまず、奥の手 『巨大化』を使うとするか………。

しかし、ドラメッドが巨大化の準備に入ろうとした途端、そちらに背を向けていたマサオが、驚くべき速さでエネルギー球を放った。

ドラメッドは攻撃をともに受け、吹っ飛んで壁にぶつかり、さらに穴が開いて崩れた壁の向こうに見えなくなった。

「ドラメッド！」

ボーン・キングの高笑いが響きわたった。

「どや、大したもんやろ？こいつには一番高い能力を与えたいんだよ。それになんちゅうても、そいつは心が読めるからな。」

「な、なんて言いました、今！？」

王ドラが思わず、うわずった声で聞き返した。

「闘いの最中に、お前らの考えとることが全部分かるんや。だからお前らがどんなことをしようとしとるんか、全てお見通しっちゅうわけや。」

「嘘だろ……………」

キッドが呆然と呟いた。自分たちの攻撃を前もって察知する力に、高い攻撃能力 こんな最悪な組み合わせがあるだろうか？

ゴパアアン！

突然、ドラメッドが吹っ飛ばされた崩れた壁の残骸が、こちら側へと飛んできた。

壁の細かいかけらが舞い上がり、王ドラはゴホゴホせき込んだ。ボーン・キングも驚いた顔になる。

「な、なんや!？」

キングの言葉にかぶるようにして、聞き慣れた脳天気な声が響いた。

「あれえ、みんなこんな所にいたんだあゝ。」

20・突如現れた仇敵（後書き）

まんがタウンの雑誌で読んだボーン・キング編が、気になる終わりを
方をしていたので、自分なりにこんな感じかなと想像して、この話
に登場させました。次回もまた、激闘必見ですっ！（ ）

21・守るために（前書き）

パワーアップしたドラリーニョが行き着いた先は、なんと……！
！？ 感想待ってます

21・守るために

大きな穴の開いた向こう側にいたのは、何か大きなものを二つ抱え上げている、小さな少年だった。

その姿はなんと、マサオとそっくりそのまま同じだった。

「な、何だお前……………」

言いかけて、キッドはふと言葉を止めた。

姿も服装も、今までキッドたちを襲撃してきたマサオと同じだが、一つだけ違うところがあった。……………首に、小さなサッカーボールの飾りがついた首輪を巻いている。

「…ドラリーニヨですか？」

王ドラがためらいがちに尋ねると、少年は壁をまたぎ越えて、部屋の中に入ってきた。その時初めて、彼が抱えているものが気絶したドラメッドとトオルだということが分かった。

少年は二人を地面に下ろすと、王ドラたちをしげしげと見つめた。

「みんな、こんなとこで何やってるの？どうして壁が壊れてるの？」

予想外なことに、声はいつものドラリーニヨと全く変わりなかった。そのことに驚かされて、キッドはドラリーニヨの疑問に答えてやるどころではなかった。

「そ、それはですね……………」

王ドラが慌てて説明してやろうとした時、不意に耳障りな声が割り込んできた。

「なんやねん、そいつは……………おい、マサオ！はよそいつも始末せえ！！」

ボーン・キングだった。せつかくの楽しみを邪魔されたという顔つきで、不快そうにドラリーニヨを見ている。

マサオは言われた通りにドラリーニヨと向かい合ったが、どういふわけかすぐには飛びかかろうとしなかった。……………少し眉をひそめて、けげんそうな表情を浮かべている。自分にそっくりな奴が相手なので、さすがに不思議に思ってるんだろつなとマタドーラは思った。

しかしそれもほんの一瞬のことで、マサオの手からドラリーニョに向かつて、赤いエネルギー球が飛んだ。

ドラリーニョはさつと安全な場所へ移動し、エネルギー球が飛んでいった後を目を丸くして見送っていたが、ふと自分の置かれた状況に思い至ったらしく、慌ててマサオの射程距離内からできるだけ離れようとした。

マサオがそれに追いつくようにして飛びかかる。両手で首を押さえようとしたりしが、ドラリーニョは巧みにするりと逃れ、どこからともなく取り出したサッカーボールをマサオのお腹めがけて蹴りつけた。

マサオもまた、その攻撃を回避したが……王ドラはなんとなく違和感を感じた。何だかマサオの動きが、さっきまで自分たちと闘っていた時とは微妙に違うような……。

「なあ王ドラ……」

マタドーラがささやいてきた。

「マサオの動き……なんかさっきよりも鈍くないか？」

「マタドーラもそう思いますか？」

やはり何か違う。先ほど見せた、あらゆる攻撃に対する臨機応変さの素早さが欠けているようなのだ。

「どないしたんや……！」

ボーン・キングも気づいたらしい。不機嫌そうに顔をしかめている。

「確かになんか変だよな……一人だけが相手だからって手加減してるわけでもなさそうだしよ。大体心が読めるんだから……あ。」

キッドが何かに気づいたような声を出したので、王ドラは振り返った。

「どうしました？」

「いや……今ちよつと思いついたんだけどさ。」

「だから、何をです？」

「ドラリーニヨがあんまり何も考えてねえから、心を読んでも効果がないんじゃないの？」

あ、というような声が、王ドラの口からもマタドーラの口からも漏れた。

「そ、そりゃありうるかもな……」

「ちよつと前にあったことでもすぐ忘れちゃいますからね。そういえば、ずつと前にもこういうことがあったような……」

「シュートオ！」

突然ドラリーニヨが叫んだかと思うと、鈍い衝撃音と共にサッカーボールがマサオの腹へ命中した。

「うぐっ……………」

うめき声を上げて、マサオが悶絶する。ネネとボーちゃんとしんのすけは、その光景を青ざめた顔で見つめていた。

「大丈夫かな？」

「お前がやったんだろ……………」

心配そうにマサオを見ているドラリーニヨに、キッドが呆れた声をかけたその時、

ボシュッ！

白い煙がもくもくと立ち上り、その中に、黄緑色のネコ型ロボットに戻ったドラリーニヨが目をぱちくりさせて立っていた。

「…戻っちゃいましたね。」

「トオル、ドラリーニヨが薬を飲んだのってどれぐらい前だ？」

「んーと…せいぜい五分ぐらい前ですかね。」

「ずいぶんと切れるのが早いであーるな…。」

「物忘れが激しいからじゃね？」

ドラえもんズのメンバーたちがてんで勝手なことを言っているとドラニコフが突然、ガウガウと吠え出した。

何事かとドラニコフを見たキッドたちは、目を丸くした。

ボーン・キングが怒りの形相を浮かべて、いつの間にか野原一家のすぐ近くに立っている。ナタリー・コツバーンはしんのすけの襟首を捕まえて、持ち上げていた。ボーちゃんが震えながらも、後ろにいるネネを守るようにして立っている。

「しまった……………！」

キッドが慌てて駆け寄ろうとしたが、キングの蹴りを食らいそうになって後ずさった。

「ちつ、あんなアホに最後の四天王がやられるとは思わへんかったわ……………まあええ。こいつらをわい自身の手でやれるんやからのお。」

ナタリー、そのタヌキどもを始末しとけっ!」

「はい、キング様。」

ナタリーが笑みを浮かべてしんのすけを離し、こちらへ近寄ってくる。身構えようとした王ドラとマタドーラを、キッドが不意に腕を伸ばして止めた。

「待て。この女は俺がやる。」

王ドラがびっくりした顔になって、キッドを見た。

「そりやまた、どうしてです?」

「だってお前らは全員パワーアップして闘ったつてのに、このままだと俺の出番がなくなるじゃねえか!」

「そんなことで……」

王ドラは呆れながらも、仕方ないなという表情で肩をすくめた。

「…まあいいでしょう。ただし、そんなこと言っというて負けたりしたら承知しませんよ?」

「バーカ、誰が負けるかよ、こんなおばさんに。」

「おばさんですって!?!」

ナタリーの顔から笑みが消え、代わりに激しい怒りの表情が現れた。

多くの女性がそうであるように、彼女もまた『おばさん』という言葉には敏感らしい。

「行け！お前らはしんのすけたちを守るんだ！！」

早くも薬の入ったびんを取り出しながら、キッドが叫んだ。

暗い部屋の中で、小さな人影が不安そうに身体を揺らしつつ、モニター画面に映し出される光景を眺めていた。

みんなは大丈夫だろうか。あの骸骨みたいな恐ろしげな奴と、野原一家の関係を知った時は正直信じられなかった。まったくあの家族

は、今までどれだけの面倒事に巻き込まれてきているのだろうか？

……それに、あの人はうまくやってくれるだろうか。

人影はふとモニター画面から目を離し、自分の手の中に視線を落とした。

その手の中で、何かが虹色に輝いている。光はどんどん強くなってきたいて、今や目を細めないと直視できない。

さっきからずっと光りっぱなしだ……これもある人と関係あるのだろうか？

ぼんやりと、モニター画面に目を戻した人影は、次の瞬間、びくつと身を震わせた。

……さっきまで女の人と闘っていたドラ・ザ・キッドがいなくなり、代わりに一人の少年が光線銃みたいなものを撃ちまくっている。ただしその少年は、キッドがかぶっていたのと同じカウボーイハットを頭に乗せていた。

その少年の顔は、しんのすけにそっくりだった。

「…ったく、何でオレがしんのすけと同じ姿にならなきゃならねえんだよ！」

キッドは自分でもなぜか分からないが無性に腹が立って、光線銃の銃身でナタリーの足を殴りつけた。きゃあと叫んでナタリーが飛びのく。

「しょうがないでしょう。自分で飲んだんですから。」

王ドラの返事はそっけない。

「それとも何ですか、ネネさんの姿の方がよかったとでも？」

「いや、そういう意味で言ったんじゃない…」

ちなみに言っておくと、二人はこの会話を、激戦を繰り広げながら交わしていた。

キッドは一人、ナタリーに立ち向かい、あとのドラえもんズのメンバーはボーン・キングに打ちかかって野原一家やネネたちを救い出そうと頑張っていた。

ナタリーはキッドに、

「あつという間に片づけてやるからね、このタヌキ！」

などと強気な言葉を吐いたが、肝心の力自体はそれほどものでもなく、むしろキッドに押されつつあった。パワーアップしたキッドの、もともと百発百中である狙撃の腕はさらに上がり、キッドは得意の空気砲ではないとはいえ、光線銃の自在に操ってナタリーに巧みに撃ち込んだ。

（ちっ………こんな時、空気砲だったら一発で気絶させられるんだがな。）

強気で元氣なキッドだったが、彼は誰かを殺すなんて考えるのも嫌だった。光線銃を使わず、今まで空気砲を愛用してきたのもそのためだ。

光線銃では、本気で当てたら死んでしまう可能性がある。いくら敵でも、命まで奪う気にはなれない。

「おりゃあつと！」

キッドは絶好のチャンスをつかんだ。………ナタリーの足元に光線が当たり、大きくよろめかせることに成功したのだ。

間髪入れずにキッドは飛びかかり、銃身でナタリーの頭を打った。倒れ込んだナタリーの首筋を、もう一回叩く。

それでナタリーは、もう完全に動かなくなった。

「ナタリー……！」

ボーン・キングが目を見開いた。まさかこれほど早く敗れるとは、思ってもみなかったのだ。

彼は五体ものネコ型ロボット相手に、指に仕込まれたボーン・フィッガー・ピストルで応戦していた。骨でできた弾にかすられ、身体

のあちこちに傷ができていたが、それでも王ドラたちはひるまずに頑張っていた。

自分たちの手に、みんなの命がかかっているのだ……負けるわけにはいかない！

「おい、お前ら！手伝っぜ！！」

キッドがしんのすけと同じ声で叫び、キングめがけてさつと光線銃を撃った。

キングはくるつと身を返すと、フィンガー・ピストルを一発撃った。キッドもまた、軽い身のこなしでよける。そして銃を持つ手を見ることすらせずに、光線を続けさまに放った。

ボーン・キングは予想外の事態に困惑し、腹を立てていた。

ナタリーがあんなにすぐやられたのは予想外だった……。それにこいつらの、一致団結した闘い方。それを見ていると、何だかむかむかしてくる。

野原一家への復讐のために春日部を襲ったというのに……こんな奴らが来るとは……。

ボシユツ！

「あ、キッドも元に戻ったね！」

「ちえ、力が増えたみたいですねっ！ 気持ちよかったのによ。」

「あれ、さっきは嫌がってませんでした？」

「うるせえ！」

軽口を叩きあいながらも、このタヌキたちはじわじわと、しかし確実に、自分を追いつめようとしてくる。

(…こいつは一つ、こいつらの意気を吹っ飛ばすようなことをせなあかん…)

でも、何がいいだろう？

野原一家とネネとボーちゃんはひとかたまりとなって、部屋の隅でじっとしている。……しかしなぜかトオルは一人だけ離れて、目を細めて闘いの様子を見守っている。

それを見た瞬間、キングの頭に名案が浮かんだ。

キングは足元にかぶりついているドラニコフを攻撃しようとして……突如、右手の指の向きを変えた。

まっすぐ、トオルの胸へと向けて。

ボン・フィンガー・ピストルの鳴る、乾いた音が響きわたった。

21・守るために（後書き）

ドラえもんズが善戦する中、突如響いた無常な銃声……次回は驚愕の展開が待つ！？乞うご期待！

22・ボーン・キングの驚愕（前書き）

風間くんが……撃たれた！？次の展開はこの後すぐっ！ちょっと短めです。感想待ってます

22・ボーン・キングの驚愕

響きわたる銃声。一拍おいて、どさつと倒れる音。

ただ、それだけだ。さっきまでとは一転、静まりかえった部屋の中で、ドラえもんズもしんのすけたちも呆然となって、倒れているトオルを見下ろしていた。

トオルは目を閉じていた。胸に小さな穴が開いているのが見えた。そこから赤い色がにじんできて、服を徐々に染めていくのも分かった。

それでもみんなは、目の前の光景を理解できずにいた。

突然、ボーン・キングが笑い出した。

「どや？わいにかかれば、お前らが必死に守ろうとしたもんもあっちゅう間に壊したれるんや。思い知ったか。」

「……………」

誰も答えない。みんな、トオルの姿から目を離そうともしない。

（どーやら狙い通り、全員意気消沈して闘うどころとなくなったみたいやな……………」

キングはニヤリとほくそえんで、ボーン・フィンガー・ピストルをキッドの頭に向けた。

「まあ安心せえや。すぐお前らもこのガキと同じ所に連れてつたる……………」

ピカッ！

「うおっ！ な、なんや！？」

キングはたじろぎ、思わず後ずさりした。

キッドたち、ドラえもんズの身体から、まばゆいばかりの虹色の光が放たれ出したのだ。

キッドの帽子から。王ドラの袖から。マタドールとドラメッドとドラリーニョのポケットから。ドラニコフのマフラーから…………。

光に導かれるようにして、キッドたちは一斉に、光を放っているもの。親友テレカを取り出した。

親友テレカはこれまでも見せたことのないような、強い輝き方をしていた。でも直視できない、きつい光ではない。まるで春の太陽のように柔らかな輝きだった。

「一枚足りないのに……………」

王ドラが呟き、そうっとテレカを、いつものように頭上へかかげる。他のメンバーたちも同じようにした。

親友テレカの放つ虹色の光がますます強烈になり、一つに寄り集まって、次第に巨大な光の玉となり膨らんでいく。

みんなのトオルを思う気持ちが、親友テレカの光になったんだ
そうドラリーニヨは思った。

虹色の玉はどんどん、どんどん大きくなり、やがてゆるやかに回転
しながら、光の渦へと変化し始めた。

もう膨れ上がれないまでに、その光の渦が大きくなった時、不意に
渦の回転が止まった。そしてぎゅうつと内側に向かって、すばまっ
たかと思うと…………。

パァーン！と、ものすごい音と共に、光の渦が弾け飛んだ。

無数に弾けた光の粒子が、キングめがけて一直線に降り注いでいく。

キングの悲鳴が聞こえた。

しんのすけたちはほとんど凍りついたようになって、その光景をじ
っと見守っていたが、しんのすけの目からはまだ涙が流れていた。

キッドたちは、すさまじい痛みを全身に感じていた。

自分たちの気力を糧にしながら、親友テレカから虹色の光があふれ出していく。悲鳴をあげ、テレカを離してしまいそうになるのをこらえながら、キッドは親友テレカをつかむ手に、さらに力をこめた。

キングがよろめいている。弱ってきている。あと一押しで、倒せるところまで来ている。

だが、もうダメだった。 気力が、限界を告げている。

キッドは痛みにくわばる全身の力を、ゆっくりと抜いていった。

我に返った時、キッドは床に膝をついていた。

周囲を見回すと、王ドラたちもてんでに座り込んで、夢から覚めたような顔をしている。……それぞれの足下には、一枚の親友テレ

力が転がっていた。

キングもまた、膝をついていた。黒い服はぼろぼろになり、銃弾でも傷つかない頑丈な骨の身体のうちこちが、無惨にかけてしまっている。

「キング様……………！」

目を覚ましたナタリーが、こわごわ手を伸ばしてキングを立てさせた。キングはよろめきながらも立ち上がると、怒りと困惑の入り交じった顔で、ドラリーニョたちと親友テレカをじっと見つめた。

「な、なんなんや、お前らは！？意気消沈しとったやないか！それにわいを傷つけられるのは、ボーン・ブレードだけのはずやのに……………」

「……………キング。あんた、相変わらず成長してないね。そんなことしたら逆効果だって、まだ分からないの？」

(……………!……………?)

突如、今まで聞いたことのない新しい声が割り込んできて、敵味方関係なくみんな目をぱちぱちさせた。だ、誰だ？

さっと、地面をなでるような音がした。何気なくそちらを見た。やった王ドラは、ぎゃっと叫んでそばにいたドラメッドに抱きついた。

倒れていたトオルが、半身を起こしていた。右手で口から出る血を

ぬぐっている。

「お、お、お。」

さすがのボーン・キングも言うべき言葉をとっさに見つけられず、壊れたラジオみたいな声を出した。

「お、お前、何で生きとるんや！わいのフィンガー・ピストルの弾は、完璧にお前の心臓を貫いたはずやで！」

トオルはキングを見たが、質問には答えなかった。……かわりに髪と顔に手をかけ、ぐいと引っ張った。

キッドたちと、しんのすけたちの目が点になった。

まるで木の皮か何かのように、トオルの顔がペロリとはがれた。髪の毛も呆気なく取れ、下から見事なまでに真っ白な、滑らかで長い髪が現れた。肌も同じくらい白く、瞳は鮮やかな赤だ。唇とまぶた

が、なぜか鮮やかな青色に染まっている。

さっきまでトオルが立っていた所に、白髪に赤い目の美少女が座っていた。

「……………お、おい。」

やっこのことでキッドが声を出したが、少女はそれがまるで聞こえないかのように反応せず、こちらを見ようとしなかった。ただ一心に、キングの顔を見つめている。 キングはなぜかぶるぶるとめどなく震え、立つのさえままならない状態だった。

やがてその口から、途切れ途切れに声がもれた。

「…………お……おかん…………」

束の間、みんなキングの言葉の意味が分からずにぽかんと立ち尽くした。

「…………え？」

22 ポーン・キングの驚愕（後書き）

なんと現れた美少女は、キングの……母親っ？ええーっ、どういうこと！？……というわけで、次回もお見逃しなく！！（・・ハ*）

23 ポーン・クイン（前書き）

こちら辺から私の妄想ネタが満開します。ご注意ください（^^；）

23 ボーン・クイーン

「久しぶりね、キング。」

誰もが何も言えずにいる中、美少女は静かに言った。

「ボーン・クイーンのあたしの目の届かないところで、なーんかこそそやってんなあと思ってたら、こんなことやってくれちゃってるなんてね。」

「クイーン？」

しんのすけが、ぼんやりと淡い声を出した。彼がこんなしゃべり方をすることを、キッドは初めて耳にした。

「女王様なの？」

「うん。」

少女はようやくしんのすけに目を向けて、にっこりした。

「よく分かってんじゃない。感心感心。」

何だかお気楽そうな女王様である。

「そもそもボーン・バンパイアってのはそう有害な種族じゃないのよ。人間の骨を吸うことは吸うけど、正確に言えばカルシウム分を少しいただくだけだから、骨抜きになったりはしないの。」

淡々とした少女の　　ボーン・クイーンの話、野原一家はぼかんと口を開けて聞いている。

「でもあたしの一人っ子の、こいつだけは……いつも人間の骨を、それこそ骨抜きになるまで吸いまくっていた。もちろん、あたしの知らないところだね。ほら、だからこいつはこんな、骸骨みたいな外見になってしまっているのよ。本来あたしたちは、そう人間と変わった姿をしてるわけじゃないのにね。……この、赤い瞳以外は。」

クイーンは自分の目を指さして、くすくすつと笑った。

「あたしの夫が死んで、あいつが次期のボーン・キングになった時には、あたしもあいつの動きが怪しいと思い始めていた。そこで信頼できる部下を使って、見張っていたら……」

不意に、クイーンの赤い瞳に光が瞬いた。 深い怒りと、悲しみをたたえた光だった。

「あろうことが、こいつは配下を引き連れて、人間たちを家畜化しようとしていた。……………あたしたちは人間がいないと、生きていかれない。つまり人間が死んだら、骨を吸えずにあたしたちも死ぬということ……………そのことはしっかり教えてあったのに、あいつがそれでも人間たちを征服しようとしていると知って、あたしは愕然としたわ。」

突然、キングが口を挟んできた。

「お、おかんは昔っから、人間びいきなんや！人間どもを家畜化すれば、好きなだけ骨が吸える……………」

小さな母親にさつとにらまれて、ボーン・キングはまた言葉を失った。クイーンは静かな、しかし怒りのこもった口調で、話を続けた。

「ええそうよ。あたしは人間という種族に興味を持っている。短い命とすぐに衰えてしまう身体を持った、弱い種族であるのは確かだけど、彼らには私たちにないものがある。……………短いからこそ、強く輝く命や思い。それは前々から、あたしがあこがれていたものでもあった……………」

クイーンは、ここでちょっとため息をつく、自分の細い右腕をちよん、とつついてみせた。

「……………ボーン・ブレードは、あたしの右腕の骨から、あたし自身の手で作ったものよ。」

「な、なんやと!？」

キングが目をむいた。それにはかまわずに、クイーンは続ける。

「それを人間の若者に渡したのも、あたし。あんたが首をはねられたのを知ったあたしは、これで危険は去ったと思って眠りにつくことにした……………女のボーン・バンパイアの寿命は、とても長いからね。でも危険は、まだ去ってなかった。こいつは人間との間に子孫を残していた。そうしてあたしが眠っている間に、こいつが復活して……………あとは、あんたたちの知ってる通りよ。」

ボーン・クイーンは、呆然と座り込んでいる野原一家にうなずいて

みせた。

その時ドラリーニヨが、口調も内容もおよそ場違いなことを尋ねた。

「ねえねえ、本物のトオルはどこに行っちゃったのお？」

「あ……………いけない、忘れてた。」

クイーンはしまったというように口に手を当て、その体勢のまま、王ドラを見た。女の子が大の苦手の王ドラは、思わずびくつと後ずさる。

「な、何です？」

「あんた、悪いけど親友テレカでこっちに来るように連絡してくんない？」

「は？」

「トオルくんに渡したんでしょ、親友テレカ。」

そうだった。王ドラは慌てて足元の親友テレカを拾い上げた。

あまりに慌てていたので、王ドラはボーン・クイーンがなぜか親友テレカのことを知っているらしいことを、不思議に思わなかった。

トオルは 本物のトオルは、連絡がついてから数十分もたたないうちに、ドラリーニヨが開けた壁の穴から入ってきた。

「風間くーん！」

「トオルーッ！」

しんのすけとドラリーニヨが、ほとんど同時に声を上げてトオルの元へと駆け寄った。しかしトオルは、二人に手を握られながらもそちらを見ようとはせず、ただじつとボーン・クイーンに視線を注い

でいた。

ボーン・クイーンが、微笑んだ。

「キング、あんたはよっぱあたしが怖かったのね。眠っているあたしを棺桶に入れて、わざわざここまで運んできてくれるなんて。目の届く場所に置きたかつたんでしょう？でも残念ながら、それが裏目に出ちゃったのよ。」

あんたがあたしを棺桶に入れた時、あたしはもうほとんど目覚めかかっていた。完全に目が覚めた時にはびっくりしたわよ。見たこともない場所で、しかも棺桶の中に寝かされてるんだもの。まあでも、あたしはすぐに真相を突き止めて、これはしばらくじっとしてた方が安全だと思った。あたしにバレたと分かったら、あんたはやけになって人間たちを殺すかも知れないからね。でもこっそりモニター画面を棺桶の中に入れて、様子はずっと見てたのよ。でもじっとして何もしないのは、嫌だった……だからあんたたちを読んだのよ。」

キッドが弾かれたように顔を上げた。他のメンバーたちも、啞然としてボーン・クイーンの可愛らしい顔を見つめている。

しばらくして、ようやくドラマメッドがうわずった声を出した。

「お、お主が………読んだ、と？しかし、あれは………あれは、確

か………」

「親友テレカが暴走したんでしょ。」

クイーンはにつこりして、白い髪に触れた。もうドラえもんズのメンバーたちは頭がしびれたようになって、どうやって反応したらいいものか見当もつかない。

それに畳みかけるかのように、ボーン・クイーンは凜と言いつつ放った。

「親友テレカを作ったのは、あたしなのよ。」

23 ポーン・クイーン（後書き）

次回はなんと、親友テレカ誕生の秘密に迫る……！！？
ちろん私のねつ造ですので、悪しからずm（＿）（＿）m

も

24・親友テレカの秘密（前書き）

親友テレカの秘密が、とうとう明らかに！??? ねっ造自重ですっ
汗）。

24・親友テレカの秘密

親友テレカ。

それは、ドラえもんズのダイヤモンドより堅い友情の証だった。

ドラえもんたちは数々の試練を乗り越え、難関をくぐり抜け……
そして、親友テレカを手に入れたのだ。

親友テレカは強大な力を持つ伝説の道具で、しかも真の友情を持つ者たちでないと所有することができない。ネコ型ロボットたちが四次元ポケットから出す便利道具とは、いわば別格の存在だった。

そういえば、一体この道具がどうやって作られたのか、考えてみたことは一度もなかった。

「……………今、何て言った？」

キッドがやつとのことで、かすれた声を出した。自分の手の中にある親友テレカの温かさを、ぼんやりと感じながら。

「だから、親友テレカはあたしが作ったんだってば。」

あっさりそう言って、ボーン・クイーンは一つ小さなあくびをした。

「えーと……………あれは、ざっと千年ぐらい前のことだったかな。」

「ちょ、ちょっとストロップ！」

キッドは慌てて割り込んだ。

「え？」

「お前……………一体年いくつなんだ？」

「やあね、女性に年齢を聞くなんて失礼よ。あたしは……………あれ、何歳だったかしら。」

とにかく、自分でも忘れてしまうほど長い間生きているということらしい。

「ま、いいか。あたしがまだ生まれてからそう経ってない頃のことだったんだけど、あたしはある七人組の人間の男女に会った。彼らは本当に仲がよくて……まあケンカとかもよくしてたけど。」

そう言いながら、ボーン・クイーンはちらつと王ドラとマタドローの方を見た。

「でも、お互いのことを本当に信頼し合っているのがよく分かったわ。その時あたしたちボーン・バンパイヤー族の中では、相当ピリピリした状態になっていたの。誰がボーン・バンパイヤーたちの首領になるのか、兄弟たちの間でもめててね……あたし、兄弟姉妹が全部で10人もいたのよ。もちろんあたしもその争いに巻き込まれて、もういい加減嫌になってきたところだったから、あの七人と過ごす時間はとっても楽しかった。でも。」

不意に、クイーンの目に深い悲しみが浮かんだ。

「あたしのすぐ下の妹が、それに目をつけた。妹はその七人を捕まえて……あたしの弱点を……聞き出そうとした……」

当然何も知らない七人は、クイーンの妹に激しく責めつけられ、クイーンがそれを知って駆けつけた時には既に息が絶えていた。

お互いをかばうようにして、死んでいたという。

クイーンの瞳の暗さが増した。

「…あたしは妹を殺した。」

誰も……しんのすけでさえも、身動きしなかった。

「あたしのせいで七人が死んだってことが、あたしには分かった。……だから、あたしは七人の骨を使って、彼らの友情をそこに残すことにした。」

キッドたちがげげんそうな表情を浮かべたのを見て、クイーンは薄く笑った。

「あたしたちボーン・バンパイアは、自分の骨に自分の思いを宿らせる技を持っているの。人間でやったことはなかったけど、このままほっておくのはどうしても嫌だったから……あたしは七人の胸の骨を使って、一枚ずつカードを作っていた。」

王ドラが、呟くように言った。

「それが……親友テレカ？」

「そう。七人の友情はよっぽど強かったらしくて、いざ完成してみるとあたしの想像よりもずっと強力なものができあがった。また何

かに利用されちゃかなわないから、あたしは妹の住んでいた屋敷の最深部に、それを隠した。…………妹は家の中に色んなトラップを仕掛けていて、よほど信頼し合っている者たちが協力しない限り、誰も侵入できないみたいだったから。」

キッドたちは顔を見合わせた。クイーンは不意に、おかしそうに笑い出した。

「でも正直びっくりしたわ。誰かが親友テレカを手に入れたのは知っていたけど、いざ呼んでみたらあんなたちみたいなタヌキロボットだなんて…………」

「ネコ型ロボットだ。」

キッドがムツとして言い返した。

「でも、あんなたちの友情は本物なのね…………もう一人いたみたいだけど、あたしが少し力を貸してやってただけでこんな力を発揮できたなんて…………」

クイーンが、どこかしみじみとした口調で言って、トオルに目を向けた。

「あんたに変装してここに来てみた甲斐^{かい}があっただってmondaw。」

トオルは曖昧な笑みを浮かべると、はっと顔を上げてキッドに駆け

寄り、ずっと手の中に握りしめていた親友テレカをそつと差し出した。キッドは思わず笑顔になり、しっかりと両手でそれを受け取った。

「まあ渡したのが全くの無駄ってことにならなくて、よかったぜ。」

「それにしても、親友テレカの背後にこんな重い過去があるとは知りませんでしたね。」

これは王ドラの発言だ。

「まったくだぜ。ていうか、これ骨でできてんのか……」

改めて親友テレカをしげしげと見つめるマタドラ。ドラマッドも同じようなまなざしを、親友テレカに注いでいる。しかしドラリーニヨとドラニコフは、そんな話はどうでもいいのかそれともただ単に忘れてしまったのか、親友テレカをしまつてサッカーボールのりフティングを始めたか、何もせずにはーっとしたりしていた。

不意にクイーンが立ち上がったので、みんなびくつとしてそちらを向いた。

「やてと。」

さっきまでとは打って変わってきびきびした口調で、ボーン・クインは話し始めた。

「キングのことはもういいとして、こいつがやったことの後始末をしなくちゃね。」

「そうですね……………」

言いながら、王ドラは暗い気持ちでいた。これだけの人間を吸血鬼化し、ボーちゃんやネネの心に傷をつけた……………それらのことを、どうやったら後始末できるといふのだろう？

王ドラのその思いは、ちゃんと顔に出てしまったらしい。ク
イーンが王ドラを見て、クスツと笑った。王ドラは顔が赤くなるのを感じた。

「……………そんなに心配しなくても大丈夫よ。」

クイーンは静かにそう言った。

「こついつ時に対処する方法が、ちゃんとあるから。」

その瞬間、キングの顔が明らかにこわばった。

トオルと野原一家は、ドラマメッドのじゅうたんに乗って、静かに春日部の空を滑空していた。

下から、歌声が響いてくる。何と言っているのか分からない、どこか不思議な旋律を持つ歌。聞いていると、胸の中を温かく力強い風が駆けめぐっていくような気がする。

ボーン・クイーンの歌声だった。

ネネとボーちゃんは、じゅうたんの上で折り重なるようにして眠っている。春日部の人々も、今頃同じように眠りにについていることだろう。

ネネの閉じられた目から涙がこぼれているのをぼんやりと見つめながら、トオルはクイーンのことを思い返していた。

「あたしはこれから一族に代々伝わる、人間に無理やり注入された
ボーン・バンパイアの体液の力を鎮め、消し去る歌を歌う。」

クイーンは静かにそう言った。 ボーン・キングはナタリーを
置いて、どこかへ逃げてしまっていた。

追おうとしたキッドたちをクイーンは止め、

「ほっとけばいいわ。」

とだけ言って、まるで意に介していないようだった。

「あたしが歌い始めたら、吸血鬼化した春日部の人々は眠り始める
はず。でも一応、あんたたちは何か道具でも使って隠れてなさい。

それから。」

クイーンはキッドたちとトオルと野原一家に近づき、少し離れた所
で疲れたように座り込んでいるネネとボーちゃんには聞こえないよ
う、小さくささやいた。

「 この歌には、キングのせいで生まれた苦しみを消す力もあ
るの。つまり、あいつに操られていた時の記憶も消えるってわけだ
けど……」

ここでやや口ごもり、クイーンは軽くため息をついた。

「……当然、あの鼻水くんの記憶も消しておくべきだと思う。あの子は操られたふりをしてあんなたちに攻撃したことで、相当自分を責めているはずだから。それに、ネネも。」

ネネの名前が突然出てきたので、みんな顔を上げてクイーンを見つめた。クイーンは心なしか、痛みをこらえているような顔をしている。

「……あの子はキングの計画の初めから、あいつに利用されていた。あの花畑は、生き物に対して眠気を誘うもの。あそこに閉じ込められている間、ネネの身体は確実に衰弱していった。だからあたしはこの黄緑色のロボットくんをそこに送り込んで、助けることにしたわけだけど………」

ドラリーニョとトオルは驚いて顔を見合わせた。

「……でもあんな話を聞かされて、さぞ心を痛めているだろうな。」
マタドーラが付け加えるように言うと、クイーンは大きくうなずいた。

「そう、それなのよ。」

「……だからあたしは、ネネの記憶も消してやった方がいいと思ってる。」

何か言おうとしたしんのすけを、キッドは手を上げて遮るような仕草をした。そして優しい目でネネをちらりと見やって、低く呟いた。

「オレも、それが一番いいと思うぜ。何も心の中に、つらい思い出を残してやることなんかねえ。……………ただ、しんのすけ、そしてトオル。」

二人の顔に強い視線を投げかけながら、キッドはゆっくりと、噛んで含めるように言った。

「約束してくれ。あの子と絶交するようなことは、もうしないって確かに腹にすえかねることもあるだろう。どんな奴にだって、いい所と悪い所があるからな。……………オレらだってそうさ。ケン力をすることもよくある。」

王ドラとドラメッドが、うなずきながら聞いている。

「でもな、そういう所を全部ひくくめて受け入れられるのが、本当の友達ってもんじゃねえか？

お前たちは今回のことで、危うく友情を引き裂かれるところだった。でもネネやボー、マサオの記憶を消してもらえれば、またやり直せるだろう？

秘密を抱えるのはいい気分じゃねえかも知れないが、これからのこ

とを考えれば、そうするのが一番いいと思うがな……………」

これで、春日部を襲った災厄が終わる。

ネネやボーちゃん、マサオも、元通りになるだろう。またカスカベ防衛隊を結成して、みんなで遊ぶ毎日が来るだろう。

「あら……………」

みさえが、不意に声を上げた。

「塔が……………」

春日部の中心にそびえていた巨大な金属塔が、てっぺんから消え去っていく。……………崩れていくのではなく。まるで風に吹き飛ばされた砂のような、細かい粒子となって空中へ拡散していく。

その光景を、みんなと一緒に声もなく見つめ、ボーン・クイーンの歌声を聞いているうちに、ふとトオルの目から涙があふれてきた。

後から後から流れてきて、止まらない。気がついた王ドラが慌て始めた。

「わーど、どうしたんですか、トオルくん。急に泣いたりして…」

そう言いながら、王ドラは今しもマタドーラのヒラリマントでトオルの涙をふき取るうとした。

「何で泣くの？」

ドラリーニョもおろおろしている。黙って見ていたドラニコフが、自分のマフラーが汚れるのもかまわずに、タオルの顔をふいてくれた。

……優しいロボットたちなのだ、本当に。

歌声が、春日部の夜の闇を静かに揺らしていった。

24・親友テレカの秘密（後書き）

恐らく次回で、この小説は完結……ですが、少し曖昧な部分があるか
と思われます。その理由は、なんと次回の後書きで明らかに！？……
……最後までどうぞ、お付き合い願います。ごめんなさい！

25・終わり（前書き）

これにて完結……ですが、まあ最後まで読んで下さい。重要なお知らせもありますので（＾－＾）

25・終わり

夜の闇に包まれた春日部山の中を、走る人影が一つあった。

ボーン・キングは痛む身体を引きずり、ボロ同然の衣をまとい、
激しく息を切らしながら駆けていた。

「くそ……………予想外なことばかりや。なんでおかんまで、出てこ
なあかんねん……………」

それらさえなければ、自分の復讐は簡単に果たせていたはずなのに
……………！

足がもつれ、キングは地面に倒れ込んでしまった。口の中に砂が入
ってくる。

「くっ……………」

顔を上げたキングは、目の前に覆いかぶさるようにして立っている小さな影に気づき、一瞬ぎよっと目を見開いた。

「……………なんや、お前か。」

思わず安堵のため息がこぼれる。そんなキングの姿を見下ろしながら、少女の無表情な声が、その場に響いた。

「ずいぶん手ひどくやられたようですね、ボーン・キング。」

「ふん、こんぐらい何ともないわ。……………そや、ちようどええ。完全に隠れるようなところに連れてってくれや。少なくともおかんがいなくなるまでは、わいは隠れとった方がええからな。」

影は何も答えなかった。代わりに、音もなくすうっと、キングのすぐそばへ歩み寄った。

キングは身を堅くした。何をする気だ？

しかし影は、別段何もせずにキングのそばを通り過ぎた。

「 役立たず。」

次の瞬間、キングの全身から炎が上がった。

キングは束の間、ぽかんとして自分を見つめた。……………そして、絶叫し、転げ回り、何とかして身体を呑み込む炎から逃れようとした。しかし、火の勢いは強かった。みるみるうちに、キングの骨が黒く変色していく。

「ぐああっ！……………何で、何でやつ！？わいが何をしたって……………」

「キングさん。あなたは、約束を破りましたね。」

感情を一糸も交えずに、声が静かに言った。

「や、約束？そんなもん……………」

「風間トオルに、直接には手を出さないという約束です。」

一瞬、その場に沈黙が満ちた。

「で、でも……………風間トオルは死んどらんやろ！？わいが撃ったんは、おかんやったんや！」

「あなたはそれを分かっていたわけじゃなかったんでしょ？」

声は冷ややかに言った。

「もう少し使えるかと思っていたのですがね……………残念ですよ、ボ

ーン・キング。」

キングはさらに何か言おうとした　　が、焼けた骨が一拳にがら
っと崩れ、灰に変わり、キングの身体は崩された積み木の城みたい
に、一気にぺっちゃんこになった。

影はそちらに目を向けようとせず、しばらくじっとたたずんでいたが、ふところから何かを取り出して操作し、小声でしゃべり出した。

「私です。　　はい、ボーン・キングはダメでしたが…さっき始
めました。……あのロボットたちは、使えるんじゃないかと……
…」

タイムマシンで家に到着した途端、みさえは泣き出した。ひろしがみさえの肩を抱くようにしながら、キッドたちに何度も礼を言っている。

春日部はもう、すっかり元通りになっていた。ネネたちも、吸血鬼化された人々も記憶を消され、みんなキッドたちの手によって家に帰されている。明日の朝になれば何事もなく目覚め、いつも通りの日常が始まることだろう。

ボーン・クイーンは歌を歌い終わると、忽然と姿を消していた。

もう時刻は真夜中になっていたが、しんのすけとトオルはこれまでになく目がさえていた。王ドラが即行で調合した薬品のおかげで、トオルはもう男の子に戻っている。

静かな夜を取り戻した春日部を窓越しに見つめているうちに、命がらから逃げ出したあの日が ドラえもんズのメンバーたちに助けてもらった時のことが胸に迫ってきた。

「ひま、おうちにやっと帰ってこれたゾ。」

しんのすけが呟くと、しんのすけの腕の中でひまわりが首をよじり、こちらを見上げた。その目に明るい色があるのを見て、しんのすけは心が温まるのを感じた。

「みんな。」

不意に呼ばれて、キッドたちは振り返った。

トオルが何だかもじもじしながら、こちらを見つめて立っている。

「みんな……………」

トオルは口ごもった。

自分が何を言いたいのか、不意に分からなくなってしまったのだ。胸にあふれている思いがあまりにもたくさんありすぎて、何と云ったらいいいのか分からない。

ようやく口から出たのは、とても単純な言葉だった。

「……………」
「ありがとう……………」

言ってしまうと、急にふっと楽になった。

キッドたちは顔を見合わせたが、何に対するお礼なのか問おうとはしなかった。

「これから、色んなことがあるんだろうな。」

キッドがトオルとしんのすけを交互に見つめながら、言った。

「でも、お前らならきつと、俺たちに負けなくらいの親友どうしになれるぜ…………仲良くするんだぞ。」

二人の顔に笑みが浮かぶのを見て同じようににつこりしながら、キッドたちはゆつくりと身体の向きを変え、タイムマシンが置いてあるタイムホールへと向かい始めた。が、突然、ドラリーニヨがくるりときびすを返した。

「ドラリーニヨ、どうしたであるか？」

慌てて止めようとするドラメッドの手を、ドラリーニヨはやんわりと振り払った。

「みんな、ちょっとだけ待ってて。」

そう言うってから、ドラリーニヨはトオルに近づいた。右手を後ろに回して、何かを隠しているような格好をしている。

「はいつ、これあげる！」

ドラリーニヨはトオルの鼻先に、背中に戻していた右手をぐつと突き出した。 げんそうな顔をしていたトオルの目が、大きく見開かれる。

そこにあつたのは、ドラリーニヨが首にまいているものとそっくりな、小さいサッカーボール付きの首輪だった。

「これ……………」

息を呑んだトオルに、ドラリーニヨは無邪気なにこにこ顔で言った。

「これあげるから、トオル、僕のこと忘れちゃダメだよ！僕もトオルのこと、忘れないようにするから！！」

「ドラリーニヨ……………みんながドラリーニヨみたいに物忘れが激しいわけじゃないんですよ。」

呆れかえった王ドラの声。ドラリーニヨはえへへと照れ笑いを浮か

べ、それでもちゃんとトオルに首輪を押しつけて、みんなの元に戻った。

「ばいばーい、お便器で。」

「たいやうい。」

しんのすけとひまわりが、タイムホールへ消えていくキッドたちの背中に声をかけた。

最後にドラリーニョがタイムホールによじ登った時、トオルは思わず叫んだ。

「ドラリーニョー！」

ドラリーニョはくるっと振り向いて、トオルと視線を合わせた。トオルは何と言うべきか、また迷っているような顔をしていたが、やがて、大声で言った。

「ドラえもんさんに、よろしく！」

ドラリーニョの顔に、真夏の太陽のような明るい笑みが浮かんだ。

その笑顔のまま、ドラリーニョはタイムホールの中、仲間が待つ所へと、入っていった。

おわり

25・終わり（後書き）

いきなりですが、完結いたしました。読者の皆様、評価・感想を下さった皆様、本当にありがとうございますm(_____)mこんな雑で未熟な小説に付き合っていただき、マジで感涙です(T^T).....さて、またまたいきなりですが.....この話、かなり謎めいた終わり方をしているかと思います。なぜなら、この物語には、続編があるからです。(。。(エーッ!?!.....内容などは、またそのうち分かる.....と思います、よ(ニヤッ)。お楽しみにではっ(ハ・ハ)ノ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3734d/>

クレしん＆ドラえもんズ～ホラー＆ファンタジー劇場～恐怖のカスカベ吸血鬼

2010年10月9日13時34分発行